

Title	ラ・アラウカーナ : 第一部
Author(s)	エルシーリャ, アロンソ・デ; 吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1992, 5, p. 1-325
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80051
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アロンソ・デ・エルシーリャ

ラ・アラウカーナ

(第一部)

吉 田 秀 太 郎 訳

1992

アロンソ・デ・エルシーリャ

ラ・アラウカーナ

(第一部)

吉 田 秀 太 郎 訳

1992

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No. 5 1992

Alonso de Ercilla y Zúñiga

LA ARAUCANA

PRIMERA PARTE

Translated from Spanish by Hidetaro Yoshida

LA ARAVCA

NA DE DON ALON-
SO DE ERZILLA Y C.

*ingés, Gentil Hombre de su Magestad, y de
la boca de los Serenissimas Principes de
Yngria. Dirigida a la S. C. R. M.
del Rey d. n. Phelippe aus-
stro Señor.*

Luis de Dambeutere



Con privilegio.

*Impressa en Madrid, en casa de Pier-
res Cossin. Año. 1559.*

Esta cassado a tres maravedis el pliego.

目次

序文	1
ソネット	3
献辞	7
ラ・アラウカーナ	
第一歌章	9
第二歌章	28
第三歌章	52
第四歌章	76
第五歌章	102
第六歌章	116
第七歌章	131
第八歌章	148

第九歌章	165
第十歌章	194
第十一歌章	209
第十二歌章	231
第十三歌章	257
第十四歌章	272
第十五歌章	286
訳注	308
訳者あとがき	314
文献	323

序 文

もしもこの作品に費す労力にも拘らず刊行を恐れる氣持が些かも減じ得ないと考えたなら、私はきっと完成させる氣にはならなかつただろう。だが、これは眞実を語るものであり、戦の物語であり、興味を抱く人も少なからぬことを思い、敢えて上梓を決意した次第である。この決意を促したもう一つの理由は、この戦に殆んど終始参加した多くの証人たちの催促と、戦が小規模なるが故にはなく余りにも遠隔の地のことであり、イスパニア人がペルーの側より足を踏み入れた最後の地でもある故、余り知られる事もなく、且つ戦闘に忙殺され、それを書き留める用具も暇も左程なかつたので、もしこれを記す

者がいなければイスパニア人の功績は永遠に沈黙の中に葬られると思つたからである。それ故、私は暇を見つけて、本書の作成に當つた。この作品が出来得る限り正確で眞実に近いものとなるように、私は戦いの合間にも、峠や陣地で書き記したが、ときには用紙の不足のため、革や手紙の切れ端に書き留めることもあつた。その紙片も小さくて詩文がやつと六行収まる程度だつたため、後にそれらを集めるのが一苦勞であつた。このような次第ゆえ、また粗末な衣服を身にまとう召使女の如き謙虚さと熱意に免じて、多少の欠点は読者諸氏にお許し願う次第である。また読者の中には私がややアラウカ人の側に

文 序

立ち、野蛮人の武勇を殊更に長々と扱っているとお考えの向きもあるかも知れぬが彼らの教育や風習や戦術、更に訓練について眺めるとき、それに係る人の少なきこと、またかくも終始決然たる態度でイスパニア人のような勇猛な敵を相手に戦いその国土を防衛した民族の少ないことがお分りのことであろう。そして確かに、アラウカ族の土地は僅か二十レグアスに過ぎず、また町も城壁も武器も（防禦用しか）ない彼らに対し、イスパニア人は多くの歳月と武器を費したこと、しかも要塞堅固な地ではなく、イスパニア人の三つの町と二つの要塞に囲まれながら、自らの血とイスパニア人の血で染まらぬ個所のない、またその骨の散在しない所のないほどの土地の真只中であつて、ひたすら勇氣と不屈の精神で死者たちの後に続き、その自由を守り抜いたことは感嘆すべ事である。彼らの子供たちは亡き父母の復讐に燃え、彼らを駆り立てる当然の怒りと父祖から受け継いだ勇氣を以て、歳月の流れを早め、うら若き身空で武器を取り厳しい戦いに身を挺した。かくして、この戦での死者多数のため、隊

を建て直すために女たちも駆けつけたが、時には男たちの様に闘い、勇躍死地に赴いた。私はこれらの人たちの勇氣の証拠として、まさに詩行に託して贈り得る最大の賛辞にふさわしいこうした事実を挙げたいと思つた次第である。さて、先にも述べた通り、いま、イスパニアには私がいまここに書き留めている多くの場面に居合わせた人が大勢いるが、私はこの作品におけるこの点での正しさをそうした方々に、また本書を読んで下さる方々に納得していただきたいと思う。

ドン・アロンソ・デ・エルシーリヤに捧げるソネット

(作者不詳)

そこに登った皆よりも先に

そなたの神聖なる額に桂冠を置く。

パルナッソスの険しき峰に

一番乗りを目指して

ソネット

ミニモ会修道士アロンソ・デ・カルバハールの対話風

足どりも軽やかに走り行く

マントウーアとスミルナ・オメーロのマロン。

「思慮ある人士の棧橋を上るは誰ぞ」

イタリアからはアリオストと博学なタッソーが行く

また名高きイベロの民からは

「勇ましきドン・アロンソ・デ・エルシーリヤ」

ボスカンと令名高き誠実なるメンドーサが

そして更に著名にして素晴らしきガルシラーソが。

「無欠なる者も及ばぬ人士とはこの御仁か」

高邁なるエルシーリヤ、そなたは彼らの後から出る、

そして先発したるは彼らの方なるに

「この有名人の動機は何ぞ」

そなたは易々と彼らを追い抜いて行く。

「さればこの際、何人にもそは分るまい」

アポロはそなたを見て痛く驚き

「分る者は今後も現るまい」

「並外れたる者。さればはや西方に知れ亘る」

「然らば桂冠の与えられるは必定」

「然り、詩にてはウイルギリウス・武にてはマルスに敵うほどに」

アルカラ大学教授ヘロニモ・デ・ポラスのソネット

インドの海からヘスペリアの波にかけて

スキテコスの海からリビアはクレブラスの波にかけて

イスパニアの兵士たちの栄光を

輝かせ讃える名だたる人よ、

か細き雛芥子を手折るように生命を奪う

死神の手から、貴殿は生命の糸を盗み

マントウーアのみが讃えられるのを避け

羨望家たちの邪念を砕く。

貴殿のその栄えある物語の

甘き調に耳を傾けるのはわけても

ネプトウーノとドリステメリセルタとグラウコ。

名だたるアラウコとの戦いの勝者を

かくも穏かな口調で讃えるのを聞き

敗れし者たちも喜びを得る

ラファレス男爵夫人、ドニャ・レオノール・デ・イル

シスのソネット

早くも鑄造つくられた千の銅像と

栄えある業績を讃える千の栄冠とを

イスパニアは貴殿に贈る、高邁なるエルシーリヤ殿

貴殿は筆と槍にて見事にそれを獲得した。

貴殿の勇気の兵士たちの間でもてはやされんことを

勇者も貴殿の気高さを羨ましがらんことを

そして名ある詩人たちが貴殿の中に

その粗い鑢に代る上等な鑢を求めんことを

名声の女神が貴殿への讃辞を広め

貴殿の記憶を時が決して消し去ることなく

永遠のものとなさんことを。

同じ栄光に輝く貴殿の軍功と著作に

勝るものありと恐れることなく安んじられんことを

貴殿は劔とペンにてそれを勝ち得たのだから。

ペニャフィエール候爵のソネット

槍で打ち負かせし人をペンにて讃え

君は蛮人への勝利の栄に輝く

そして時と死を以てなお得難きものを、

不朽の望みを、君は生きながら達成する。

君はアラウコよりエーゲの海に飛び、

変化と移ろいを免れる。

素晴らしき勝利と賞讃を携え、

レテの水面を彼方に見る。

生きながらにしてかくも価値あるエルシーリヤ

ソイ口の強き毒にも

君の栄冠は微塵も損われなかった。

君はアラウコを讃え、輝く桂冠と讃辞に充ちて、人口

に膾炙される。

賞は君の物なれど、幸は我らの物。

ドニャ・イサベル・デ・カストロ・イ・アンドラーデ

夫人のソネット

いとも幸うアラウコの国民

誉ある国の中の国、

栄えの時も亡びの時も

恒に羨まれこそすれ羨む事無し。

おお名高きアロンソ・いかめしき槍を構え

閃く劔を放つ時、御身は只管

そが猛き者共を服わんとせしものと

断ぜし事ならん。

彼らの強き手は御身の自由と命をば

奪うやも知れねど、恐るべからず、

その手は久しく代価を払わん。

短かけれど栄ある死と引き換えに

そのいみじき文章により

御身の令名は永遠に留まらん。

献 辞

神聖なるカトリック国王陛下

私儀幼小の頃より陛下にお仕えして参りましたが、その最初は陛下がフランドルにお出ましの折でございました。あの時以来、長ずるに及んであちこちと多くの様々な場所に赴きましたが、何処の地に参りましても陛下への忠誠心はいや増すばかりでございました。陛下と枢密院の下僕でした父と御后ドニャ・マリア陛下の女官長でした母の没後長年が経過し、私はイギリスへ陛下の従者として参りました。私は孤児であり若輩でございましたが、たまたまペルーにおけるフランシスコ・フェルナンデスの謀友の知らせに接し、兼ねてよりの陛下への忠

誠心から、陛下のお許しと御恩恵を得て、かくも長い旅を企て、こうしてあの国に渡ったのでございます。その地にあつて、私は副王が土地の平定のために行われた事に関して自分の書き記しました一切の場面に居合わせたのでございます。私はチリの住民たちが王冠に対し反くのを知り、陛下にお仕え申し上げんとする一心から、旅の苦勞も苦とならず、その地に赴く決意をいたしました。そして一たびそこに着くと、アラウコの国の珍しい事物や戦いを目のあたりにして、ひ弱な腕に及ぶ限りの事をいたしました。それでもなお私の希いを十分に果していかないように思えましたので、陛下のお役に立ち得べく

献 辞

神より授かった貧しい才能を生かしたいと存じました。
と申しますのも、それ以外に陛下に差し上げるものは何も残っていないからでございます。このため、戦のさ中にも、僅かの暇を利用してはこの書を書き綴りました。何卒本書を陛下の御庇護の下にお置き下さるようお願い申し上げます。これこそ本書に価値を与えるものでございます。主が陛下の聖なるカトリック教徒として、御身を、領土の一層の拡大と共に、お守り下さるよう、陛下の下僕としてお祈り申し上げます。

マドリードにて 一五六九年三月二日

恐惶謹言

第一歌章

この歌章ではチリの位置とアラウコ国の土着民の風習と戦い方を述べる。同時にアラウコが反逆を始めるまでのイスパニア人の行った侵攻と征服を概略する。

かの疲れを知らぬイスパニア人の
勇氣と行動と偉業を讃えるものである。(一)

これは貴婦人たちや恋や恋する騎士たちの

如何なる王にも服まつろわぬ者どもの
一際目立つ事柄を、

優雅なる振舞いを詠うものではない。

情愛や恋の苦しみの様や

楽しみや感傷を詠うものでもない。

不屈のアラウコ人の項うなじに劔もて

固くびきき鞭むちをつけた

イスパニア人の偉大さを引き立てる
稀に見る才能や賞讃すべき態度をも語るもの。
敗れし者にしてその名の高きほど

勝者の名を高めるものだから。

偉大なるフェリーペ陛下、何卒

この拙文を御高覧の上、御是認賜らんことを

この著作にとつて必要な恩恵のうち

陛下の御好意こそ最大のもの。

これは真実を曲げることなく取り出し

誂えた形に収めたる物語りなれば、

わが文が權威を得るには

いと貧弱とは言え、その魅力は捨て難し。

やんごとなきお方に本書を捧げたい

この僭越せんえつが本書を支え、

かかる箔付けはくの手段により

見る人の高評を得んがために。

また仮に些かの非難を免れ得ずとも

苟も陛下いやくに捧げたる物なれば

何がしかは秘められている筈と

せめて立ち止まってくれる為に。

また小生が陛下の御館にて育てられし事は

小生に信用を与える傍ら

小生の拙き文も精緻なものとなし

乱雑に並べしものも技巧に満ちたるものとなさん。

斯様な事どもに鼓舞され

小生はペンを軍神マルテの勢に委ねる。

陛下、小生の言にお耳を貸し給え。

小生はこの事の紛れなき目撃者なれば。

肥沃にして名だたる土地チリは

その名も高き南極の地に位し

強力にして傑出せるため

遥かなる外つ国々に尊敬され、

且つその住民は優秀にして

堂々として凜々しく、戦を好み

王により統括された例なく、

異国の支配を受けたることもなし。

チリは南北に長く

南の海と呼ばれる新しき海の岸に沿い、

東西の幅は狭くして

最も広き処でも百ミリーリヤなり。

緯度は南極より測りて

二十七度の処より

大洋とチリ海とが細き窪みで

その水を交える辺に至る。

そしてこの二つの広き海は

互いの境界を越えて合体を試み

岩石を打ちその波濤を伸ばせど

その実現は妨げられる。

この辺に至って遂に大地は窪み

二つの海はここで連なることを得る。

マジジャーネスこそは初めてここに道を開き

その名を留めた大丈夫。

水先案内人なき故か、恐らく

重要乍らも知られざる何らかの理由で

発見されしこの密かな細道も

我々には隠されていた。

緯度の計算の間違いからか、

嵐の海と怒れる風に

動かされしとある小島が

入り口を塞ぎ閉ざせしためか。

先述の如く、大地は南北に広がり

その西側を海岸が洗う。

東側に山脈あり

南北に千レグワに亘って伸びる。

その中程に戦の場は横たわり

慣れと訓練により戦いは更に磨かれる

美の神も愛の神もこれに加るに至らず

徒に怒れる軍神のみ支配する。

さてもこの地域は

南緯三十六度のところに件の国があり

その偉大さは明白にして

自他共に多量の血を要する。

これぞ未だに隷属を知らず

チリを痛く苦しめる猛き国

その勇氣と只管な軍いくさにより

周囲の土地を悉く震わせる。

その名はアラウコ人であり

津々浦々に広がる。

名声と信賴と尊敬を帯び、

広大な土地の大方を支配し、

わが拙文からも分る通り

イスパニア人を大いに苦しめた。

その国境線は二十レグワに及び

十六名の強の者が掌握する。

この誇高き国を手中に収める

十六名の酋長や豪族は

野蛮なる母より生まれ出でし人のうち

軍の業に一際秀で

彼らの祖国の守護者であり砦であり

統治において他の誰よりも愛されている。

酋長たちは他にもいるが勇ましき点で

彼らこそ水際立てる指揮者たち。

命令権を持つ主君にのみ

家来たちはそれぞれに仕え

いかなる場合も、好都合とあらば

相互の義務として彼らは強制を受ける。

されどこうして主君は戦において

その実践と注意と訓練により

彼らを十分指導する義務を持つ故

教練を受けし者はやがて熟達する。

少年たちに関しては

有益なる技能や力を持つ者は

休まず嶮しき石ころの坂道を

定められた区間駆け行き

元の場所に戻らねばならぬ。

勝者には何がしかの物が与えられ、

こうして彼らは敏捷になり意欲を養い

その力で鹿にも追い付く。

子供たちも幼少の頃より

強制的に訓練を受ける。

長ずるに及んでは戦の術と

苛酷な仕事で鍛練される。

もしも弱音を吐けば

戦に不向きと判断される。

軍事において優れた者は

その価値に応じて階級を受ける。

戦の任務や高き地位は

容易な手段では得られない。

資格に依らず、世襲に依らず、

恒産や出自の良さにもよらず。

寧ろ腕力の優れること、

これぞ万人に好まれる人物を作り、

その者を光り輝かせ

完全なものとし、その者が権限を持つ。

戦に従事する者は

その他の仕事に当てられることなく

労務や農耕の作業を免れ

身分低き者どもに養われる。

されど彼らも法により

何時なんどきたりとも武装し得る義務を有し、

正当なる戦や争においては

巧に武器を操らねばならぬ。

彼らの用いる主要な武器は

長槍、鉾槍、短槍のほか

柄の付いた先の尖った

錐状のもの、

斧、金槌、鉄板で補強せる木槌、

投げ槍、戟ほこ、矢、棒切れ、

丈夫な柳と葛かすらの綱

飛び道具と投石器

これらの武器の幾つかは

嘗つてキリスト教徒より取りし物にて

不断の訓練と配慮により

次第に習得するに至れり。

また或る武器は後に発明されたる物。

蓋し必要は大いなる発明家にして

万事に熱心なる働きは

素晴らしき発見の師なり。

彼らは強靱なる二重の胴鎧を用いる、

こはすべての兵士に行き亘る道具。

他に半纏はんてん風の物を着る者あり。

新しいものなれど良く用いられる。

また様々な仕立ての

長靴、腕当て、首当て、兜かぶとを着けるが

生皮や鞣革なめしがわのそれらの武具は

鋭利な鋼を以てしても傷つけ難い。

兵はそれぞれ唯一の武道を学び

それによって鍛練する。

この道は幼き頃に極く自然に

興味を覚えたるもの。

この道のみを只管究め

巧みにそれを操り、

弓の射手は長槍を扱ふことなく

槍手は槌や矢を操ることなし。

彼らは多様にして且つ完璧な

隊形を編成し、縦隊はそれぞれ

百余名の兵士から成る。

槍と槍の間に射手が位置し

槍手たちに護られ乍ら

遠くの方から攻撃する

槍手たちは肩を並べ

敵の槍に向って行く。

先遣隊が攻撃し

もしも余儀なく潰滅すれば

目にも止まらぬ早業にて

救援隊が繰りこまれる。

その隊の崩れる時は別の隊が攻める。

かくて最初の隊の再編成れども

別の隊の様子を見届けるまで

その場所を動くことを得ず。

彼らは努めて沼地に陣取る

馬を損い恐れさせるため。

彼らは戦列を乱されたとき

しばしばこの地に難を逃れ

そこで安全に再編を試みる。

彼らは難なく攻撃ができる、

見せかけの土地とひどい不便さが

わが兵の到達を妨げるから。

夷狄の隊の選り抜きの兵士たちが

不遜にも天と地を軽んじつつ

勇者の力の限りを尽くさんと

槍の石突きを引きづり乍ら

様々な格好をしつつ

前に進み出てこう言った。

「キリスト教徒どものうち

我と思わん者は速かに前に出る」

威信を我が物にせんと

三、四十名の者がそれぞれに

早打ちの太鼓に合わせて

誇らしげな出で立ちで現れる。

手にする武具は微妙に異なる色を

さまざまに施したもの。

房々とした羽飾りがあちこちと

到る処で飛び跳ねる。

彼らは有利な地と思ったとき

あるいは一時期占有したとき

あるいは苦しい状況に見舞われたとき

最も安全に身を守る地に

陣地や砦を構築する。

そして好機と見るや忽ち撃って出ては

また陣地に引き籠もる、

その形と作りは次の如し。

場所が定まり、設計が終るや

細工を施した頑丈な木で

広い区域を四角形に取り囲み、

丈夫な杭で固定する、

かくて外部の者たちの侵入を塞ぎ

戦いを防げる。すなわち内部の者は

壁に守られ、僅かの人数で

容易に多勢に対し防禦ができる。

嘗ては厚板を用いて

懸念なく安心して使えるよう

要塞の内部に別な仕切りを作っていた。

一定の間隔に丸太棒を立て

正面の柵の高みの

四基の高い楼に小さき狭間に充ちた

壁が固定されていた。

この砦の外周には隈なく

深き穴が穿たれる。

長きものあり、広きものあり、狭きものあり

かくて穴は限りなく続く。

狡猾にして欺瞞を弄する蛮人を追い

全速力で馬を駆る

不用意なる若者を

この危険な囲いに引き入れるため。

彼らはまた地面に尖った杭で

深き穴を掘った。

敵が気付かず馬に拍車をかけるべく、

穴は萱や雑草で覆われている。

分別を欠く騎馬兵は

天のみを助けと見て

その陥穽にい陥り

尖れる杭の先に葬られる。

古来、彼らは協議や取り決めには

一定の習慣に従ってきた。

すなわち、或る事柄の生ぜしときは

宴を催し酔い痴れる。

この様にして、最初にその知らせに

接した酋長は速かに

すべての酋長や名士たちに

使者を派遣し、

会合の必要性と時期を知らせる、

速かに情報を伝えることは

皆の者が心掛くべき

共通の財産なのである。

場合によっては、

後れては害のある旨力説する、

全員にとって好都合と分れば

来得て来ぬ者は誰もいない。

元老たちが集まると

改めて議題が提案される。

判断され熟慮された後

適切な対策が講じられる。

そして意見がまとまり決定されると

たとえ違った意見の持主でも

それに従う義務がある、

そこでは多数の声に従わねばならない。

反対すべき事のないとわかるや

新しい定めは

何か事変を待っている大衆や

下々の人たちにより広められてゆく、

戦のことだわかと

彼らはラッパや太鼓を鳴らして

人びとの耳に達するようと

触れ歩く。

彼らにはそれを考え再考するための

一定の期間が与えられている。

最終的な決定には

三日経たねばならない。

その期日が過ぎると

もはや撤回は不可能となる。

そして抗い難き出来ごとと同じく、

新たな展開に従うことになる。

この会議は数ある木立ちの中より選ばれた

恰好の場所で行われる、

そこは無数の草花で飾られた

原野がひととき美しい。

そこでは涼やかな快い風に

木々は音を立てて揺れる、

牧場を澄み切った

穏やかな小川が横切っていて、

涼風を齎らす聳ゆる並木の道が

如何なる会議も大祭も可能な

美しく整えられた

広大な広場を取り巻き

人びとを憩わせ、昼寝時の

煩らわしき日差しを遮る。

そこでは小鳥たちの

美しい施律が聞かれる。

神も法も持たぬ人たちなれど、天国より

追われし者を敬い、その者を

強力にして偉大なる予言者として

恒に歌の中で讃える。

その異端の怒りを呼び起こし

あらゆる事にその名を呼び

好事であれ不吉な未来であれ

その言のすべてを確信する。

また開戦に当りては、

祈祷と共にその旨を伝え、

よき答えなき時はいかにその意志が強くとも

その軍を思い止まる。

深刻な事件や事業に臨んで

この呪われし者が呼ばれない事はない。

その者の名はエポナモンと言い、

普通、勇敢な者にこの名をつける。

彼らは魔法使いのまやかしの術を利用する、

この術は生来彼らの好むところにして、

前触れや兆しを見て

それにより万事を決める。

未来のできごとを占う愚かな

予言者たちを崇拜し、

その予言により更に大胆になり

或いは恐れと臆病の虜となる。

これらの説教者たちの中には

聖者として崇められる者もいる。

彼らはただ讚美を糧として生き、

窮乏と禁欲の生活を守る。

これらの者はその巧みな弁舌により

信じ易い民衆を誤らせる、

彼らはその狂気が我々の聖書のように

間違いないものと信じている。

そしてやや厳格な秩序を保つこの者たちは

法も神も持たず、罪もない。

ただその生き様により

博学な人士として評価が高い。

されど劔や槍や弓矢を

最高の術と考える他の兵士たちは

楽しみや悲しみの兆しは

力と勇氣次第なりと広言する。

さてこの土地の宿命と風土は

星と予言に従えば

争いと怒りと不和と軍であり、

人心は専らこれのみを求めている。

彼らの幸、不幸はすべてここにある。

彼らは突然怒りを発する人たちであり

獐猛で短気な性格を有し、

異国の人たちを支配することを好む。

彼らはいかめしい表情をし、髭はないが

体は大きく均整がとれ

背中が広く、胸は隆起し

頑丈な手足と強靱な筋肉を持つ。

敏捷、快活にして威勢よく、

意欲旺盛にして勇敢、且つ大胆である。

苦勞に屈することなく

死ぬほどの酷寒や飢えや暑さにも耐える。

この誇り高き自由な人たちを

支配した王はかつて一人もなく、

彼らの地に足を踏み入れたと

豪語できた異国もなかった。

また近隣の地にして敢えて

対抗し劔を振り翳すものもなかった。

彼らはずねに束縛を免れ、敗北を知らず

恐れられ、法を無視し、項うなじを立てている。

権勢を誇るインガの王は^五

南極の全域に優位を占めていたが、

新しき国を見出しては征服するのを

殊の他好んだこの王は

この国の偉大さを聞くに及んで

チリに土着の貴族を派遣した。

されどこの地の人たちの名声の高さに

熱き血も士気も冷めてしまった。

然り乍ら勇敢なるインガの貴族たちは

険しき荒地を突破し、

好戦的な若干の集落を

強引に隷属せしめた。

そして厳しき法律や布告を

武力によって導き入れ、

且つまた不公正なる掟によって

多額の税と献金を強いた。

彼らはそこに落ち着き

強力な軍により陣容を整えると

目ざす王国を求めて

その隊を前進させた

何マイルも行かぬうちに、

アラウカ人がその劔にて入手せし

名声に違わず勇敢なることが

彼らにわかってきた。

傲慢なるインガの空しき試みを知った

マウレのプロマウカエ人たちは

深刺さと、それに劣らぬ規律を以て

彼らを迎え撃つべく立ち向かった。

そしてこれらの兵士たちが

近づくに及んで

無数のインガの貴族たちが仆れ

戦場と軍旗のすべてを失った。

インディオのプロマウカエ人は

アラウカ人の国より百マイル隔たり

勇猛、尊大にして威勢よく、恐れを知らず、

すでにイスパニア人も実証せしところ。

されど、かく申す事実にも拘らず、

かの猛き国の者どもは

武器の価値と出来栄えにおいて

著しく優っている。

インガ人たちは不屈の地に秘められし

彼らの力を理解し

開始された軍の終るとき

その得ることの如何に少なきやを知り

自らの意図の誤りを悟って

手に入れし土地を手放し

祖国の村に立ち戻り、

そこにて暫時休養した。

他にも数多の征服を為した

ドン・ディエゴ・デ・アルマグロ総督は

その征服にて博学ぶりを誇りし人。

氣力に溢れ、勇敢で、卒直、誉れ高く、

キリストの御教えを広めんとして

意を決してチリに赴いたが

その長旅の果てに、都合により

早々に踵を返した。

正当にして大いなる理由により

この勝利はバルディピアにのみ与えられた。

その劔により、かくも前進できし故、

彼の名は讃えられるに相応しい。

この勇者は何人も為し得なかつた

あの栄光をアラウコで成し遂げた。

不遜なる者どもに重き軛くびきを着け

その自由を抑えたのだ。

一振りの劔と合羽のみにて、

持ち前の巧妙さに助けられ

堂々たる主力部隊を

有能な兵士たちで速かに編成し、

勇壮な意図と気力によって、

困難な企ての遂行かさもなくば死かと

この出征において意を決し

チリを目指して直進む。

湖や険しき道にて

飢えと渴きと寒さに苦しみ乍らも

然るべき鞏固なる志操を抱き、

胸を張り、困難に立ち向かい、

彼を傷つけんものと武器を振う。

悉皆の妨害者を物ともせず

僥倖に助けられて

チリの地に突入した。

彼の地に入るや

様々な時、様々な場所に於て

土地の者どもと危険な戦いを交えたが

その結果は痛く疑わしかった。

だが勇猛なるイスパニア人は

その力強き腕により、

天命に従い、激しき戦を続けて

土地の大部分を占領した。

人命の少なからぬ損失を伴いつつも

味気なき野生の草の根にて

疲弊せし肉体を支えながら、

六年の間、包囲に耐えた。

そして不断の気力と類稀なる試煉により

困難の中で新たなる力を蓄え、

制圧されし蛮兵どもを

イスパニア人の信仰に帰依せしめた。

後にバルデイビア来り、

努力と劔によつて

プロマウカエ人を降し、力によつて

好戦的なクリオス族やカウケネス族を征圧した。

そしてマウレ川と流れも速きイタタ川を渡り

アンダリエン川に達した。そこに名高き

都市（ハ）を建て城壁を築いたが

その運命ははかなく、憐れであった。

彼はこの地で凄惨な戦いを行ない

敗北の瀬戸際に追いやられたが

神の加護により窮地を脱した。

これまでの悉くの戦いに、神は彼に味方した。

その戦いの詳細は余人の説明に委ねよう、

彼らこそその役目にふさわしいが故に。

この地にてペンコの民の長にして誇りなる

蛮人アイナビーリヨが捕えられた。

彼はそこより名高きビオビオ河に着いた。

この河はペンコとエスタードを二分し

水量豊かなニベケテン川や

その他の川を伴せて大海に注ぐ。

そこで速かに、気力も新たに、

整然たる一中隊を編成し、

阻しきアンダリカンの山を越え、

肥沃なるアラウコの地に足を踏み入れた。

この話はこれにて止めたい、

不興を買うは固より本意ではない。

されば冗慢なる作者の習いを避けて、

素早くここを抜け出したい。

すなわちアラウコ人どもが降伏する迄に

幾多の合戦があり、それを逐一語るは

冗漫に陥る恐れありと見て

敢えて割愛することにした。

飼い馴らされし動物に跨がる人びとを見て

彼らが奇蹟により特別に

天上より来りし者と考えしは

無知なる思い込みの業であった。

彼らは火薬の炸裂する突然の大音響と

齎された重大なる被害に驚き、

燃ゆる光線を用いて戦う

不滅の神々なりと恐れをなした。

イスパニア人の雄々しき姿が

不滅の神との思い違いを信じこませ

とりわけ迷信深き人たちは

当面する不幸から未来の不幸を断言した。

かくて、アラウコは臆気に気づかいつ、も

己が抑圧の兆しを確と見て

友愛と信仰の誓いの下に

例になく従順になった。

そこに十分な守備兵を残し、

わが軍は更に前進したが

アラウコの地の屈するを見て

全ての地が簡単に降伏した。

大方の者を手なづけし後、

七つの賑わう都市を建設した、その名は

コキンボ、ペンコ、アングル、サンティアゴ、

ラ・インペリアル、ビジャリーカとデル・ラゴ

目出たき首尾と勝利と

手に入れし名声と領土のために

彼らは尊大となり、虚栄に膨れ

千レグアに十人も収まり兼ねる程であった。

彼らの念頭には

その尊大ぶりと空しき栄光、空しき銜てらいが

所詮七フィートの地に収まることなど

毛頭なかった。

他人の汗と苦しみの下で

利益と悪意は増大し、

飢えとさもしき欲望が

思いのままに貧むさばった。

法も権利も特権も裁きも

バルディビアの是認するところ

重き罪業に情をかけ、

些細なる事に厳しかった。

かくて恩知らずのカステイリア人は

その悪と評価を高め、

尊大にして空しき意図を抱きて

幸運をば追ひ求めた。

だが天上の父なる神は

その道を遮り、かの

彼自身が軛を着けし者たちに、

刃物となり刑吏となることを許し給うた。

古来法を定めて人に命じ

恐れられてきたアラウコ人の国は

その王座を追われ

神ならぬ者どもに抑えられし己を見て

蒙りし苦しみを非難し、

自由を勝ち取らんと決意して

無為なる平和の下で用いることのなかった

劔の行使にとりかかる。

(いかなる厳しき措置やあらんと)

彼らは手始めに新しい試みを企てた、

或る日、理由も原因もなく

我が軍の兵士を二人虐殺した。

その不敵なる行為は見逃され、

これにより彼らの大胆さは募った。

時を移さず憚ることなく

人びとを呼び集め始めた。

不慮の災害の原因は

バルディビアが速かにこの国を

正しく罰し、修復を計らなかつたこと。

だが自らの行為を罰する者はいない。

彼らは堂々と臆することなく

新たなる自由によって

第二歌章で見られる如く、

誓いの忠誠と約束の綱を断ち切った。

第二歌章

総大将の選出を巡ってアラウコの酋長たちの間で生じた不和と、酋長コロコロの助言によって講じられた手段、蛮人たちが迂濶にもトゥカペルの要塞に突入したこと、及び彼らがイスパニア人と交えた戦について述べる。

この世の偽りの高みを

極めし人たちの数は多い。

彼らは常に運命の女神に助けられ

手を引かれて登って行った。

頂上を極めた彼らはやがて

同じ女神に惨めにも突き落とされる。

異変の思いの少なき時ほど
打撃と悲しみは多い。

彼らは繁栄の時にあつて

満足は悲しみの始めなるを思わず、

突然の異変の中に

万物を萎えしめる時間とその早さを見ない。

寧ろ尊大にして空しき自信を持ち、

己が運命の不動を希う。

だが好運の女神はその厳しさを忘れず、

手慣れし回転によって敵対する。

女神は逆境を以て悉皆の物に復讐し、

何人もそれに抗うことを許さない、

与えるよりも常に多くを奪い、

古き物も新しき物も容赦せず、

彼らの信用と名誉を要求する。

人生の終末に試煉はあり、

人は皆仮令正しき原則を保とうとも

それによつて裁かれねばならぬ。

大切なる物を失いしとき、結局

残るは苦しみと悲しみと悩みのみ。

好運の女神は不動なりと考える前に

太陽は光を放たなくなるであろう。

その車を止めるのは彼女の常ではないのだ。

最も確かな幸運は

決してそれを持たぬこと。

これは次の出来事からも分る筈であり、

ここから一つの教訓を人は得るであろう。

すなわち富も名誉も栄光も

望み得る全ての宝にはあれど、

勝利を遂行するに十分ではなかつた。

晴れわたる大空も遂には曇り、

好運の女神は繁栄の流れを

哀れなる状態へと変えて行つた。

わが兵は右に述べし繁栄の中で、

且つ僅かの家にしかない満足という

一層大きな幸福に対し

恩知らずの状態にあつた。

彼らはこうしてひどく志気が緩み

(悲しい出来事の確かな兆)

千年に亘る熱意で築きし名誉と地位を

僅か一時間で失つてしまった。

先述の如く、わが兵士は

インディオたちより生き神と思われていた。

だが彼らも男女の間より生まれると知り、

欠点のすべてを知った。

イスパニア軍の悲惨な姿を見て

彼らは無知に由来する誤りを悟り、

同じ人間に支配された恥かしさに

怒りを燃やした。

もはや延引を望まず、

彼らはやおら事を短期にて終結せしめる

復讐の手段と手順を決めるべく、

会議のために人を集め、

厳しき、模範的にして残酷、且つ取り消し不能の

恐るべき宣言を

全ての人に向けて発すべく

その手筈を開始した。

原野はすでに行進する兵士を従えた

酋長たちで塞がりつつあった、

全員に対する公布の必要はなかった。

約束も支払いも無きまま

戦への意欲に駆られて、彼らは集まって来た。

そして敵の死と破滅という

厳しい懲罰の命の下る時を

今や遅しと待ち受けていた。

会議に現れし顔ぶれのうち、

幾人かの名前は記憶に値する。

彼らは学問こそ無けれど、それぞれに

納得すべき理由から、令名を馳せた。

すなわち極めて短期に

優れた人びとから大勝利を博したのだ。

生存者はその勝利を証言するであろう、

そして死者もまたかつて居たその場所です。

定められし期限内に現れた

最初の人にはトゥカペルという名であった。

この男はキリスト教徒の屠殺者の異名を有し

常に敵に対して残酷であった。

揮いる部下は三千人を数え、

皆の者から国王の如く従われていた。

次に駆けつけたのがオングルという若き勇者、

精鋭なる兵士四千人の頭であった。

煽動的な酋長カヨクピルは

故国を発つのは遅かったが、

そこに着いたのは三番目であった。

彼は唯一人で万人を相手に戦いたがった。

山中にて獣を追って鍛えた三千の部下を

この名士は従えていた。

常時五千の兵を率いるミジャラプエは

老身なれど、四番目に駆けつけた。

百戦錬磨の兵三千を率いる男

パイカビーはその日のうちに集まった

彼に続いてレモレモが到着した。

六千の兵を擁している。

マレグアノ、グアレモ、そしてレボヒーアも

足早にやって来る。よろず

人後に落ちぬ人士たることを見せんため。

三人とも各々三千の兵を率いている。

やがてエリクラーも駆けつけ

所定の時刻と場所に到着した。

頑強な体躯の大男にして

屈指の力持ちとして知られていた。

六千もの兵を率いる者が屈するとは

笑止千万と豪語する。

次に来たのが古老コロコロ、

この人のみで同数かそれ以上の兵を率いる。

これに続いてオンゴルモが協議に加わる。

彼は四千の兵を率いていた。

プレンも遅れず駆けつける、

六千の部下を擁していた。

凜々しき姿を現した

リンコーヤも六千以上を率いている、

老練にして堂々たる風格があり、

巨人の如き体格であった。

広大なるアラウコの盆地の

名だたる酋長ペテゲレンは

土着の領主として万民に慕われている。

国の名はここに由来し、

解放されしベネチアのように、

地域で最も繁栄し

領土は彼の名を冠して

今日に至るまでその名を留める。

この人物はキリスト教徒らに阻まれ、

自らその場に臨むことはなかった。

だがアラウコ出身の

この勇者の率いる六千人のうち

幾人かの者が派兵の必要の有無を確めんと

三三五五駆けつけた。

ピルマイケンの全土を握る

強の者カウポリカンは来なかった。

トメーとアンダリカンも加わった。

共にアラウコの国の出身であった。

他にも多数の酋長が駆けつけたが

冗漫を避けて割愛する。

皆の者は互いに笑顔で交歓し

共にいることの喜びを示し合った。

集合の目的が説明された後、

華やかな宴会が始まった。

激しく酒を汲み交わし

一様に酔いも回った頃、

皆の口から、騒々しい

言葉の火の手が燃え上った。

互いに素性の知れた間柄、

相手の言い分も馬耳東風と、

話題は誰が一番勇ましく

人々を治めるに適任かに集中した。

議論が白熱するに及んで

食物を満載せし卓子は倒れ、

折りたる木の枝に掛けた

武器に向かつて走り寄る、^三

そしてそれらを携えながら

酒と食事で熱を帯びて

燃えさかる怒りを煽る

際どく鋭き言辞を吐く。

勇者トゥカベルは言明した、

指揮官の役目は自分のものだ。

勇気の有無で決まるなら自分こそ適任者、

誰しも認めるところなりと。

「勇気にかけて拙者と並ぶ者なし、

必要とあらばお目につけよう——と

自信満々付け加える——誰なりと

これに異論のある御仁には……」

その言葉の終るを待たずエリクラーが言った、

「この騒ぎを収めるのは拙者の役目、

愚かな企てを二度とする奴には

拙者のこの鉄の槍を食わせてやる」

第一人者を自負するオンゴルモが言う、

「この腕のある限り、

この腕で戦棍を自在に操る限り、

拙者は希望を捨てては御座らぬ」

リンコーヤは怒り狂って答えた。

「左様なことをせんとするは狂気の沙汰、

世界を支配するは拙者のこの腕にあり、

拙者は手中にこの杖をしかと持って御座る」

「拙者と同じ望みを抱かんとするほど

空しき御仁は居られまい——とアングルが言う——

「それにより得られる誉れより

抱くことになる恐れが大きいほどに」

カヨクピルは烈火の如くなり、やや離れて

傲慢な態度で戦棍を振り回わしつづつ言った、

「いまの言葉を反故にする

最適な相手は誰か見たきものよ、

我と思わん者は前に出よ

この任に相応しき者は誰か、見ようではないか、

拙者はこの場で直ちに決着をつけたい、

皆の者が束になって来ようとも拙者は勝つ。」

「よし、されば拙者が相手を致そう」

——とレモレモが答える—— 「元々拙者の物を幾度試

そうと同じこと、

刀によって見せたい程よ

拙者の主張の正しさを

決闘の場で二人、四人、六人に示そうぞ、

こうして拙者と争わん者には悉く

拙者の気持を確と伝えてやる」

やや離れいしプレンは

只ならぬ話し声と騒ぎを耳にして

一同のさ中に進み出で、

彼のいる処、何人にも命令に背かせぬと言ひ、

またプレンのいる処、他者が命ずるなど

大それた考えを起す者のいる筈はないと言つた。

戦棍もて戦う奴、長槍もて戦う奴は誰だ、と

その激しい怒声は増幅する。

トメと他の酋長たちが

素早くこれらの蛮人たちの中にわりこみ

漸う仲裁したが、

少なからぬ骨折りであった。

彼らはまだ互いに傷を負ってはいなかった。

最年長の酋長コロコロが

恐怖心を振り拂って大声で

皆を制してこう言った。

「祖国を守る酋長の諸君、

指導者に関して、当然小生がなるべき物を

諸君がなりたがっているのを見ても

小生は悲しみはしない。

ご覧の通り、小生の齢になれば、

あの世に向かっているからである。

ただ、常々諸君に示してきた愛情により

諸君に忠告しておきたいことがある。

「我々が他人に支配され負かされた事を

世界に対して否定し得ないのに

我々が名誉ある職務を希い

諸人もろびとからの高い評価を求めるのは何故か！

われわれはこの事実を論あげつらうう積りはない、

今なおイスパニア人に抑圧されているからである。

寧ろその怒りを、獐猛なる敵を相手に

戦で發揮する方が良いのではないか。

「おお、アラウコ人びとよ、知らぬ間に破滅に

向かう諸君の怒りは何の怒りか。

諸君の同胞に振り上げる手はあっても

専制者に反対するための手は無いと言うのか、

諸君は眼前にキリスト教徒を見乍ら、

同胞に対し刃やいばを向けるのか。

もし諸君が死を覚悟しているのなら、

このように惨めな状態から抜け出よう。

「誰の目にも明らか、無礼な手口で諸君に著しき屈辱を与えた

あの者共の胸に

武器と怒りを差し向け給え。

諸君、恥ずべき軛を取り除くのだ。

諸君の勇氣と力をこれで示すのだ。

我々を救うために残された

祖国の血を無駄に流してはならぬ。

「私は諸君の瑞々しき心に

力づけられこそすれ、悲しみはしない。

恐れるはただ、この諸君の勇氣が

指導者の不手際により、正道を外れること。

すなわち我々の間で再び確執が生じ

諸君が自らの手で祖国の首を絞めることだ。

されば、もしも是非必要とあらば

先ずこの老人の喉を切りてからにされよ。

「苛酷な運命に嘖まれながらも

なお生き永らえている

この老い衰えた五体はただ

鋭き刃やいばしか求めていないのだから。

げに夭折の約された生命こそ

こよなき幸せの生命なり。

だが、わが同胞のためを思い、

敢えて私見を述べておきたい。

「お主らは勇氣と力を備えている、

天はお主らを生まれながらに等しくした。

血筋と身分と富において

同等に配分した。

わけても気魄と偉大さにより

いずれも世界を統べるに足る。

われらはこの慈愛籠れる贈り物に

感謝せぬまま今に至った。

「私はお主らの腕により

速かに事態の改善されんことを望む。

だがそれには先ず指導者が必要だ、

満場一致で囑望される指揮者が。

この人物は大きな丸太を肩に担ぎ

立ち止まらずに最も長く耐える者とする。

お主らは運においては同じ故、

一番の力持ちを目指して各々努められよ。」

古老の論す言葉に

耳を貸さぬ者は誰一人いなかった。

一座の鎮まったところで

彼らの間から様々な意見が出され、

結局、満場一致で

率直に快く

古老の提案を受け容れることが

酋長全員により決せられた。

さてもここである事柄に

お気付きの方もおられよう、

すなわち軍の訓練行き届き

法と掟の定まりたる

この強大なる地域に

さしたる破綻に至ることなく

万民を統べるべき

卓抜の指導者はなかりしやと。

答えておくがこの地では

元老院で選ばれた酋長のいない時はなかった。

先述の如く、ペンコにアイナビージョあり。

わが軍に亡されたが、

命と地位を失った訳は

巷の噂にあるように、

和睦を求めて城に來りし折、

食事に毒を盛られたためではなかった。

さても矢庭に運び込まれた丸太棒の

重さの程は敢えて言わぬが

頑丈な杉の幹、

優に一抱えはあった。

パイカビーが雑作なく持ち上げ

逞しい肩に担いだ。

筋骨隆々のこの男、六時間持ち堪えたが

七時間には至らなかった。

われこそは一番の勇者なりとカヨクピル

足早に丸太に近づき

高さ両の肩にそれを乗せたが

疲れ果て五時間後には投げ出した。

若い元氣者グワレモが挑んだが

それを越えることはなかった。

次にアングルがその丸太に手をかけた、

そして六時間、長々と堪えた。

彼に続いてプレレンが試み、半日間持った。

力持ちのオンゴルモは半日以上持ち堪えた。

レボピーアは四時間半、

それ以上は我慢できなかった。

レモレモは七時間、

絶えずあちこちを

歩いたり飛びはねたりしたが

遂に力が尽きて行った。

エリクーラもその力を試さんと身構えて

懸命に杉の幹を持ち堪えるが

九時間を経て放棄を決意する

もはやそれ以上、藁すべ一本も無理であった。

トゥカペルは十四時間支え、

一同はその優位を讃える。

だがその時、体調を整えたりンコーヤが

ざわめきを深い沈黙に変えた。

肩のマントを脱ぎ捨て、

見事な背中を露にした。

そして堅くて重い丸太を持ち上げると

頑丈な肩に落ち着かせた。

肩の荷など平気とばかり

処々を軽快に走り回る。

こうして丸一日が過ぎたが

まだ疲れを知らぬ氣に重みに堪えた。

太陽の不在を疎み

足早に夜が到来した。されどダイアーナは^(四)

その瑞瑞しい姿を現し

彼らを照らした。

リンコーヤは黎明を迎えてなお

その荷を下ろうとせず、

遂に日は中天に達し、

ようやく彼は荷を地面に棄てた。

並居る人びとの中

驚き呆れぬ者は誰一人なかった。

斯程にまでその重き荷に耐える者は

他にあらじと皆は信じ、

その優位により、当然の事として

優れた將軍にふさわしい

統治と指揮の大権と

一切を彼に委ねようとした。

皆より一際優れた者として

その蛮人は勝ち誇り、満ち足りていた。

折しもカウポリカンが足どりも軽く

人氣のないその場に現れた。

生来片方の目は光なく、宛然

上質の石榴石の如く赤かった。

然り乍ら視力において欠くものを

力と努力で補い余りがあった。

気品と勇氣に満ちたこの若者は

厳格で莊重で威嚴のある人物であつた。

いかなる權利も護る性で、

朴訥にして近寄り難く、正義感があり、

巨漢にして胸板厚く、

有能で器用、大力で身軽、

博識で辣腕、聡明で決断力があり

時に及んで沈着であつた。

彼は歡喜のうちに迎えられた。

——尤も全員が喜んでいたか否かは不明だが——

そしてこれまでの経緯について

彼らは詳細に彼に語つた。

アポロがすでに深き海に身を潜めたのを見て

一同は彼の力試しが

待たれるその光が現れるまで

引き延ばすことに決めた。

この人物の到来で齎された

非常な騒ぎの中に夜は過ぎた。

リンコーヤの側につく者あり、

カウポリカンの優位を信じる者あり。

賛否の論議の中で賭けが行われた。

中には賭けに加わらず、疑念の眼で

東の方を眺めながら

ポイボスの馬の現れるのを待っていた。

薔薇色のアウロラがはや

様々な刺繡で雲を縁取り始め、

賤の男や百姓どもを目覚めさせ

慣れたる日々の仕事へと促し、

洞みし原野に、失われてありし

瑞氣と彩を与え、

新たなる光が盆地に漲る頃

カウポリカンは力試しに現れる。

軽蔑と確信の念も露あらわに

硬く節くれ立つ木の幹を

さながら棒切れの如く掴み

磐石の肩に乗せる。

かくも筋骨逞しき五体を見て

人は皆ただ驚いて黙すのみ。

リンコーヤの顔は色失せ

自らの勝利に痛く疑念を抱く。

その利発なる蛮人は徐々に歩み、

やがて光まぶしき白昼が足早に訪れ、

日輪はその長き影を縮めた。

だが彼の執念は止まることを知らず、

光が西方に消え行けど

その力は衰えを見せなかった。

星の色さやかが清に見えても

勇者は疲れの色を見せない。

その催しを一日見んものと

湿って冷たい、暗い宿から

月が姿を現し、森や野から

薄暗い黒のベールを取り去った。

カウポリカンは決意を緩めず

以前に勝る力と気力で

さながら重き物など無きが如く

辺りを濶歩した。

山峽の彼方の高みに

早くもティトンの妻メが姿を現した。

黄金の髪を広げ、

冷え冷えとした霜を払って

花咲く淋しき牧場を

再び緑に潤し、

色とりどりの石の間の真珠のように

草花の中に嵌込まれていた。

ファエトンの車が海の彼方より

恒なる道を駈けて現れ、

山々は日輪の姿を見て

その影を畳んでゆく。されど猛者は

のしかかる重みに堪えながら

疲れも知らぬ氣に辺りを巡り、

やがて再び漆黒の闇が

急ぎ足で訪れる。

折しも昇る月影は

広漠たる大地を照らしたが、

やがてその面は濁り、赤らみ、氣だるげに、

姿も光も薄らいだ。

途中、いとも美しき姿で立ち止まり、

世にも珍しき力試しの顛末を

折よく第一人者に見届けるや

天球の北に沈んで行ったが

かの蛮人は大木を担いだまま

氣変りや苦しみの様子も見せず、

氣力によって疲労に克ち

日頃鍛えし力を一段と發揮した。

アポロはその友に続いて

やおらその光を一面に広げたが

レオカンの子の顔は

初めよりも凜々しく揺ぎなかった。

陽が中天に達した時

彼は巨大な背中の荷を

いと軽々と投げ出し、小躍りし、

余力の残れる証を見せた。

居合せた者たちは納得し、

彼に判定の言葉を告げた。

「かくも頼もしき双肩に

われらはこの重大な荷を託したい。」

この新しき競争も決着し、
一同は儀礼の限りを尽くして
彼を総大将として迎え入れ
その統率に従った。

彼の名声は高まり、恐れられ、
人々は彼を大いに讃えたため
幾レグアも彼方に住む者さえ震え
さながら国王の如く敬われた。

ここに述べし事柄は

数多の人の注目せしところなれど
今や作り事か詩の虚構として
疑問視する向きも少くない。
確かに、修練を積みし高潔の元老が
かかる重大な事柄の選択に
頭脳ではなく頑丈な力を求めるとは
常識の及ばぬところである。

実際、この策には賢明な

コロコロの深謀があった。

彼は体と力に並外れた

希に見る勤勉家で気力溢れる

カウポリカンの価値を熟知し、

彼の不在を知るや、

有害なる不和と混乱、

祖国の遭遇する一大危機を感じたのである。

それ故彼は巧妙に

選出の時を長引かせ

カウポリカンの力量を際立たさんとして

一風変った競争を提案した。

そしてこの間を利用して

彼に通知し、その競争に参加させた。

こうして遠回しに事を運び

彼は見事にその目的を達した。

元老院は華やかに

この正しい選出の催しを祝った。

そして新隊長はやおら

大いなる行事を始めんとして

パルタ軍曹に命じて密かに

意欲と闘志に充ちた

八十名の剛の者を集めさせ

彼らを掌握させた。

かくて八十名の無名ながらも

意欲溢れる者たちが選ばれたが

中でも二人の優れたる兵士は

皆の者を統率するに相応しかった。

両者とも百戦錬磨の

万死恐れぬ兵であった。

一人の名はカジエグワーンと言ひ、

もう一人の名はタルカグワーンのアルカティパイと言つた。

陸の安全を図って

わが軍は三つの城に立て籠った。

城壁は部厚く頑丈にして

周囲には濠が廻らされていた。

馬と兵糧と部厚い狭間に

備えられた武器を

戦いに慣れた兵士たちが

守っていた。

城の一つは催し場と

指呼の間にあつた。

充ち足りたアラウカの軍勢は

全世界もものかはこの風情で

空しい論議や行動のすべてを

劔によって決しようとしていた、

しかし思慮に富むカウポリカンは

相応しい対策を考えていた。

彼らの間には最も近い城を

包囲すべしという意見もあった。

また中隊を組んで

ペンコに向けて進むべしとの意見もあった。

夫々の意見が出尽したが

カウポリカンはその何れをも採らず

むしろ宿舎に引き退って

八十名の蛮人を呼び集めた。

彼は皆の者に容易に城に攻め入るための

巧妙な偽装の術を授け

火と劔の力によって

広場の兵士どもに襲いかかるよう命じた。

そして自らは直ちに彼らを追って

巧に通路と入口を占領すると宣言した。

彼らは入念な忠告に従って

命令を実行した。

広場と建物への入場は

そこを守る猛きベローナの^(三)

業に携わるイスパニア人に

仕える者たち以外は

アラウカ人には禁じられていた。

されば用心深き蛮兵どもは

めいめい乾草や草や薪を

背負って行った。

要請や質問も聞こえぬ体で、

荷を担いで整然と一列になり、

初志を貫いて踏み慣れた道に行く。

束の中には鉄の穂先の

頑丈な槍が隠匿されていた。

こうして彼らは欺かれたことにまだ

気付かぬ城に向かつて進み、

禁を犯して城内に忍び込んだ。

憐れみを誘う物腰で

疲れた足を引き摺り、

顔にはやつれた表情を浮かべ、

橋や塀や城門をすり抜けて行った。

だが、中に入るや忽ち荷を解き

猛々しくも傲慢に、

抜け抜けと武器を取り出し

かねてよりの素早き復讐に自信を見せた。

襲われたイスパニアの兵は

無惨な横死をま近しと見て、

思いがけぬ謀たばかりに色を失いながら

勝利かさもなくば死ぞと覚悟して

武器を求めて駆けて行く。

ある者は兜、ある者は胸当てを着け

果敢にして大胆なるアラウカ人の

猛威を懸命に喰い止める。

熾烈な戦いが始まり

敵味方の鉄が唸を上げる

残忍なる男どもはその力を揮うが

就中、軍神マルテは勇猛である。

互いに勝利を願って、

死に道を広々と開くべき

刀の一撃を加えるべき

新たな技を求めた。

硬い鉄くろがねの流す血潮と共に

激怒と勇氣も新になり、

イスパニア人がインディオを

塀に追いつめれば

異教徒の隊が新たな力で

手薄な失地を奪回する。

そこは激しき戦いのために

武器で埋まり、しかも彼らは丸腰であった。

甚だしき窮地に陥ったキリスト教徒は

恐怖と羞恥心に駆られ

怒りに燃え、激高して

手に手に劔を握りしめ、

新たな意気込みに怯んだ

猛きアラウカ人に襲いかかり、

彼らの間に突入し傷つけ打ち倒し

多数の者の心と命を奪う。

イスパニア人は流石に優位となり

大胆不敵なるインディオに

多大の流血と損害を齎らし、

かくて彼らは思慮の欠如と大胆さの代価を払った。

彼らは要塞を失い懲罰を受ける。

結局彼らは手ひどい打撃を受け、

塀の彼方に追い出された。

カジエグアンとタルカグアーノが退くや

時を移さず早足で

カウポリカンの隊が現れた。

事はすでに終わったものと考えていたが

予期せる効果の空しさに加え、

城の橋も上げられおるを見て

その土台の石ころ一つ残すまじと

誓いを立てて包囲する。

わが軍は恐れ過ぎぞと思ひし

イスパニア人の若者が

大胆にも、否、無謀にも

恐れず、助けも借りず橋に赴き

その中央に立ち、大声を上げた。

「一番の勇者と思わん者は前に出よ、

三十人なりとも相手致す。

千人と雖もこの体、否とは申さぬ。」

迷える羊の鳴き声を何処よりか聞きつけて

人里離れし彼方より

駆けつけてくる猛獣も、

勇ましきイスパニア人の

大胆な声を聞き、狙いをつけて

今ぞとばかり進み出た

百人を越すアラウカ人の早さには及ばぬ。

この勇敢なるイスパニア人、多数の敵の

前進を恐れも驚きもせず

かえって群がり来る彼らを

迎えようとして進み出る、

敵軍の道に立ち向かい、

獐猛な彼らの動きが止まると

無我夢中で中に飛び込む。

その勢いで何人かが地面に転倒した。

劔を振り回しながら

二度の打撃で二人のインディオを倒した。

こちらで一群を蹴散らせば

あちらでは大群の中に襲いかかる。

多勢に無勢ながら互角に戦ううちに

武装を整えたイスパニア人が

すばやく大きな隠し戸を開け

友を助けに駆けつける。

対して敵は正面より進み出で

かくてイスパニア人とアラウコ人の部隊が

血を呼ぶ軍神マルテの業を見せんと

広い原野に相見まみえる。

緒戦は両者引き分けるが

こは一カステイリア人对百人の戦いであった。

色着けのない粗末な鉄が

要塞から繰り出す兵たちに向って来る。

鋭利な武器を交えんと彼らは

躊躇うことなく突進し

非情なる刃先で目指す敵の

弱点と思しき個所に狙いをつける。

火の山の金床に鉄鎚を下す

キュクロプス（元）さながらに

打ち下ろし叩きつけ切り落とし

空な洞窟を轟かす。

かくて雌雄を決するには至らなかつたが

兵士の数の多さで彼らは

著しく優位に立った。

イスパニア人も勇気にてこれを補つたが

わが兵一人が百人に耐えるを見て

苛立つ不遜なる蛮人どもは

悪魔の如き激しさで

キリスト教徒の掃蕩（そうとう）にかかる。

イスパニア人堪らず

戦場を放棄し、ひしめき合つて

城門に駈け込み

蛮人どもの進入を阻みつつ

防禦に万全を期して

橋を上げ鉄格子の扉を閉じる。

彼らは敵の猛攻を恐れて

砲火を高々と打ち上げる。

だがそれも何ら益することなく

万事休すと見た彼らは

自らの敗北を明白なものと考え

全員の一致により

城塞を放棄する決意を固め

好もしき夜陰に乗じて、

辺りの静まり返るのを見計らい、

出城を決行した。

全員が馬に乗り揃うや

一斉に扉を開き、橋を倒して

駿足の馬を駆りながら

敵の隊の前列を襲い

傷つけ、蹂躪じゅうりんしつつ突破し

幸いにも誰一人失うことなく

夜の闇に護られながら

安全なプレンの砦に到着する。

アラウコでのこの事件の間、

上質の金山に富み

当時のチリでも華やかであった

隣の町ペンコには

バルディビア隊長が住んでいたが、

そこにエスタードで政変と評議の会が

あつたと断言する知らせが

風の便りとして伝わった。

常に騒ぎを好む町民たちは、

自由と戦を望んで

彼らもまた騒ぎを起こし

横柄な振舞いに出る

約束した奉仕にも背きそむ

その重荷を振り落とし

恥知らずにもその尊大な項うなじを伸ばして

カルロス陛下への従順を拒む。

怠情にして無頓着なバルディビアは

疑い深く、怠慢で不注意者であった。

コンセプションにて多数の人を集めたが

彼らよりも己の幸福を当てにすること。

この男、多少なりとも勤勉ならば

兵士と武器と兵糧と

六丁の銃と二門の大砲で、

崩れた城も持ち堪えたものを。

彼はラ・インペリアルインペリアルの町と協約し、

武装兵を派遣させ

トゥカペルの町に直行させ

そこで彼と合流させ、

その他にて模範的な懲らしめを行い、

二度と再び戦いを起こさぬよう

津々浦々まで徹底させる決意であった。

然るに彼はその有益なる道を辿らず、

疎んじてその道を外れ、

いま一つの貧欲の道に迷いこんだ。

それは金鉞に通じるものであった。

豊かな鉞脈の齎す

素晴らしい貢物、贈り物を見んものと

欲の皮を膨らませてそこに留まり、

かくて華やかな運命の糸は断ち切られた。

今も述べた如く、もしも早目に発ったなら

定められた時刻に着いていただろう。

だが掘り出される見事な金属に

彼は現を抜かしてした。

やがて彼は発たぬ方がよかつた時に

その地を発ち、しかも急いだ。

貧欲の残すものについて語るべく、

この歌章はここで留めたい。

第三歌章

バルディピアは少数のイスパニア人と若干の味方のインディオを率いて、懲らしめのためにトゥカペールの家に向かう。狭い峠でアラウカ人の斥候兵が彼らを殺し、後に彼らは戦いを仕掛け、彼と部下は勇猛なラウタローの活躍によって全滅する。

ああ不治なる病よ！ああ甚だしき勤しみに
糧を得たる大いなる疲れよ！

誰しも持つ粘り悪徳、
公益と福祉の敵なる
理不尽にして奔放なる意志、

貧欲なる獣、

我らのあらゆる不幸の始まりと終りよ！

ああ、人間の飽くなき欲望よ！

華やかなる身分の領主にして

その高き地位に甘んぜし者を知らず、

下賤なる農夫にして

この病と無縁なる者も知らず、

将又上を目指す欲望と野心に

限りあるを知らず、

絢爛と富と身分は

節度ある者をも惑わせ、満たす事なし。

バルディビアを見よ、歩兵隊の一兵士たる
しがない身分であったが、いまや

五万の部下から一日に

黄金十二マルコを献上される身の上。

加えて更に多くの利益にも満足できず、

かくて彼は貧欲の虜となり、其処に留った。

貧欲こそはかくも激しい戦いと

この地全土の喪失の元であった。

貧欲こそは かなる

南極の地にインディオを見出した。

貧欲故に厳しき強制と迫害の下で

彼らはひたすら働かされた。

たが締め過ぎた籠なごが切れるや

彼らは苦しみを希望に転じ

手荒き復讐により

自由への新たな道を求めた。

健康を害した人に助言したり
説教はしたがるが

自らはそれを実行できぬことは

まことに吾人の熟知するところ。

平和の御世にあるときは

苛酷なる戦いについて巧みに語り

危険の程遠き処では

いかに見事に助言や説教をすることか！

安全な港に寛くわろぐ者は

過ちを犯す者を痛く嫌い

いとも鮮かに万事を片付け

あらゆる事に方法と調和を与え、

事件や被害の明らかになるのを見て

容易に決定を下せるものだ。

だが正しく進む者も一旦緩急かんきゅうあれば

その首尾は神様にしかわからない。

バルディビアは兼ねてよりの

精力的な速かさを示さず、

不幸な未来を予感し、懸念し乍ら

不運にして厳しき運命さだめの

道を歩み続けた。

彼は蛮人の待ち伏せを恐れ

安全な道を進むべく

若干の者を試しに先行させた。

だが彼らは決して知らせを持ち帰らなかつた。

我が方の者たちは遅い斥候が

もはや定めた刻限に帰らぬのを見て、

或る者は被害を明白と断じ、

或る者は何らかの障碍ありと考えた。

この件に関する様々な助言や意見があり、

遂に彼らは全員が運を天に任せ

同じ出来事と同じ死を覚悟しながら
前進することを決めた。

後に恐怖心も生じたが

彼らは敢えてその逞しき両の腕かひなを信じた。

しかるにそのめでたき運命を疑わしめる

とある出来事に遭遇した。

物の二レグワニも行かぬうちに

友軍の首が目に入った。

血ぬられた胴体から切り離され

高い木の幹に掛けられていた。

眼前の無惨な光景にも

堅固な彼らの心は動揺しなかつた。

寧ろ堪忍袋の緒を切らし、

一入復讐心を燃え立たせた。

新たな怒りに駆られた彼らは

遅き歩みを呪い、口々に呟く

ただバルディピアのみは黙し、時の到来を恐れる
だが沈黙と悲嘆を打ち破り

こう言った。「おお、努力と勇氣と理解力の
すべてを併せ持つともがら輩よ。

われわれを亡さんと反旗を翻す

この土地の無恥ぶりは見ての通りである。

信仰は壊れ戦端は開かれ

一切の協定は破られんとしている。

余には荒々しい喇叭の音が聞こえ、

悪魔の如き火の燃え盛るのが見える。

「この国の力は諸君も熟知するところにして

すでにわが方の甚大なる損害により実施済み。

見よ、運命の女神はその手を差し延べ

諸君の劔を導き給うた。

費した労力と血、

大地はその血潮を呑みこんだ。

さて我々には時間と武器がある、
ここで新たに衆知を集めるのが良いと思う。

「彼らが如何なる者なるやは覚えがあらう、
彼らを知る訳は十分にあつた筈。

もしもわれらが勝利を収めねば、

戦場で彼らを倒さねば、

その高慢不遜は益々嵩じ、

遂には何人も手出しが出来なくなるだろう。

われわれの名誉と大義を全うするために

何をなすべきか、余にはよく解らぬ」

その齡と経験に乏しき

一座の思慮浅き若者たちが

例によって軽率にも

愚かなる強がりを示して言った、

「おお、隊長殿、何卒私どもに

十名ばかりの者を給わりたい、

アラウカ人の軍を蹴散らし
行く道を平げましょう程に。

「かつて困難に臨んで尚せざりし事を
行なうは我らの名誉に相応しからぬ事。

一歩たりとも退くのは

我らのなしたすべてを汚すことになりましょう。

危険に対し堂々と胸を張ることにこそ

我らの求める栄光はあるのです。」

バルディビアはこの返答を遺憾に思い、

怒りと恥かしさで、沈黙した。

おお、バルディビア、令名高き男子よ、
さぞやこの青臭き言葉は口惜しかったろう。

君は兵として嘗て恐れたことはなかった、

だが今、よき隊長として恐れているのだ、

有能にして賢明な人士として、君は知っていた、

宣告された死の道を着実に進んでいることを、

だが君は、人に欠点を論あけつらられるよりも
むしろ一命を落とす方を望む。

折しも味方のインディオ一人現れ

彼の足下に跪き、大声で言うには、

「おお、隊長、何卒

禁じられた一線を越えませぬように、

トゥカペルにて二万の兵が

恥かしき生涯を送るよりは

恐れず名誉ある死地に赴かんと誓い、

あなたを待ち受けています。

味方の蛮人の進言により

俄に微かな戸惑いが生じた、

一同の心の中を凍てつく恐怖が走る、

悲しき死が、彼らの間に姿を現す、

だが長官はそれまでの当惑を拭い去り

勇気を奪い、彼らに向かつて言う、

「各々方、何を疑うことがあるう。
敵を見ずして取り乱すと言うのか。」

説得をそこで中止し、

彼は勢よく馬に拍車をかける。

五体の恐れを振り払い

勇敢な一隊が彼に続く。

程なく彼らはトゥカペルの

盆地を目のあたりにするが

かつて華やかに立っていた城壁は

土台から崩れ、いと遠くに見えた。

ここにバルデイビアは立ち止まって言った、

「おお、わが信頼するイスパニア人よ！

かくも堅固を誇りし城も崩れ去った。

余はあの城に唯一の希望を托していたが、

見ての通り、眼前には不実なる敵兵がおり、

その槍はすでに御身らを脅かすに至った。

さればもはや御身らに申すことはない、
救われる道は唯一つ、戦うのみ。」

彼はこのように述べ、

その言葉が終り切らぬうちに、

敵の大軍が四方から

彼らを取り囲み、

中広の鉄の穂先のついた槍を振りながら、

「嘘つきの泥棒め！今日こそお前らは

土地と命をここに置いて行き、

われらへの大いなる借りを返すのだ」と叫ぶ。

ここに至ってバルデイビアは

力と運を試す他なしと見て、

敵の攻撃を受けぬため、

近くの小部隊目がけて進むべく

ボバデイーリヤに命令した。彼は

バルデイビアの忠告もそこそこに

僅かの兵と大いなる気力で

マレアンデの中隊に襲いかかる。

蛮人の槍兵隊は切っ先を下げ、

その少数の兵を待ち受けていた。

だが襲撃と同時に切っ先を上げ、

大きく戦列を乱して道を開け、

抵抗せずに彼らの入城を許し、

かくして彼らの中隊の真中に入れると

今まで切れ切れの隊列は繋がり、

その中のキリスト教徒を葬った。

水音を立てながら

清らかな流れを進む

魚の群を感じた

飢えたる鰐が

用心深く、大きな口を開け

魚を呑みこむとその凹んだ

顎を閉めつけて粹き

貧欲なる腹を満たすにも似て

こうしてその小隊は

殺人者に捕えられ

僅かの間に亡され、

キリスト教徒のうち一人も生き残らなかった。

すでにアラウカ人の軍隊は

整然たるラッパの響きに駆られ、

大音響と整った歩調で、

臆せず、四方八方から攻め立てていた。

血に飢えたマレアンデの軍勢は

益々大胆に歩を進めた、

それを見たバルディビアは

怯まず、部下の軍曹に命じ、

傑れた兵士を選んで

敵軍を襲撃させた。

だが堂々と死に立ち向かったのは
十人のイスパニア人のみであった。

時ならぬ蛮人どもの軍勢に向かつて

彼らは恐れを知らず突進する。

その合戦で十人のうち一人として

槍を朱に染めぬ者はなかった。

鞍を離れたのはただ一人のみ、

彼は今はの時を歎きながら、

残酷なる死に胸をはだけ、

傷口を下に、地面に斃れた。

また他の九人も華々しく

戦った後斃れたが

彼らの功は永くその名誉を

讃えられるに相応しいものであった。

十人とも玉と砕けたが

その死の復讐はすでに済まされていた。

この時イスパニア人のラッパが響き
最後の突撃を告げた。

イスパニア人は齒を食い縛り

槍を握り締めて出撃し

敵の四つの隊のうち最強の部隊を

遙か彼方に退却せしめた。

傷つけ、痛めつけ、踏みつけ、殺し、

脚を、腕を、頭を刎ねた。

蛮人どもはこれに驚かぬばかりか、

かえって戦の場を奪回し、わが軍を退ける。

生死を賭けての戦いが交えられ

—— 神よ、そこに斃れる者を許し給え——

激しい攻防の中で

双方に多数の死者が出る、

互いに陣地を大事と死守し、

一歩たりとも退こうとしない。

赤き血は原野を覆い、
緑の牧場は朱に染まる。

非情なる武器の厳しさに

鍛えし鉄の鎧も血塗られ、

屠場さながらの打撃に

内に秘めたる腸が露はらわたになった。

胴体より切り離された頭は

まだ生命の意識を残したまま

白目を剥き、口を歪めて

血なまぐさい戦場を転った。

敵のすさまじい武器は

万物を血の色に変える。

その攻撃は尚も烈しいが

すでに戦闘の力は衰えている

そこにいる者は皆、

死という最後の憩いしか望まず、

臆病なる者も一途に

復讐の後にこそ死なめと思う。

眼前の死と終末の熾烈さが

わが軍に稀有なる力を生み出させ、

アラウカ人は名譽と

人命を失って戦に破れた。

遂に彼らが背を向けたは歴然。

「われら勝てり、エスパリーニャ、エスパリーニャ」

の聲が響く

だが抗い得ぬ厳しき運命は

或る不可思議な定めに道を開いた。

或る名だたる酋長の子息にて、

バルディビアの小姓として仕え、

彼に好遇されていた男が、

そこに居合わせたが、

彼らの慌だしき退却を見て

祖国愛に動かされ、

大声で呼びながら

次のように鼓舞した。

「おお、恐れに導かれた盲目の人びとよ、

御身らはその臆病なる胸をどこに向けるのか？

千年を費して築いた名声

御身らのなせしすべてが、今亡ぼうとしている、

嘗て侵された例のない力と

御身らの法律、規則、権利は今や萎え

主として、自由で、畏怖された身分から

御身らは奴隷となり、抑圧されているのだ。

「御身らは名誉ある血筋を汚し

素晴らしき大木の幹に

不治の創傷と苦痛と

永遠の恥辱とを注ぎ込むことになるのだ、

敵どもの無力なる状態を見給え、

あの憔悴と、馬の

激しき息使いと、血と汗にまみれた

脇腹を見給え。

「父祖より連綿と受け継いだ

われらの慣わしを捨ててはならぬ、

アラウカ族の名を、その頂点から

不名誉の淵に転落せしめまいぞ。

重き軛と隷属から逃れ、

厳しき鉄には大胆なる胸を向けよう。

御身らは何故に勇敢さに背を向けるのか、

そは危険のために備えしものなるぞ。

「拙者の述べし事を心に留め給え、

盲目にして愚かなる恐れこそ混乱の元。

抑圧されし祖国を解き放ち、

御身らの名を永遠に残し給え、

戻り給え、好運が御身らを呼んでいる、

かくも大いなる勝利を拒む勿れ。
せめて、その軽き足を止め給え、
御身らを守り死地に向う吾を見給え。」

こう言つて彼は一本の太き槍を
主人たるバルディピアに向つて構え、
自ら大いなる手本と希望を示して
彼らを更に説得せんものと、襲いかかった。
そして宛ら夏の酷暑に太陽を
その冷たさで緩げんものと
水に跳び込む鹿のように
イスパニア人の鉄の間に躍り込む。

最初の唯の一突きで一人を貫き、
別な一人の脇腹を狙う、
その堅き槍は甚だ太かったが、
血に染まった鉄は腹を貫いた。
素早く跳びはね、立ち戻り、掻き回し、

更に一人の兵の腿を穿つ。
その時、強靱な槍は折れ、
傷口に大きな断片が残った。

魔の穂先が折れるや
忽ち地面より重く硬き戦棍を掴み上げ、
殺し、傷つけ、首を刎ね、地面に倒す。
かくて東の間に名声を手に入れる。
戦のすべては正に彼の中に要約された。
攻撃が止むと、彼に対する狩が始まる。
だが彼はおちこちに身を翻し、
彼らは徒に空を切るのみ。

緒戦に勝者となるも
やがて敗者の憂き目を見るといふ
かくも恐しき試煉を聞いた者がいようか。
また古の文にて読みし者がいようか。
剩あまつさえ野蛮なる一若者の

只管なる勇氣のみにて

キリスト教徒の手より強引に

かくも大いなる勝利を奪い得たとは。

愛する祖国のために一命を捧げし

プブリウス・デシウスの二人と雖も、

またクルシウス、ホラチウス、スケボラ、そしてレオニ

ダスも

かくも天晴れな働きはしなかった。

また熾烈なる合戦において

その劔で勇名を馳せし

フリオ、マルセロ、フルビオ、シンシナト、

マルコ・セルギオ、フィロン、スケバ、そしてデインタウ

スも。

借問す、これらの名士たち、

この蛮人の壮挙に適う何を為したるや。

少くとも成功を疑われた

いかなる企て、いかなる戦に挑みしや。

臆病者をも大胆にする

富への飽くなき渴望と権勢欲に駆られる事なく

いかなる危険に身を投ぜしや。

数多の人が名声と虚栄を望み

大手柄を企てたり

いそいそと死に身を委ねる。

彼らは強き打撃に耐えることを知らず、

己が運勢の傾くのを見るまでは

志操堅固にして勇ましいが

脆き運命の支えが潰えるや

勇氣と氣力を共に失う。

此の若者は祖国に下された

指令や致命的宣告をかき乱し

新しき紛争を起こし

遂にはそれを覆した。

運命の女神や宿命に抗い

決然として己が意志を貫き

勝者の勢いに立ち向かい

臆せる者を勝者へと導いた。

大地は武器で覆われ

衆寡敵せぬ戦いは頂点に達した。

その時カウポリカンは友軍の声に

ふと我に帰り、その部下たちも

たった一人の若者が、かくも多勢の

者にさえなし得なかつた抵抗を

試みているのを見て恥らいながら

勇気を燃え立たせた。

ふとした油断から

あるいは如何わしい場所に居合わせたとき

他人には気づかれぬものと思ひ

争いや危険な出合いにおいて逃げ出すが、

後を追う人たちに

知られたとわかるや恥かしくなり

名誉心に駆られて勇敢になる、

これは名誉を重んじる人によくある事。

そのように、アラウコ人は引き返し

勝利を収めた人たちに攻撃を加える

かつて降伏せし武器を振りかざし、

全員が口々に死を誓う

大地は攻め合う両者の

恐るべき怒りで震え、呻く。

彼らは怒りと猛烈な力で

残った僅かの血を撒き散らす。

デイエゴ・オロは槍先で

パイナグアーラの胸を貫き、地面に倒す。

だがカウポリカンは彼を傷つけ

その手柄を長く楽しませなかつた。

斜に鉄の槌矛を振り下ろせば
その凄い力はまともに命中し
兜の内側には
滾る脳味噌が跳び散っていた。

これに続いて別な男が倒れた、
その形相の余りの変化に、見分けもつかぬ程。
武装した頭も打撃を受けて、
全体が潰れていた。
バルディビアはオンゴルモと鉢合わせとなり
互いに攻撃をしかけ合った。
バルディビアはオンゴルモの片手を傷つけ
アラウカ人の打撃は空を切った。

勢いづいたバルディビアは
もはやオンゴルモに構わず、
勇猛に戦う元氣者
レウコトンの処にやって来る。

彼はフワン・デ・ラマス・イ・レイノースと
孤軍奮闘し、その名声を競う、
彼は戦巧者で聡明で、
敵と互角に亘り合っていた。

戦闘が開始された。
バルディビアが争いの場に着くや
片やアラウカ軍が駆けつけ
彼を助けようと介入したからである。
熾烈な戦いが再開され、
両側から人の波が押し寄せ
その高いどよめきは星に達し、
鋼は百千の火花を散らした。

勝利の行方は紛わしく
その疑わしい状況は長く続いた。
空気は大音響に充ち
大地は血で赤く湿っていた。

名誉ある結果のみを求めめる者、

片方の腕で両の腕を攻めつける者、

相手に生々しい死を逸早く与えんと

短剣で一番の弱点を探る者。

フワン・デ・グディエルにとって自らを

戦のベテランと称するは得策ではなかった。

何故なら彼は劣らず巧者なグァティコールを

襲撃したが折悪しく、努力も空しかったから。

偶々その時兄のプレンが

近くに居て、彼の左脇腹に

短剣を突き差し、傷口を開けると、

そこから死が侵入し、生が抜け去った。

アンドレス・デ・ビジャロエールは

大量に流した血のために今は衰弱し、

蛮人どもの間に入って、最も名誉ある

死を求めて歩いていた。

フワン・デ・ラス・ペーニヤスも重傷を負い

武装した厚い兵士たちの壁を破って

彼の側そばに行つた。こうして運命の女神は

二人に、同時に、同じ死を齎した。

異教徒と洗礼を受けた者の

数の差は比ぶべくもなかった。

片や無数の編隊であり、

片や僅かに六十名、

それまで疑わしい様子だった

変りやすい不安定な運命の女神は

もはや悪意を是認し、それまで不当だった

大義と名声を正しいものとした。

バルディビアの陣営を支えていた

蛮人二千名から成る友軍の兵は

弓矢の術に長けていて、

更に多くの血を流して

残虐なる破壊を募らせたが、
氣力に溢れ、死においても

生命を支え得る限り降伏しなかった
イスパニア人と行動を共にした。

本章にて、また前の章にて

バルディビアが、軍神マルテにして

漸く為し得ることを、劔を以て為した

その偉業の程を披露したが、

今や彼一人では如何ともし難い、

部下の大部分が失われ、

他の者たちも、彼の最期を知り乍ら

如何なる手段も收拾策も講じないのだ。

二人ずつ、三人ずつ、

血まみれの、僅かな兵が倒れてゆく、

既に宣言された終末を眼前にして

蛮人どもの勢は募る。

乏しき兵士の数は

やがて僅か十四人にまで減った。

しかし彼らは粗製の鉄に倒れるまで

操を堅持し、降伏を望まない。

バルディビアには、偶然そこに現れた

一人の僧がいるだけであった。

壊れた味方の陣営と

対策のなさど僅かな人員を見て

彼は言った「さあ、もう戦わずともよい。

他の道を辿って生き延びるのだ。」

こう言って彼は馬に力一ぱい拍車をかけた。

ミサのための聖職者が後を追って駆けて行く。

宛ら二匹の豚のような大きな猪が

野性の血に飢えた

熱心な獵犬に追い立てられて

勢子たちから逃れ、

そして優れたアイランド産の獵犬が
足どりも軽く跳び出し、追いつくように、
否、それに劣らぬ俊足と欲望とで
彼らは憐れなキリスト教徒を追いかける。

投石の数限りなく、

さながら激しい豪雨の様であった。

その間断なき雨のため、

彼らは行く手を阻まれた、

遅れる者は勇者にあらずとばかり

蛮人どもは彼らに襲いかかった。

やがて僧は斃れ、バルディビアは

手荒い扱いで元老の前に連行された。

カウポリカンは彼の存命を知り

且つその置かれた状況を見て喜び、

勝者としての尊大な声と身ぶりで

威嚇を交えて問い正す。

バルディビアは惨めな捕虜として

返答し、卑屈に、従順に振舞い

死を免れるよう請願し、土地を

解放し平和にすることを誓う。

傷心のバルディビアに心を動かされ、

彼はその言を受け容れようとしたと言われる。

だがカウポリカンのその老齡ゆえに尊敬する

冷酷な親戚のものが

「降伏した輩の言を何故信用するのか、

汝は時間と武器を左程に失いたいのか」と言う。

そしてバルディビアの脳天を狙って

堅い杜松ねずの木の太枝を打ち下ろす。

頑丈な綱で棒に繋がれた

猛き雄牛が呻き声を上げ、

臆病な人たちが遠巻きにして

感心して見つめる中を

鍊え上げた腕ききの肉職人が

重くて堅い槌を振り上げ

凹んだ首に激しく打ち下ろし

その息の根を絶つように

眉をひそめてバルディビアの言を

聞いていたその白髪の老人は、

両の手で決然と

鉄のついた棒を高々と振り上げた。

粗野なるこの老人の一打は無駄がなく、

かくてバルディビアを永遠の眠りに委ねた。

そして地面にはたと倒れたその体は

小刻みに震え、命を手放した。

この蛮人の名はレオカートと言った。

偉大なるカウポリカンはこの事に憤り、

彼の勝手な振舞いをたしなめようとした。

だが彼は軍の懇願を受け、

こうして遂に老人は難なくその場を逃れ、

そして破壊は存分に遂行されたため

この悲報を知らせんにも、キリスト教徒で

この試練を逃れ得た者は誰もなかった。

三千人の蛮人のうち、生き延びたのは

僅かに二人。彼らはわが方が

潰滅したのを見て

繁みに潜み、

そこからの激戦の終りを見届け、

そして安全な場所に来てその話をした。

星月夜なりし故、

誰に見られることもなく逃げおおせたと。

とかくする中に暗き夜は

足早に中天に上り

陰気なる翼で、

広大な地面で一帯を覆った。

折しも勝ち誇れる一隊は

何ら警戒せず、武器を捨てて

巨大な人垣を作って踊りに興じ

大勝利を祝っていた。

その知らせは瞬時にして

アラウカの全土に広まり、

太陽が姿を現す前に、

野原は食物で覆われた。

大勢の人びとが集まり、

あらゆる慶事に常に加わる

老若男女の

一大集団ができ上がった。

小鳥が曙を告げ

楽しげに歌声を繰り返していたとき

彼らは高い木立を取り巻いていた。

大きな広場を囲むその木々には

体から切り離された

イスパニア人の頭が串刺しにされていた。

木の幹は枝を払われ

戦利品が飾られていた。

そして人垣の内部では

戦勝を讃え記念する

美しいとりどりの草花に囲まれて

祝賀の酒盛りが催される。

酒は大胆さを増長させ、

イスパニアは一大危険に曝された。

一介の兵までが、城の土台も許さじと

豪語していたからである。

そこでの全員の意見は

時を移さず、足を早めて

大軍を派遣し

油断せる諸都市を襲うことであった。

敵は突然の襲撃を受け

恐怖によって崩れ去り、

かくて、キリスト教徒は一人も生かさず

晴れて祖国を取り戻すことになろう。

大軍を以て

その怒りを遂行すべく

命令が下り、これが為されれば、

事実上、彼らは戦闘でイスパニアが

武力により窮地に陥り

イベリアの地が異国人の手で

耕されることになると考え

国に引き返す気になるであろう。

その企ての空しさを見抜いていた

レオカーノの息子は、そうはさせまいとした。

有能で賢明な人にふさわしく

彼はそれをよい方向に正そうとした。

彼は機が熟し、一同が

最もその気になる時を待つ、

祭と陶酔が終ったとき

皆に向かつてこう話す、

「各々方、かくも貴き、快き自由を

求める点で、私は人後に落ちません、

また、祖国の崇高なる主権の

回復を望むことにおいてもそうです。

だが、大切なことは、勝てる時に

わざわざ敗北を求める必要はないということ。

そこで私はこうした気持ちと目的から

確かなものを危くしないようにしたい。

「一等理に適った意見を

慎重に受け容れ給え、

諸君の子息や妻を大切にすることは

正しい原則を實踐することにある、

諸君の名誉と土地と財産は

いま将に回復されようとしている、

時は助言の父なり。

今われわれの手に手段が与えられたのだ。

「諸君はバルデイビアとその部下を斃し、

その強力な陣地を破壊した。

各都市でこの事が知れるや

彼らは必らず復讐に来るだろう。

われわれとしては敵に道を開けてやろう、

これが我が方を最も利する道、

怒りに燃え、馬を駆りて来るがいい。

だが帰りの道は苦難の道。

「勝利はわが手中にある。

且つ陸路を来るには幾多の

沼や湖やぬかるみや

木の生い茂った、険しい山で阻まれている。

この地ではアラウカ人の方が戦いに有利だ、

イスパニア人は城壁の中の方が有利だ。

誰しも自宅で襲われる時の方が

賢明に、強力に、大胆に振舞えるもの。

「私はこれを諸君に言いに来た、

わが立場を正しく有利に導くための

最も確実にして適当な方法として

若干の適地を選び、そこで待とう、

そこでは我々の道理と権利を

この世の誰一人妨げることはできない。

彼らが我々を探すのを恐れたときこそ

彼らの駐頓地に乗るこもうではないか。」

將軍の行った演説に

全員が熱心に耳を傾けた。

そして彼らの再建に好都合と見て

大方の者が賛成した。

人びとがすでに全く落ち着いたとき、

カウポリカンはかの若者の方を向いた。

敗色濃かりし戦を

奇蹟的な試みで勝利に導いた男である。

彼を改めて讃えるべく

左手でその右手を握り締めて言った

「おお、汝こそは快男児なり

汝は清らのアラウカの名と国境を広めたり！

汝こそはわが祖国を救い、

暴虐者より取り戻してくれた。

この勝利は一に汝の手柄によるものにして

賞讃と不朽の記憶に相応しい。

「さて各々方、

(と彼は元老の方を振り向いて言った)

ラウタローが(この若武者の名前であった)

我々の名を高めたことは明白なるが故に、

その偉業を讃え

余に与えられた権限に基づき、

それに報いるには不十分ながら、

彼を隊長に任じ、余の補佐役としたい。

「御主らは彼の功績の証人なれば、

彼の選抜する兵と共に、

彼の最適と考える地点で

敵軍の到来を待ち受け

迎え撃つ態勢をとられ

余は残りの友軍と共に

エリクーラへの入り口に陣取り

同様の機会を待つことにする。」

その任務は將軍の与えた恩恵と共に

好青年に受け容れられた。

好感を抱く他の者たちも賛成した

悔しく思う者もいたが顔には出さず、

恒例の秩序と習慣に従い、

偉大なるカウポリカンは彼の髪を切り、

将にその職責の徴として

上部に長い三つ編みを残した。

ラウタローは勤勉で聡明で機敏で、

判断力と言葉と思慮に秀で

性格は温厚、振舞いは優美、

背は高からず、低からず、

心は常に大いなるものを志向し、

心身共に強健にして、

頑丈な手足は引き締まり、筋肉質、

肩巾も胸巾も広がった。

彼は常に新しく

跳躍や格闘技など従来なかった競技や

焚火を囲む夜の踊りなどを試み

祭を長く続かせた。

長い競技の後には

トロイ人もギリシャ人も

嘗って受け取ったことのない

見事な賞や宝物があった。

この時、カウポリカンの許に

一蛮人が取り乱し、息せき切って駆けつけた。

色を失い、身振りも只ならず、

汗と埃にまみれながら、男は言った、

「申し上げます、早くお助けを。」

あなた方の陣地は荒らされ、

待ち伏せの兵士たちの敗北は明白、

大方の者は斃れ、寸断されました。

「エリクーラの地を十四名の

いとも勇ましき兵士が

極上の甲鎧に身を固め、

身軽き駿馬に跨り下って来ました。

ただこれしきの兵により
貴方の槍兵二中隊が蹴散らされました。
私は咄嗟に損害大なりと見て
知らせに駆けつけました。」

カウポリカンは驚いた素振りも見せず、
仮令武装はすれどかくも僅な人数なら
所詮逃げ切る事はあるまいと、
皆の者に恐るるに足らずと説いた。
そして例によつて手際よく、
自らは後より残りの兵と共に行く故に、
駿足の軍を揮いて迎え撃つべく
新任の補佐役に命じた。

ラウタローは二つ返事で引き受けると
十分な選抜兵の中隊を編成し
一同の評判を得たい一心で
急拠迎撃に打って出る。

だがここで軍神マルテの大音響が
遅しとばかりに吾を待つ
今こそ十四名につき述べるべし、
血なま臭き激戦の様を述べるべし、と。

彼の名声よ広まれ、知れ亘れ、
その刀は燦然と輝くが故に。
また彼らも永遠に記憶されんことを。
戦における彼らの勇氣はそれに相応しく、
歴史がそれを証明するだろう。
だがかくも大いなる事を述べるには
新たな元気と新たな章が不可欠、
されば本章はこれにて終りたい。

第四歌章

トゥカベルのバルディビアの軍と合流すべく、十四名のイスパニア人が到来する。彼らは待ち伏せていたインディオたちを見つけ、執拗な衝突を繰り返す。ラウタローが新鋭部隊を揮いて到着する。七名のイスパニア人と同道の友軍兵全員が死に、他の者たちは好運にも逃げ延びる。

實に正義は良きものにして且つ大切なり！
百千の悪も、これにより捉えられる。
怒れるアラウコの住民たちが
挙って反逆し、

その怒を露にするのも、

然るべき時に懲罰を受けざりしため。

一度で治らぬ潰瘍は

所詮、荒療法に依る他なし。

或る害が他の害を生むと予想され

病がその治療を求めるとき

鉄を用いて治療せざるは

美德にあらずして悪徳なり、怠慢なり。

されど慈悲や美德のすべてが

その力を失う程に厳しきは悪し。

腕を救わんがため、恐れず
指を切る人こそ、真に慈悲、敬虔の人。

正義は所構わずその手に
鉄を持ってと言うにあらず

病状の度合いにより、

また悪の重大さと目的による。

而して今、明らかなことは

結局、貧欲のために腐敗した悪が

深く人の心に根ざし、

支配する余地を与えたこと。

だが、衝動的に振舞う

軽率な男のように、

正義乃ち非人間的と解してはならぬ

又邪悪な手で無闇に

原因も根拠もなく

一途軽率と空威張りから

その悪業を後世に残したがる人の様に、
名声を得ることを血を見る事と解してはならぬ。

ここに記すべき珍しき事など

無いわけではないが、

さ程重要でなく、反って危険な事に

余り深入りする積りはない。

人は多分、それを疑わしい事と思うだろう。

わが筆よりも、時がそれを語るだろう。

ただ一言、王の居ざる処に数々の

侮辱ありとは賢者たちの意見である。^三

だが、理不尽な事について語るのは

荒野の只中で風に向って道理を説く様に

益なき骨折りに他ならぬ故

話を本筋に戻すことにしたい。

我が軍の状況や如何にと言えば

獐猛なる部隊と戦い

名声と詳価と名誉と栄光を我が物とし
永く記念すべき事を為したと述べておこう。

そはいといみじき事ゆえ

細心の注意と權威ある筆に俟たねばならぬ。

されば以下に述べる英雄たちの偉業を

読者諸氏よ、各自要約して頂きたい。

すべては手短なるまとめに過ぎねど、

わが力の及ぶ限り述べてみたい。

且つまた賞讃されて然るべき兵士たちの

名前をも挙げておきたい。

アルマグロ、コルテス、コルドバ、ネレーダ、

モラン、ゴンサロ・エルナンデス、マルドナード、

ペニャローサ、ベルガラー、カスタニエーダ、

大胆なディエゴ・ガルシア・エレロ、

ペロ・ニーニョ、エスカローナともう一人で

数は完全なものになる。すなわち

ドン・レオナルド・マンリーケが最後だが、
勇気にかけてはやはり最初の人。

予定通りバルディビアと合流したのは

この十四名の兵士だった。

彼らはバルディビアの死を知らずに

インペリアルという町を出発した。

プレンという阻しい坂を登り

頂上の、見晴らしの良い場所から、

道に木の枝の散らばるのを見る。

兵士たちの給金と集いの徴^{しるし}。

彼らは土地の様子の変化に気付き

人びとを呼び集める。

だが道筋を変えはしなかったし

恐怖を抱いて堅固なる意志を変えることもなかった。

瑞々しい赤い曙光が回り来て

彼らを痛く満足させた

やがて日陰は短くなった。

折しも彼らの眼前にエリクラの盆地が広がった。

インディオたちはここに潜み

わが軍の到来を待ち伏せていた。

自らは安全に、敵に損害を与えるべく、

自らは更に身を隠さんとして

手製の森を作り

敵が偽装に気付かず

油断して三々五々現れ

危険に気付く前にか捕えんとする魂胆。

十四名のイスパニア人は急勾配の坂を

盆地目指して真直ぐに下りて行った。

そこには蛮人どもが身を潜め

身を枝で覆って待っていた。

わが兵たちはまだ森に達していなかった、

その時インディオたちは突然

野蛮な喇叭と唄れた小太鼓を鳴らして

彼らの行く行を塞いだ。

狩人にとっての何よりの喜びは

思いもかけず一匹の兎が

道の真中に飛び出して

慌てて足の間を跳ねたとき。

わがイスパニア人にとって近くの伏兵が

示した態度や喚声ほど

嬉しいものはなかった。すぐさま

彼らは駒を進めた。

蛮人たちは忽ち金剛石の

先端にも似た城壁を築いた。

だがイスパニア人たちは

端から端まで貫くまで止まらなかった。

男たち、長槍、槌矛が互いに激突した。

敵の威力を知って

彼らは戦に決着をつけようと
希望よりも勇氣と努力で掻回す。

三つの隊のうち二つが迂回して

彼らの行く手と退路を閉ざした。

蛮人たちに包囲されたのを見て

彼らは中央突破を志す。

彼らは再度結束して襲いかかり、

かくてその一隊は破れたが

この度の合戦に痛く傷つき乍らも

又もや元の部処に戻ってきた。

斯くして彼らは二度の襲撃で

閉ざされた敵の戦列を蹴散らしたが

自らの死の間近きを見て

人氣なき原野や岩に向けて

遮二無二突進し

左右の敵を薙ぎ倒し、

彼らに混って行くインディオたちも
四方八方傷つける。

エリクレーラへの道は

山並みの麓辺りで巾が狭まる、

この狭さの理由は

下方の谷の囲まれた湖にある。

わが軍にとって、これは僥倖であった。

戦いを続けつ、前進したからである。

そこでは後から来た一人のイスパニア人が

蛮人どもの尊大さに対抗していた。

斯くして彼らは森の中を進んだが

とある阻しき峰間をよじ登るとき

一人のインディオが慌だしく出かけるを見る

衣服も顔もその色を変えていた

男は道を横切る際

胸許より封を為したる紙片を取り出した

そはその日フワン・ゴメス・デ・アルマゲロが
バルディビアに宛てた書状であった。

大勢の蛮人の足軽が
長い紐状に配置されていた。

件の使者は彼らより先に

われわれに続いて蛮人たちも出立し

出立したのであったが、泣いているのが見えた。

同様に平地で止まった。

使者は彼らにバルディビアの悲報と共に

そして散在する人びとを集めて

他の出来事についても述べていた。

二つの大隊を編成した。

怒り狂える蛮人どもが

十四名のイスパニア人は

城塞を土台から覆くつがえしたことも。

突破こそ最善の策と知り用意を整えた。

また対策も予測も空しいと見て

一糸乱れぬ編隊は

彼らは右手の平な場所を目指して行った。

強力なリンコーヤの指揮の下で行動する。

そこは幾つかの小山に囲まれた場所、

笛と角笛と嗷れ声の楽器と

この細道の通路により開かれてはいるが

騒々しい侮る様な喚声とで

東と北と西は守られており、

残虚瘴猛な蛮人共が現れ

南は殆んど丸出しの様子である。

勇敢なイスパニア人に立ち向かうが

そこを通い慣れたる小道が通り

彼らはその誇らしげな高慢の叫びを

洗礼を受けた者の血に飢えて

歓声に転ぜしめんとばかりに

その意欲と気構え大いに募り、
敵の軍勢も小さく見える。

大声で天上の神の名を呼び
大地を呻かせ、震わせる。

彼らの中の誰とは言わぬが

梁ほどの太さの柁とねりこの

一人のイスパニア人が形相を変え、
友軍の数の余りの少なさに

槍の穂先を蛮人は咄嗟に下げる。
宛さなら強風を受けた麦の穂が

「ああ、若し我が隊が百人ならば！」と

一斉に平伏す様に似たり。

洩らしたが、元氣溢れるゴンサロ・フェルナンデスが
天を仰いでこう答えた、

敵の武器はイスパニア人の
勢いと動きに対し不十分だったので

「おお、神様、二人減らして我々を

我が方は敵の隊の倒面を突き

『名だたる十二人』とさせ給え。

その隊を無力にした。

この時、彼らは馬具を整え

彼らは馬を廻めぐらせ様

確固として鞍に跨り

遠くまで槍を投げるや

手綱を緩め、拍車を掛けて

再び獐猛な敵軍に向かって

野蛮なる隊を目掛けて出陣する。

抜き身の劔を振り翳す。

強力な槍を扱しじき

怒れるイスパニア人に向けられた

劔の刃を血で研ぎながら

無数の槍も不足とばかり

混戦模様を避けて

再び大攻勢をかける。

片や負ける事を知らず、

片や勝つことに慣れた者、

これが数多の負傷者を出し

さしもの腕を衰えさせた。

馬具は焰と燃え

凄い力と速力で打撃を受け

恰も天が地上に崩れ落ちたかの様に

一大音響を上げた。

さてもゴンサーロ・エルナンデス、

かの名高きコルドバの男を真似んと

気概に劣らぬ才能と力で

敵軍の隊列を突き進んだ。

ペニャローサとベルガーラは

勝利か、さもなれば死と心得、

豪胆なるその体で

努力と力の見本を示す。

勇敢なる兵士エスカローナは

鋭き刃を振るい

危険を冒して千人の猛き蛮人を傷つけ

その名を際立たせる。

ドン・レオナルド・マンリーケは

自ら受けた打撃を許さず、

迅速に、且つ怒りを籠めて

与える打撃を倍増し、懲らしめ、退かせる。

コルドバと言うもう一人の男は

根性のある、勇ましい若者、

数多のアラウカ人の血を流さしめ、

その日、百人の寡婦を作ったが、

天を仰いで復讐を呼ぶ一未亡人に

彼女らは挙って喜び、小躍りする。

所詮彼女らは浮気者、

変節を好む移ろい易き女たち。

一方、コルテスとペロ・ニーニョは

激しい戦闘を交え、敵を懲らしめ、

モランとゴメス・デ・アルマグロとマルドナードは

大地に蛮人の亡骸を撒き

打つ事にかけては手慣れた鍛冶屋という名の

器用な男は、敵を殺めて地面に倒す。

さて、名人級なるネレーダも

傷つけ、左右に薙ぎ倒す。

赤裸な姿で死なしめんとてか

怒りの白刃は切りつける。

仮借なき打撃の力は物凄く、

鋭き武器を物ともせず、

盾の耐え得ぬ物を

痛みを感じぬ肉体が耐える。

怒りに燃える肉体は

打撃も死をも感じない。

寧ろ憤怒の焰となって

烈しい打撃で彼らを襲い、

大勢の力を合わせて

騎馬の膝を折り

浮き彫りの馬具を窪ませ

引き裂き、鋌を抜き、壊し、締め金を外せば

壊れた部品や兜は転落し、

劔の音が空中に轟く。

リンコーヤは戦っては敵を斃しつつ

戦友たちを激励する。

その力と槌矛には勇壮なる

軍帽の冠毛では齒が立たない。

コルテスは彼の一撃をかわ躲さんと

鞍橋の間に頭を傾けた。

馬は手綱を引きずり乍ら、半死の彼を乗せたまま
広野を目ざして走って行った。

項^{うなじ}を垂れた、眠った様子 of 彼を

馬はあちこちに運んでいたが、

やおら意識を取り戻した彼は

恥じ入って手綱を取り直し

傷を負わせた男を探す。

一見して直ちにその男を確認した。

居合わせた数多のアラウカ人の中で

彼は一際目立つ存在だった。

味方を鼓舞するその勇姿と

槌矛捌きの手つきの

鮮かさ^{あざやかさ}と軽妙さから

彼が目指す男であると判った。

叢を行く素早い獵犬が

猛き猪目がけて飛びかかるように

盾を胸に、堅い鉄^{くろがね}を手にしたコルテスは
そのアラウカ人に襲いかかる。

男の片腹に切りつけると

その嚴重な胴鎧も役立たず

宛ら巨岩か城壁を動かす様に

その男を動かさせた。

拍車を得て馬は勢い激しく駆けて行き、

最早リンコーヤから安全なコルテスは

厚き敵軍の正面を突き切り

左右に多数の敵を斃す。

アルマグロはグアンコと言う名の

若き兵^{つわもの}と一騎打ちを繰り広げたが

雌雄は早々に決してしまった。

運は、然程中立ではなかった。

アルマグロが一撃で蛮人を傷つけければ

傷口から広々と死への扉が開き

赤き血の河が流れ出で

血の気の失せた五体を冷たさが支配する。

一日にかくも多数を奪う

悪魔を作り出していた。

奮闘するカスタニエーダは

殺し、踏みつけ、傷つけ、咎め、攻め、

偶然ナルポを右手に認め

鋭い劔の刃先を伸ばす

上物の網目の胴衣も役立たず

二枚革の胸当ての護りも空しく

切先は激しく突き刺さって

魂が肉体から奪い去られた。

彼らは互いに勇み立ち

熱気と勇氣と騒ぎは募り、

蛮人とイスパニア人の血は合し

流れとなって嵩を増す。

大いなる吐息に空も曇り

地獄の如き怒りが辺りに漂い

両者の執拗な戦いの余りの長さに、

彼らの腕がまだ上がり得るのは不思議なほど。

至る所で死骸が

累々と重なって山を成した。

日ははや西に傾いて、

彼らは最早力なく、疲労困憊し、

彼我共に消耗していたので

一步も進み得なかった。

猛々しい二匹の牡牛が

凄じい闘いで互いに粘り

均しく力を出し合って

息が切れ、力を失い

徐々に互いに引き退り

相對し乍らも足許揺ぎ

湯氣と荒き吐息にまみれて
砂を宙に掻き上げるように

冷えた空気を吸い込み
太陽の灼熱を緩げていた。

二人は血もなく力もなく

互いに手が動かぬ故

元気もなく互いに引き退ったが

夫々の場所から口汚く罵り合い

決して相手に背を向けず、

侮辱的な言葉で

否、両者は相手を見つめていた。

相手の死を約束し合っていた。

両者は同時に気付いて

そしてこれが終ると、危険な弓の矢を

同時にはたと立ち止まった。

敵は放ってきた。

両者は互いに離れていたが、

息切れし、力も萎えた彼らの

弓の射程ほどには距っていないかった。

執拗な怨恨がその矢を放ったのである。

水と血にまみれた双方は

誰の休めた腕からかは知るらねど

夫々の野営地から

一本の矢が勢よく飛来し、

呼吸もままならず、喘ぎ喘ぎ

激しい稲妻さながらに

互いに睨みあっていた

音を立て、空を切りながら

彼らは手足を労り

コルドバの脇を斜に掠めた。

胸と口を涼風に向け、

だが怒り狂うその先端は外れ

モランの方に針路を変え
彼の右目に命中した。

モランは荒々しい頑丈な手で
その矢を目玉ともども引き抜いた。
厳しき死への途上にある彼を見て
ゴンサロは同情し、激励するが
モランは呼んだ、「余は未だ
わが力衰えたりとは思わず、
されば斯様に傷は負えども
眼前の敵を幾人たりとも倒すは可なり」

彼は勇んで馬に拍車をかける。
然れど再編成った部隊の
大軍との戦いに馬は疲れ
駆くる能わず。

気遣うゴンサロ・フェルナンデスは
リンコーヤのすでに待ち構えるを見て

素早く彼の前に立ちはだかり
強引に元の場所に引き戻した。

大喚声と共に移動しながら
とある緑の丘の上に
軍旗を靡かせて
ラウタローが精銳を揮いて現れる。
その様、さながら飢えたる獅子が
彼方より獲物を見つけて喜び
長きたてがみを揺さぶりつ、
呻りながら辺りを見渡すに似たり。

ラウタローは一気に急坂を駆け下り
イスパニア人目指して突進する
イスパニア人が戦いを放棄せねば
彼一人で決着をつげんとする魂胆。
彼は部下たちの遙か前に行く
その功績や讃えるべき。

待つはただ、腕や脚や頭に
重傷を負った十四人のみ。

勢い込んだ四千の敵が襲いかかるが
わが方は団結し、彼らを待つ
名誉ある死を望みし故、
さしもの大軍にも恐れる事なし。
獐猛なる敵は誇らしげに
大声で「くたばれ、くたばれ」と呼ぶ
リンコーヤの軍も勢いづき
側面から襲撃を加えた。

キリスト教徒は馬を繰り出し
天と地を激しく脅かす
休息の足りたアラウカ人に対し
ゆっくりと凹んだ地面を叩いた
攻め来る足どりは遅いが手は早い
最初の合戦で氷と化した

ペロ・ヌーニヨは白砂に触れ、それを
長い血管のように血でそめた。

その骸は槍で貫かれていたが
誰の手になるとのかは意見の分かれる所。
或る者はアンゴンこそ殺人者と呼び
或る者はレウコトンと言う。この方に
分あれど、二人の中の何れであれ、
ペロ・ヌーニヨは長槍に貫かれて
戦場に斃れ、轟めく大軍により
ずたずたに引き裂かれた。

マンリーケも同様に死に
ラウタローの足許に転がって来た。
他の十二人は部厚き敵軍の壁を分けて
道に向わんとするが
オンゴルモは足を早め、
一撃の下に老練なる武者

ネレーダを倒した。

コルテスも重傷を負い事切れた。

彼に続いてデイエゴ・ガルシアも

胸に致命傷を受けて地面に倒れた。

エスカローナもトゥカペルの

狙い違わぬ一激に長々と横たわった。

道を行く他のイスパニア人は

(同様の窮地にあつた方は想像されたい)

血にまみれ疲弊した馬の脇腹に

慌だしく拍車をかける。

猛きトゥカペルは全員に

大胆にも戦を挑み襲いかかる。

そしてこの二人が倒れるのを見るや

凜々しく彼らの上を跳び超え

腰を浮かせたアルマグロに

素早く立ち向かい・槌矛を高く翳し

全身の力をこめて

振り下ろした。

狙いの外れか怒りのせいか

それとも神様の思し召しか

打撃は彼の頭を狙っていたが

馬の臀部に命中した。

打撃の力は物凄く

アルマグロはもはや扱うすべがなかった

馬は宛ら土塊か軟かい蟻の如く

腰砕けになっていた。

馬の跛行を見てアルマグロは

速かに片側から滑り下りた。

彼の幸運によるものか

彼に続く者の不運の業か、

その男は勇敢なマルドナードであったが、

血と埃にまみれて駆けつけると

トゥカペルが執拗に打ってかかり

あわや地面に倒されるところだった。

彼は足踏みを短かくし、

蛮人を右手に見るや

馬を五・六歩前に進めて

彼を追い越す。

蛮人は悔恨の念に燃えて吼え立てる。

彼ほどに怒れる蛇はかつて無く、

踏まれた^{さそり}蠍もインディオの

怒りの仕草ほど素早かった^{ためし}例がない。

フワン・デ・アルマグロに伝えた

彼の意図と宣告をば

不運なるマルドナードに移し、

怒り狂える槌矛と焦りを彼に向けた。

だが力の限りに打ち下ろす武器を

俊敏なる馬は避け、

トゥカペルは怒りの余り目標を誤り

太き鉄の棒は地中に滅り込んだ。

マルドナードは死を免れ得なかった。

宛ら曲った太い櫂の如き

節くれ立つ強力な棒を手にして

勇猛なるレモレモが直ちに駆けつけ

彼に物凄い一撃を加え

その鉄の硬き先端は誤たず

詰め物を施した胄も甲斐なく

脳味噌が砂地に跳び出したからである。

折りしも巨大な暗雲が

俄に天空を濁らせ

悲しく恐ろしき暗がり

乏しき日の光を覆った。

疎なる大粒の滴に包まれた

アクイ口は勢い激しく

草木を靡かせ、

やがて滴は土砂降りとなった。

猛攻撃と破壊を告げる

手慣れた鼓笛兵が

初めは徐々に響かせ

迅速に威勢よく隊を整え

最後の段階に至って

物凄く荒々しい調子で奏でるように

黒く濁りたる雲は

突然、激しい洪水をもたらす。

空は暗闇と化し

激しい驟雨が続いていった。

水も石も光も一切が

小止みなき稲妻に包まれていた。

いきり立つアラウカの軍は

ここかしこに散在していた。

豪雨の勢いは更に募り

勇者たちをも驚かせた。

空が俄かに閉ざされ

暗い夜の闇が

長らく有利に働いたのは

フワン・ゴメスにとって幸運だった。

彼は困惑し茂みの中深く身を潜め

イスパニア人の血に飢えた

怒り狂う蛮人どもの

気力が失もるのを待った。

風雨の暴しさを見て

彼はそれに乗じて脱出せんとして

茂みを抜けて道に出る。

恐怖の故か、道は広く見えた。

転びては起き転びては起き、

遂に血と泥と汗にまみれて

風雨の衰えを待つ

わが軍の屯所に辿り着いた。

彼らは道を外れていた。

馬の嘶きを聞き、

そのイスパニア人は穏かな足取りで

陽気な話し声のする方に近づいた。

懸念顔の六人が声をひそめて

彼の噂をしているところだった。

折よくそこに現れた彼は

皆の者に事の始終を説明した。

彼は忽ち、みなの方から

もはや亡きものと思われていた事を知り驚く。

各自その悲しみに動かされて

一命を賭して救出に向わんとしていたのだ。

彼は明朗にして弁えある人士らしく

それは益なき事と判断し

「各々方、御氣遣いは御無用、

命はなるべく大切に」と言う。

こう言い終るや否や彼は勇を鼓して

人々や蛮人どもの多い

踏み慣らされた道避け

不慣れな茂みの道をとった。

彼には更に大きな危険が控えているが

それは確かなチリの歴史書に委ねよう。

知りたいとお望みの向は

それを御覧いただきたい。

年代記者エストレーリヤが^(四)

ラテン語にてチリとペルーの歴史を

極めて克明に記しているの

彼の名は永遠に残るに違いない。

そこにはまたカルロス五世の生涯や

軍事、政治、文学、法律における

著名な人士への賛辞や

栄光が詩文にて綴られている。

六人の戦士に話を戻そう。彼らは

アルマグロの不幸を悼み、その心を示したが

そこにて彼を助け得ぬまま

インペリアルなる町に直行した。

嵐は更に激しくなり

稲妻と雷鳴が断えなかった

やがて日の光が射し、明るみの中に

プレンの要塞が姿を見せた。

そは一城にして、嘗て

フワン・ゴメスが僅かの兵と共に守った処。

ある夜突然大勢の

蛮人たちに包囲されたが

彼の奸計によって包囲は解かれ

遂に蛮人たちは撃退された。

この戦は有名なれど、複雑なれば

敢えてここでは割愛する。

そこに着いた六人の戦士は

親友たちに懇ねんごろに歓迎された。

一同は彼らが斯程に

悲惨な姿となり、困憊し、青褪め、

痩せ細り、喉を涸らし、疲弊し

血と泥を滴らせ、胃もなく

武器もなく、五体を痛めている

様子を見て、仰天した。

彼らは味方を守って

二十四時間近く戦闘を続けた。

陛下、彼らは決して、お聞き及びの事をして

骨休めをしたのではございません。

前日の夜脱け出したその城で

彼らは束の間、憩いをとった。

城にいた人たちの不安は少なくなかった
ましてや、ある出来事を知ってからは。

不運なバルディビアの事件が

彼らの口から語られた時、

凍てつくような恐怖が全員の血を凝固させ、

大いなる困惑に陥れた。

彼らは城の不安定な状況に鑑み、

蛮人たちの勢いを考慮し

満場一致で即日

城を引き払った。

彼らはカウテンの方に向かった。

夜の暗闇に乗じて

ラウタローの陣地から脱出した

アルマグロも偶然途中で合流した。

戦力は地に伏すまでに衰えていた

されば敵の者たちがやがて

城内に蓄えてあった軍需品や食糧を
盗みに入ってきた。

蛮人たちは喜々として

自軍の来し方を振り向いた。

洞窟の如き山々に

陽気な話し声やざわめきが響き渡り、

広々とした原野では

その日の勝利に満足しながら

様々な歌や遊戯が繰り広げられ、

それによって彼らは疲れを癒やしていた。

將軍は莊重な様子で彼らに混り、

彼らに話しかけ、陽気に迎え入れ

そして右手で優しく

部下のラウタローの肩を撫で、

彼に精銳部隊を委任する。

彼らは選び抜かれた、凛々しい人たちで、
武道にも労働にも鍛えられていた
如何なる仕事にも戦にも適していた。

ラウタローの事は一先ず措こう、

彼の行動は私の注意を惹いて止まないの、
やがて再び述べざるを得ないだろう。

そこで今はペンコに行くことにしたい。

我々の予定では、可成り前から
血なまぐさく致命的な

この戦が如何にして用意されたか、
また惹起された尤もな感情を述べる筈であった。

悲しき知らせと大いなる不幸の

駿足なる使者たるファマは早くも

ペンコを刻々と悩ませていた。

時ならずもインディオが到着するに及んで―
既に述べたシストウスの原でバルディビアの

敗北を見て身を隠した例の二人―
その声は不吉なる兆しを示した。
彼らのはあゝの悲しい出来事を物語った。

確かな使者たちから、苛酷で、

不幸な出来事を知るに及んで、

老人、女、子供が集まり

悲痛なる叫びが辺り一面に広がる。

天は鋭き声と共に裂け

悲しみの中で、風と

新たな寡婦と孤児と娘たちを膨ませる。

彼女らの姿は見るも痛ましかった。

麗しき花よりも白き顔は

粗末なる拳に汚され

黄金色の髪の束が

地面に散らばり

雪のような胸と

滑らかな首筋が

血と迸る涙に染まり

美しき衣服や宝石や髪飾りが

あちこちに引き裂かれて投げ捨ててあつた。

最も壮健なる年配の男たちも

それに劣らぬ大きな音で、共々に

その悲痛なる思いを表したが

たゞその方法は異なっていた。

武器が音を立て弾薬が音を立て

人びとの新たな武具が音を立て、

軍神マルテの唖れた喇叭が

はや至る処で戦へと駆り立てる。

或る者は鈍くなった刀を研ぎ

或る者は錆びかかった胸当てを磨き、

或る者は古びた鎖帷子を繕ひ、

或る者は棒先に鉄片を固定した。

補強成つた大砲は狙いを定め

軍旗は風に翻つていた。

兵士たちは誇らしげに

辺りを気ぜわしく行き交つていた。

人びとの長にして頭たりしは

フランシスコ・ビジャグラン、軍にかけての

知者にして有能で、

準備おさおさ怠りなき男、

ペドロ・デ・バルデイビアの直属の部下で

彼の下で戦つた男。

この出来事、厳しい事件を深く悼み

彼の死の復讐を誓つて吼え立てる。

夫が危機に瀕し、

自らも大いなる若しみと悲しみに包まれた

女たちは新たなる悲鳴で

高き空の窪みを傷つけ

目に涙し、呻き声を挙げて
地面に膝を投げ出し、
幼な児を彼らの前に据える。
だが彼らを動かすには至らない。

彼らは早くも準備を整え

夷狄を追って出立した。

磨き上げた馬具は

遠方からも華やかに見えた。

女たちは塔や屋上から

優しい目を凝らして彼らを追い、

そこから幾度も祝福の言葉をかけ

神に対して祈願する。

彼らに同行せんと町を出た

住民の群に別れを告げ、

弓手にアレグアーノを残し

馬手にタルカの家来たち

タルカグアーノの子等を残して、
アラウカの軍を求めて
素早く馬に拍車をかける。

その地は殆んどが海と山に囲まれている。

安全なる境を超え、

アンダリカンの細き砂を踏み、

広大なる原野を横断し

数々の丘を越えるが杳として人声なし。

一行はアンダリカンの山麓に着く。

ラウタローの命令の如何なるものやも知らず、

ただこの国に入ることの恐れのみが

その有り余る勢いを緩めた。

険阻にして狭隘なる峠が

北方の入り口にあり、

峻険極まりなき山々の

峰は峨峨として天に聳え、

そこより僅か離れた背後に平地があり、
やがてさ程阻しからぬ坂がある、
これ肥沃なるアングリカンの盆地と
アラウカの国との堺なり。

ラウタローは戦備を整え
この坂に陣取り、決定に従い

全軍を坂の頂上の
障害物のない所に展開した
広々とした平地で馬を追うのは
不利と判断し、

そこでなら気力において適すべしと
高き第一の丘を温存する。

その場所の様子について、
ここで詳しく述べておきたい。すなわち
上りの道はさ程悪くはないが
その他は全て崖である。

西の方にはすぐ近くに荒海が横たわり
絶壁の足許に波が打ち寄せている。

坂の頂上の高みは
大弓の射程ほどの平地をなしている。

その高き山は敵の強力なる
軍によって占められていた。

そこに差しかかった時、道に人影はなく
先刻述べたように、守備も傷害物もない
最初の山を越えて、友軍はこの
二番目の山の麓に到達した。

然れどここでビジャグランは混乱し、
危機が彼の足どりを止めた、

ローマのシーザーの様に。彼は疑念を抱き、
再び彼を襲う危険と
困難な戦いを思い
ルビコンの河岸に立ち止まったのだが。

遂に彼は勇気を鼓舞して手綱を馳め

「それっ！賽は投げられた！…」と叫び、

こうしてわがイスパニア人は

運命に身を委ねて道を突破した。

彼が一步踏み出すや

部下たちは忽ち喜々として

大胆に彼に続き

屹立する山を登り始めた。

ラウタローは微動もせず、片隅に身を置き

容易に彼らの突入を許す。

彼は劔の道で鍛え抜いた

一万の兵を擁している。

彼は坂の周囲に陣を構えていた。

襲撃の音を聞くまでは

残虐なる祭りに向けて

一步も動いてはならぬと命じ、

その命に従わぬ者には

必罰ありと告げてあった。

されば彼らは突然大理石の如く

静まりかえっていた。

さてもイスパニア軍は、勝利に導く

巧みな攻撃を開始せんものと

左手に陣取り夷狄の軍に

徐々に接近する

ラウタローは予定の線まで近づくと

彼らの喇叭や太鼓、

螺貝、角笛なども姦しく

華麗なる閲兵を行う。

さて陛下、この長い歌章を、

新たな歌章への望みと興味のために

ここで一先ず中断いたします。

かく申す私奴も些か語り疲れましたので、

希こいねがわくば、この遅延により

冗慢を避けるべく努める私奴が

大勢の人士をも困らせるものと思し召し

御心を損われることの御座居ませぬ様に。

第五歌章

この第五歌章には、アングリカンの坂でイスパニア人とアラウカ人の間に交えられた熾烈な戦いが含まれる。ここで、ラウタローの狡智とイスパニア人の甚だしい苦戦のため、わが方は壊滅し、過半数が斃れ、同時に友軍のインディオも三千人死亡する。

慈悲深き神は、常にその御心により

我々の放漫と冷酷な反逆心が

その極みに達するまで

然るべき罰もお引伸ばしになる。

我々の恐るべき無知は甚だしく、

すでに限度を越し

隣人に罰の見本を見ながらも

なお悪の道避けようとはしない。

かく申すは、わがイスパニア人が

喜々として劔を振り

バルディビアの末路に自戒することなく

彼と同じ道を辿ったことも考えぬ故。

やがて御覽の通り、

怒りに燃えた刑の執行人ラウタローは

野戦において部下たちと共に

現在と過去の罪を厳しく裁くことになる。

ビジャグランは部下を配置し

狭隘な平地に駐留する。

六門の砲を適地に据え

各所に適宜命令する

彼はラウタローの陣形を見んと

しばし不動の姿勢を保った。

長々と伸びる敵軍の戦列に

情熱の冷める者もいた。

この戦は多数の望むところであった。

だが坂全体が一糸乱れぬ隊を成す

兵士たちに囲まれるのを見たときの

彼らの目的は神のみぞ御存じである。

恐怖で早くも冷めた血が

足早やに彼らの心臓に駆けつけ

温もりに見放された手足は

努力の末辛くも回復した。

突撃喇叭の鳴らぬ故

彼らは再び熱意に燃えて吼え立てる、

一刻の遅れも勿体なやと

戦の時を今や遅しと待ち侘びる。

片やアラウカの軍は

隊長の命に従い、

襲いかからんと逸る心を

服従心で厳しく抑制する。

競争相手の近づくを見、

焦躁を隠さず、鼻息も荒く嘶き

尊大な面持ちで、

前脚で地面を引き掻く猛き馬の様に

従順なる蛮族の軍は

カステイリアの軍の陣地を指呼の間に見て

始まった戦いを見んと呻くが、

さりとて定められた線は超えぬ。

事態はこの様にして、

両者互いに激突の時を待ち焦がれる。

しかしビジャグランは既に考えていた、

これ以上の延引は徒に敵を利するのみと。

彼は雌雄を決せんと逸る騎士たちから

三班の騎士を選抜した。

忠告が終ると彼らは合図により、

馬の脇腹を両脚で強く打つ。

馬は大地を足どり軽く蹴りながら

轟き合い、勢い激しく飛び出して行く。

アラウコの地はその物凄い音に震え

海は不可思議なる感興を呼び起こした。

手なづけられた蛮人共は

ラウタローの嚴命を恐れ、

彼らを懲らしめん気持ちはあれど

一步だに踏み出すことができなかつた。

胸元の盾を振り回して

群衆を追い払う

カステイリアの勇壮な祭りの

騎馬戦の如く、整然と

わが軍はしっかりと腰を鞍に下ろし

坂の上までさしかかるが

攻めた立てれば崖より落つること必定と見て

円形を描いて引き退る。

彼らは大きく回りながら

幾度となく立ち戻るが

その度に弓の矢と

投げ槍と石の雨が降り注ぐ。

彼らは盾を操り役立てる。

丘一帯は遮るもの何も無き故

面付き兜や脛当ては

劔には不向きなることが判明する。

ラウタローは凜然として動ぜず

山は人びとに取り囲まれていた。

勇名を馳せんとする数名の者が

彼の許可を得て姿を現わす。

彼らは長槍と棍棒でイスパニア人と

一対一で、二対二で

或いは三対三で

名指された者の自由な選択により

技を競わんとした。

彼らは足どりも軽く身を揺さぶり

勇ましきゲルマン人よりもなお豪気に

堂々たる姿でそこに現れ

辺りを品よく闊歩する

観衆を前に繰り展げる馬上試合で

技の冴えを見せる騎士のように

彼らは堂々と、その硬い穂先で争わんと
向ってくる。

長槍の名手と自任する者は

その力と運命を試すべく

右に左に探りを入れ

確かな判断で急所を突く。

或る者は攻め立て、速かに地歩を固め

敵軍突入の道を開き

或る者は打ち損じ、或る者は

狙いを誤らず的を地面に斃す。

他の者たちはこの様な格好に構わず、

風采や気品を気にせず

只管致命的な打撃を与えることと

体や足を頑丈に保つことに努める。

彼らは憤怒と勇猛心に鼓舞され

大胆にも冒険を試みる。

勇ましきは時として打撃を空しくし、
彼らは更に接近して一騎打ちとなる。

しかし其処では最も足の早い

若者クリオマンが際立っていた。

彼は颯爽として大胆に、

恐れることなく長い戦いに耐えた。

そして頑丈な槍を振り

勢い烈しく投げつけた

辺りの如何なる大弓の矢も

斯程に速く飛ばなかった。

既に七人のイスパニア人は傷ついていたが

復讐に立ち上がる者はいなかった。

勇敢なる蛮人はその気力と技量と勢い故に

恐れられていたからである。

この時ビジャグランは些か恥らい、

彼が八本目の槍を投じるのを見て

苛立つ声で言った——「この小癩な
蛮人を懲らしめる者は居ないのか？」

こう言うと彼はダイエゴ・カノの方を見た。

彼は大胆な男として信用があった。

右手に太き槍の柄を掴み

尾の白き愛馬を引き、

若き蛮人が将に力の限り

腕を揺振ったとき

両腿を鞍に押し当て

馬の両脇を蹴る。

騒々しい音を立てて勢いよく

凜々しき夷狄の勇者目指して

駿馬は駆けて行く。

彼はその時背を向けていた。

だがイスパニアの強者は

逃がしてなるものかと懸命に、

手綱を弛め、急ぎ馬に拍車をかけ
敵の隊まで駆けて行く。

並居るアラウカ人の群も

激しく投げ出される槍も

蛮人たちの戦棍や劔の

機敏で厳しい働きも

大群衆の厚き壁を破って

駿足のアラウカ人を追う

怒れるイスパニア人の

堅き意志には抗い得なかった。

イスパニア人は多勢を物ともせず

大いなる努力と猛々しい手により

彼らの間に突進し、死を徒らに

延引せんとする男の胸を槍で破り

その偉業に輝きつつ

弓手を目指して馬を駆り

努力と正確な判断により
武装せる敵軍を突破した。

続いて騎兵隊が

アラウカ軍を呼びながら突進する。

だが敵はその侵攻を待っているらしく、

崖の縁へと引き退る。

一度、四度、十度と襲いかかるが

効果は殆んどなかった。

その折如何なる劔も

夷狄の血で汚せはしなかった。

疲れた馬は尚も働いていたが

得るところは殆んどなかった。

矢傷を負い、苦しむ馬に

わが軍は空しく拍車をかけていた。

彼らは疲労困憊し、相手は休息をとり、

峠も閉ざされた。

身動きならぬ状況に立ち到って
勇気を失う者もいた。

忽ち恐るべき大砲が

猛烈に素早く撃ち出され、

悉皆の物を薙ぎ倒して

インディオの部隊を叩いた。

丘は火と煙に包まれ、

空気は近くで、又遠くで轟いた。

宛ら大音響と共に大地が裂け

モンヒベローが再び嚏をしたかの様に。

部下の兵士に稲妻を放ち

大方の者を潰滅させる

雲を晴らすことこそ肝要と

ラウタローは

その勇敢さを買ってレウコトンに

託していた隊に命じて

直ちに猛攻を開始すべく

大声で告げた、

「おお、運命の女神に選ばれたる

忠実にして必勝の同志諸君、

今こそその勇ましき両の腕かいなが

われらの大義と権利を證さん時ぞ。

されば諸君、勇んでその槍を構えよ、

穂先の鉄が敵兵の胸を突き破り、

赤き血を流しめんことを、

敵ならば友も縁者も構うな。

「大砲に向って進むのだ、

諸君の努力で勝ち取れば、その勝利により

諸君の劔は有名となり

そして世界に不朽の名を残すのだ。

栄光の主たる諸君の行く処、

大地は諸君のものとなる。」

この言葉に兵士たちの志気は高まり
勇猛果敢に攻めてきた。

彼の地では殿はしんがり不名誉なり。

これは彼らの間に際立つ特徴にして、

一番の臆病者も先頭を志す。

槍の穂先の尖りを試す時は

友の死を見ても驚かず

砲弾が十五人、二十人を一時に

粉々にして宙に飛ばそうと

胴と首を離そうと動じない。

それによって困惑し呆然となる事なく

盲目的な恐によって立ち止まる事もない、

寧ろ、弾丸に片腕を奪われれば

忽ちもう一方の腕で交戦する。

万死構わず敵軍の

火器の据わる斜面に着く。

夷狄の怒りで大砲は止んだが
吐き出した弾の如何に夥しかりしか。

他の兵たちもやおら輪を成して攻め立て

大地も太陽も弓矢で覆われる。

彼らの襲撃のすさまじさは

誠に筆舌に尽くし難し。

声と煙と砂埃のため

言葉も通じず互いの確認も覚束無し。

だがこの障害も左程利する所がなかった、

彼らは唯、盲目的に集まっているのだった。

紛らわしかりし敵の部隊の確認は

僅かの時間を要せしのみ。

彼我の見分けをつけるのは

交える劔の使い方

互いに名声を求めて亘り合う。

されば切られた頭や兜、

洞から離れた脚などの
数の如何に多かりしか。

只ならぬ勢いで攻撃を受ける

砲台を守らんものと、

その執拗な攻勢に止めを刺さんものと、

彼らは激戦を挑む。

一人のイスパニア人に敵は五十人、

その有利さは言うに及ばず。

だが彼らは各自奮闘し

敵の優位を気力で凌ぐ。

彼らは偉大なるカルロス五世の

軍旗の退くを望まず

寧ろ仇なす軍神マルテに耐え、

常に栄えある前進を望む。

その恐るべき神は至る所で

怒りと血に染む埃にまみれ、

かくも戦いてなお疲れを知らぬ
敵の劔に新たな力を添えていた。

傷を負えば負うほど

彼らの勢いと勇気が新たになる。

その気力と沈着さは、

戦闘の始開の時にさも似たり。

死と熾烈さと残酷さは

もはや言葉では表せない。

生い茂る緑の草葉もその色を失い

血の色と化す。

ビジャグランは軍を掌握し、

毫もその地位を損わず

あらゆる大事を予見し、

遠近おちこちに駆けつけては疾くと戻る。

隊長として経験を生かし

大胆に事を処し、更にまた

熟練せる精銳の兵として
進んで危険に身を投じる。

彼は血まみれになって歩むトルボを見る、
数多のキリスト教徒を殺めし男。

彼は馬を連れている、彼は怒りに燃え、
右手に槍をしかと握り、

鎧にしかと踏ん張って、胸を目がけて投げつける。

だが狙い過ぎか力の入れ過ぎか、

機敏な手許も狂い

好機を逸して打撃は空を切る。

馬は猛然と野蛮なる

敵軍の間を突進する。

怒れるイスパニア人は小脇に短槍を抱え

再びトルボに向かう。短槍は

三重の上部な胸当てと

綿入りの胴着を貫き、下腹部に

巨大な傷口を開ければ、そこから
湖為す血と共に魂も流出した。

彼は槍を構えたその腕を

後に引き、怒りを籠めて投げつけた。

その勢いで槍は音を立てながら

飛んで行き、

暫憩^{しばし}うコルピジャンの

腕と胴の狭間を抜け

何ら損傷せしむる事なく地面に達し

半尋^{ひろ}ばかり突き刺さった。

ビジャグランはやがて劔を抜き払い

敵中深く躍^{おど}り込み

最も多勢の個所を選び

勇猛果敢に道を切り開く。

ペドロ・デ・オルモス・デ・アギレラも

負けじとばかり、数々の危険を冒し、

彼一人の手でグワンチョやカニオ、
ピージョやティタグワノを斃した。

共にアルバードなる姓のエルナンドとフワンは
その勇気を実証し

老練の大騎手マルドナードは

弓手で駿馬を引き回し

何時もながらの豪勇で

名人級の劔捌きを見せた。

とは言え、流石に年波には勝てず

与えた打撃も損傷も左程ではなかった。

デイエゴ・カノは盾も持たず両の手で

槍も武具も只では置かなかつた。

全ては鋭い刃先の力で

千々に裂かれ、地面に落ちた。

ペーニャは弁こそ拙きもの

傍若無人に掻き回す様は

ポンペイウスの軍のセシウスか
トロイの猛きペレウスの子の如し。

片やイスパニア人レイノーンは
毒々しい怒りに煽られ

血塗られし劔を携え

手当り次第に切りつける

一刀の下にパルタを斃し

強の者ロンの脇腹を

切先で狙えば忽ち血管に達し

抜いた劔は血で染まっていた。

ベルナル、ペドロ・デ・アグワーヨ、カスタニエーダ、

ルイス、ゴンサロ・エルナンデス、それにパントーハ、

何れも屍の輪を作り、

大地は一面朱に染まる。

前進し得る者一人もなく、

攻撃の手は毫も弛めず、

かくてキリスト教徒は

後世をして奇蹟と呼ばしめる事を為した。

だが敵の数は余りにも夥しく

その対策と自信は余りにも乏しきため、

殆んどの者にとって血と共に

元氣と力と希望が欠けていた。

彼らはその巨大な力に抗い得ず

その流れに押し流され、

六門の砲全てと共に

長々と山地を失う。

わが軍は常に古来の勇氣と氣力を

弛めることなく發揮した。

イスパニア人にして怯む者は絶えて無かった。

だが遂に戦場と陣地を失い

甚だしき窮地に陥るに及んで

戦いに疑念を抱き始める者が

五名を超え、果ては

勝利への希望を失うに至った。

彼らは自らの力が衰え行くのに

夷狄の力は尚盛んなるを見て疑念を抱く。

彼らの恐れは死と

負傷と冷えゆく血潮であった。

中には甚だしく消沈し

退却する者もいる、

とは申せ、陛下、潰走するには非ず、

敵に顔を向け、整然とではあります。

だが流石にビリヤグラン、力を振り絞り、

憤然として彼らと相對し、

賢明なる説得により彼らを励まし

百戦錬磨の隊長らしく

こう言った、

「皆の者、自らの

名誉にとって義務たるものを曲げてはならぬ、
恐怖に身を委ねてはならぬ、恐怖こそは
われらを損う大敵ぞ。

「それをかなぐり捨てるのだ、

さすれば不名誉と恥辱が明白に見える筈。

敵の鉄にも増して御身らを悩ますものは

不名誉にして愚鈍且つ盲目的な恐怖心ぞ。

心を乱す勿れ、気を持ち直せ、落ち着くのだ、

御身らの名と誉と命と財は

かかってこの一点にある、

しかもこれは後刻修復のきかぬもの。

「秩序と判断を失って何処に行く？

われらの路は阻げられているというのに、

如何許の不名誉と屈辱とで

わが同胞に迎えられるかを思え。

生と面目は勝つことにあり

死と不名誉は負けることにあることを思え、
御身らは確かな不名誉とそれより更に
不確かな命を前にして逃げているのだ。」

危険が彼らに抱かせた

稀に見る恐怖心のために

ここに述べた理由やその他の理由から

陣地は寸分も広げられなかった。

「余にとって此処に勝る地が何処にあらう、

とビリヤグランは豪語し、

一途に名誉ある死を遂げんと

敵の大軍に向かって行く。

裁かれる憂き目に遇わぬため

喜々として彼は一命を捧げる。

彼の恐れるものは死よりも侮辱、

余人に後指を差されること。

仮に背を向ける事を強いられても

その言い訳をし歩くことを彼は好まず

その名誉を云々さるは

恥辱、汚点に他ならぬ故。

如何に見事に彼はこれを脱したとか！

彼は地上に落馬し、一瞬意識を失う。

捕えんとする者あり、殺さんとする者あり、

だが磨かれし武器が役に立った。

他の者たちは口々に「奴の武器を奪え」と言う。

大勢の者が騒々しく駆けつける。

だがこの結末を知りたい方は

次の歌章をお待ち頂きたい。

第六歌章

始まった戦いの続きと、アラウカ人が敗者に対して行った類稀な種々の殺し方、並びに女、子供に対して全員を刃物で突くという非情さについて述べる。

(他の強力なる手段によらず) 死を以て
運命により投げ出された

峻しき道を切り抜けんとする

この度のピリヤグランの様に、

勇ましき男子にとっては、運勢も

厳しき因果の巡りも

恥ずべき状況に陥るほど

困難な事態は起こり得ない。

部下たちは足早に

取り乱した塊となって退却したが

折しも新たななる大騒音の中で、

彼らは地面に倒れた隊長を見た。

僅か十三名の者が、生を軽んじ

顔と手綱を引き戻した。

馬の脇腹を強く引き掻き

幾千の敵に襲いかかった。

筆舌に尽し難き勇猛ぶり

この小隊は敏捷に襲いかかり

敵の戦列に穴を開け、

これにより戦の行方は紛れてきた。

彼らは、援護もなく幸運に見放され

敵の群に取り囲まれ、

打撃のために意識を失った状態の

惨めな隊長の所まで突き進む。

敵の群は我勝ちにこの大いなる

戦利品と幸運とを一人占めにしようとする。

その様は宛ら獯猛な狼が

群を外れたか弱き羊を狙うようだった。

彼らは物凄き唸り声を上げ、夫々に

調子外れの声で合唱団を作る。

将にそのとき牧場のマスティン犬が

音を聞きつけ全速力で駆けつける。

かくて敵兵の群は

悲しきビリヤグランを真中に据え、

彼に死を与えんと競い

互いに闘せめぎ合っていた。

だがかの十三名のイスパニアの勇者が

その時、背後に残せし死者たちの

赤き鮮血にまみれながら

そこに突入した。

愛に鼓舞されて彼らが素早く

ビリヤグランの所に駆けつけければ

大胆にして鋭利なる鉄は

再び新たな血に濡れた。

傷を負った者たちは人垣を離れ

恐れをなして周囲に散った。

運の強き幾人かは踏み留まり

死に至るまで戦った。

幾重もの人垣が崩れ

痛手を負ってその場を去ったが

又もや新たな人垣が生じ、

元の場所を塞いだ。

ピリヤグランはまだ横たわっていたが

部下の兵士たちの並々ならぬ努力により、

武器を自在に操りながら

協力して彼を馬に乗せた。

今少し手間取れば死は必定、

しかも無事脱出するには厳し過ぎる有様。

鉄くろがねの板で体は覆われてはいたが

手ひどく傷めつけられていた。

だが彼は突如眠りから目覚め

傍に十三人のイスパニア人を見て

わが身の危篤状態をも忘れ、

厳しき鉄の間を突き進んだ。

彼は蛮人たちを撃破しつつ到着した

友軍を護衛につけ

懲らしめも恐れもなく

敵軍の真只中を突破した。

彼らは傷つけ倒し、散々に懲らしめたので

今なおその名残りを留め

その損害の思い出は

長年に亘りアラウコに続くだろう。

ベルナルは狙い違わず

劔を打ち下ろしてマイロンゴを傷つける

彼の兜も鋼鉄には役立たず、

刃は彼の胸に達した。

アギレラは劔を横に伸ばして

勇者グアマンを痛撃する

かくて恐怖の道は広々と開き

手綱を強めて走れんばかり。

こうして勝利を得た十四人は

その他の友軍の屯する場所へ赴くが

彼らは困惑し秩序を乱し

自らの死を恐れて取り乱していた。

ビリヤグランと到着したばかりの兵士のみでは

すでに始まった退却を妨げるに

十分ではなく、その力もなかった。

恐怖心はすでに大きな力となっていた。

彼らはアラウカ人の勇猛果敢ぶりを見て

打ち破ることに全く自信を失い、

馬も気力なく、時期外れの拍車に

疲れ果てた様を見て

大声で「平地へ行こう！」

この様に追い詰められるのは厭だ……」と言う

そして新たな恐れと軽率さで

幾人かはそちらへ向かう。

手馴れた狩人たちに包囲され

時ならぬ銃声に追われて

狭き難所に追い詰められた

野性の山羊の群の一匹が

万事休すと見て

群を外れて逃げ出すと

他の山羊たちも後を追う、

わが軍の敗走はまさにそれであった。

一人、二人、十人、二十人と

脱走者たちは坂道を走り下りる。

秩序も見境もなく、周章狼狽し、

宛ら競争を始めたかの様だった

とは言え、中には幾人かの勇者たちも居て

毅然たる面持と電光石火の大刀捌きで

旺盛に敵と渡り合い

友軍に見捨てられても意に介さなかった。

彼らは逃亡しないのみか

かくも虚弱にして恥多き手段を夢想だにせず、
寧ろ戦いにおいて自らを守り

戦いの行方を紛れさせ

英雄的な精神を發揮して

インディオたちの凄じい勢を阻止し

自らに不利な、苛酷な運命に

敢えて抗う。

かくて、彼らは運命に抗い敵と対し、殺戮し、

破壊するほどに、次第にアラウカ人の

力の衰えを感じ始める。

そして厳しい試練と共に己が力が増大する。

だが力の限りに走り去る

友軍の逃亡の様子を見て

彼らもまた同じ道を辿らざるを得なかった。

今や留るは大胆に非ずして狂気の沙汰だった。

私はこの歌章を悲痛なる涙の章としたい。

今こそそれに最も応わしい時であろう、

何故なら私の耳には今も友なる民衆と

罪無き子らの泣き声が聞こえるから。

天まで貫き通す叫び声を上げる

乙女子や女たち、召使たちを

残忍にも刃が貫くのを見る時ほど

敗者たることを感じる時はない。

イスパニアの歩兵とその従者たちは

休むことなく道を歩んだ。

恐怖心が彼らを足早にし

幾人かは不必要に足早だった。

混乱と甚だしい愚かさから

多数の者が坂の様子を見誤った。

或る者は転倒して背骨を折り

或る者は崖から落ちて碎け散った。

道に千余の遺体が横たわり

血の小川に涙が流れる。

嗚咽の声と悲鳴が空気をつん裂き

調子外れの音となって天に達する。

或いは悲痛な呻き声を上げて

残忍非常なる蛮人どもに

両手を上げて

空しい命乞いをする者もいた。

蛮人どもは素早き手と

駿足を用いて容赦なく傷つけ

惨めな、不具な者まで倒しつ、

常に相手を狩り立てた。

相手は徒に友軍の民衆に

彼らの恩義と利益と義務を

懇々と説きながら

然るべき友情と助けを求めた。

その言葉には説得力があり、

援護に向わんとする者もいたが

他の者たちの逃走の様を見て

己も逃げるべしと判断した。

従来友として遇した者にも

女友達として借りのある者にも

いかに親しき仲とは言え

呼べど呻けど泣けど無益だった。

今やわが軍は委細構わず

その赤き血の流るるままに

その作戦に常に新たな意気を示し、

手綱を弛めて馬を疾駆させた。

手弱女たおやめの声にも

友人の義務にも心を痛めなかった。

彼らの心痛と疲れは

馬の天翔けりえぬことにあった。

あの叫び声にも耳を貸さず、心を鬼にして

彼らはその伸びやかな足で緑なす原野を測る。

だが幾人かの者は残忍非道なる

光景を見て憐憫の情に動かされ

すさまじき怒りに燃え

アラウカ軍に立ち向かう、

彼らは大方が戦場の所々に散らばり、

敵兵を捕えあぐねている。

彼らは決死の覚悟で、

女共には気を配りつつ

蛮人の中に踊り込む。

このため十人以上の帰還が危なくなった。

これを見て他の者たちは引き返さない。

彼らは戦の行方を見極めたいし

命を危機に曝さないようにしたい、

遠く離れば、それだけ安全なのだ。

戦いは再び新たなものとなり、

双方とも同様に組み合い

胸を突き合わせ、槍と槍、

劔と劔とがぶつかり合う。

アラウカ軍はまだ分散し

それぞれに可能な限りの害を与えつつ

敵を追い続けていたため

スペイン軍は持ちこたえることができた。

明るい空に羽根を伸ばして

おちこちに散らばって飛ぶはしほそがらす嘴細鴉が

連れの悲鳴で因われを知り

心を痛めて翼をすぼめ

弧を描きつつ舞い下りて

連れを助けんとするよう

蛮人たちの隊は、人声を耳にして

一直線に駆けつける。

各地を巡っていた人たちは

騒音と空中に立ち昇る埃に、

追跡の足を止め、劔の音のする方に

轟き合つて寄つて来る。

アラウカ人は夫々に、素早く

最も有利な場所に赴き

血に飢えた鉄を片手に

キリスト教徒を取り囲む。

夷狄の数は増大し

干戈の交わる音も募る。

されど我が方の数は支援する者絶えて無く

次第に減退するのみ。

だが大いなる努力を注ぎ、

誰一人、一騎当千を拒まない。

イスパニア人にして借りを返さぬ者は

一人もいなかった。

好運によりも、天により

生命の安全を保障されたかの様に、

彼らは逡巡せず敵軍の

激しき殺戮の武器を目がけて突入する。

或いは自ら地面に倒れ或いは敵を地面に斃し

甚だしき傷を且は与え且は受けつ、

衆寡敵せぬ味方の不利を

勇氣と氣力で補充する。

かくて彼らは死に対しても

時ならぬ夷狄の怒りに対しても臆せず、

人数、運命、運勢の

業や力に抗った。

だが援軍の協力と支持なくしては

この多勢には如何とも為し難く

ただ死を延引しつつ

苦難の中にわが道に戻る他なかった。

我慢は的外れの様に思えてくる、

先行する者たちは風の如く去り行くから。

彼等には大胆不敵な冒険よりも

そうした方法が得策であった。

多数の者が途中で斃れてゆく、

馬と食糧が足りないからである。

また血の不足も原因である。

緑の牧場が血に染まったからである。

馬にももはや力は無く、気力も無かった。

蛮人たちは走ってそれに追いついていた。

彼らは倒れた馬の主と

腕の力を競わんとした。

苦境にある他の歩兵たちは

——即ち徒歩のキリスト教徒たちは——

駆けることすらできなかつた。

恐怖心がそれを阻んでいた。

疲労困憊の歩兵たちは

金具付きの馬の臀部か鎧の紐で満足する

そして忘れ去られた友情の絆に

空しく縋りつくが

馬上の者たちは離せと頼み

聞かざる時は刃物で追い払う。

その様は、友情の時に非ずとは言え、

宛ら憎き敵に対する如くだった。

谷全体に大音響が轟き

武器と喚声と悲鳴が聞えてきた。

彼らはイスパニア人に仕える者たちで、

インディオの手にかかって斃れて行った。

獰猛なる夷狄の為せし

かくも残酷なる犠牲

かくも稀なる生々しき腑分けは嘗て無く、

二千五百人が落命した。

或る者は背中から腹部を貫かれ

重傷を負つて地面に倒れ、

或る者は額を真二つに割られ、

或る者は首を斬られて名誉ある死を遂げる^三

或る者は顔面から眼を奪われ

処置の手段を求めながら

危険甚だしき岩場を

止まらず駆けて行く。

彼らにか弱き女たちにも

然るべき敬意を払わず、

あまつさえ、残酷にも劔を以て

彼女らの懇願も聞かずに止めを刺した。

妊婦たちにも容赦なく、

下腹部目がけて切りつけ

その開いた傷口から

誕生に非ざる^{いたいけ}幼気なる足が現れた。

人びとは我勝ちにと坂を上って行く。

そして愚鈍な者たちが犠牲となる。

早く歩むことの他に

生命を保障するものは無い、

愚鈍なる者が遅れるのは止むを得ない、

走ること熱心でないのだから。

死は猛烈な勢いで後から追いかけて来、

そして人が足を踏みしめると忽ち揺さぶる。

坂は峻しく一直線であったが

大勢の者が頂上に達した。

彼らはそこに垣があり、木材で

通路の塞がれているのを見た。

その道の他に通路はなく、

山の周囲はほぼ全体が崖となり、

その片側を海風が叩き

もう一方は岩山と接している。

俄作りの新たな城壁は

伐り出したまゝ、の太い丸太を

互いに巧みに組み合わせで作ってあり、

これによって狭い通路は閉ざされていた。

その奥にはインデイオたちが用意を整え

武器を城壁と胸壁に構えていたが、

その誇らしげなる武器は、人の脅威など

眼中に無きが如く、天を仰いでいた。

すでに道を閉ざされ希望を閉ざされたのを

見たイスパニア人は

突破かさもなくば死と覚悟を決め

神に全幅の信頼を置き

僅かに垣を外れた場所から

彼らの一撃で突き破らんと

馬を走らせれば

内部の蛮人どもも防禦に駈けつける。

かくて彼らは道を阻まれ

いかなる手段も効なく、

危険からの出口もなかった。

その時遂に老ビジャグランが現れ、

襲撃の甲斐なきことと

対策の無益ぶりを見て

万死恐れず、その様子も見せずに、

ここぞとばかり最後の運試しを行った。

彼はイスパニア系の

強壯な馬に跨がっていた。

臀部の張った、厚みのある、頑しい、

栗毛の、俊敏で、元氣のある、

駿足で、勢いがあり、

大きな力と瞬発力があり、

その勢いは弱い馬銜はみと軟かい手綱で

程よく抑えられ、正されていた。

俊敏なるこのイスパニア人は

馬を、正面に向けるや、厳しくその脇腹を打つ。

馬は勢よく走り出し、

胸で以て柵に激突する。

それを突破する有様はいつもの

早駆けの時と何ら変らぬ。

こうして彼は広々と道を開けたので

下を通って逃げていた人たち全員がそこを通った。

怒り狂う蛮人どもは通路を

守ろうとしたが、遂にできなかつた。

如何に武器を振り回しても

強力なイスパニア人に打ち破られた。

或る者は右手に向かい

或る者は左程よき道を知らず

左手の悪い細道を辿ったが

それは大きな断崖に通じていた。

西の方、左手に

人跡稀なる二筋の道があった。

これらは嘗て鹿たちが

水を求めて下りた道に違いなかつた。

これは昔の事である。今や

至る処で崩れ落ちていて

その先は百二十尋を越す高さの

断崖となって切り立っていた。

知られざる自然の定めか

其処を襲った大旱魃のせいか

それとも大洪水の為せる業か

山は見事に削られていた

戦の恐怖に駈られて

道を誤った人たちが

懸命に死から遁れようと

そこに真直ぐ向っていた。

不覚にも彼らは転落した。

一歩もそれを躲かわすことができなかった。

最初の者に次の者が重なり、

その者に次の者が激突する。

その数は次第に増し、

五体は千々に裂けて飛び散った。

断崖の底に達するまで、

勢い激しく転落した。

かの猛きティフェウスが、

巨大なる山と重荷を投棄せんとして

その恐るべき体軀を震わせ

山頂の巖を揺さぶると

大音響と共に崩れ

小さな多くの破片となったように

道に迷った哀れな者たちは

平地に転り落ちて粉々になる。

正しい道を行く者は

彼らを見て踏み止まらせようとするが

誰一人、他人の言で止まろうとはしない。

立ち止まるのは今や狂気の沙汰であった。

無理やり急ぐ彼らのこと、

転落しても当然であった。

馬に乗り、歩き、或いは頭から落ち、

微少な片となって彼らは地面に達した。

自由に原野を歩く馬もいた、

主が転落し斃れたためである。

また或る馬は主人を振り落とす破目になった、

無気力なため鞍を失ったためである。

素早く乗る者あれば、困惑し、

死の恐怖に妨げられて

鎧に足がかけられず、

馬と好機を逃がす者もいた。

だが馬は彼らを待たず、

宛ら駈けつこを楽しんでいる様だった。

彼らは止まらず後を追った。

もし神がこの危険から救ってくれれば、

断食でも巡礼でも、お祈りでも、

その他教皇にのみ取って置いた誓いや

約束を果たしますと、彼らは口ごもったが

その言葉は届かなかつた。

馬は既に耳を震わせ乍ら

平原に達していた。

彼らはその脇腹に激しく筋を入れるが

馬を駆り立てることはできない。

兄は親しい弟の声に耳を貸さず、

憐憫の情は無用となっている。

他人より二歩先にいる者は

更に二歩先んじようとして斃れ、苦しむ。

広々とした闘牛場で

猛き牛の近づくを感じ、

恐れ戦き、その烈しい勢いから

免れんものと逃げ出し

悲愴に暮れながら走ろうとするが

身動きのとれぬわが身を夢見る人の様に

彼らは慌てて馬を駆り立てるが

如何んせん、それができない。

敵は大殺戮を行いながら

追撃を続け、常に彼らを嘆かせる。

よき馬を得し者こそ幸せなり、

敵の猛攻から俄かなりとも遠ざかる故。

盾を捨てる者あり、槍を捨てる者あり、

疲労困憊せるわが身を置き去りにする者あり

かくて勝ち誇れる荒武者たちは

そのすさまじき渴きを血で以て緩げていた。

不幸にも遅れる者は、

友にも誰にも助けてはもらえない。

俊足の誉高き男も徐々に歩んでいた。

馬を走らせる者は多くを走る。

疲労と喉の渴きが彼らを苦しめていた。

だが最大の危機に臨めば助け給う神は、

次の歌章で述べるように、

敵の突進とその方角を変えて下さった。

第七歌章

イスパニヤの軍は、疲れ切つてコンセプション市に到着する。彼らは自軍の壊滅と損害について語り、都市にいる敵軍の大勢力に対抗するには無勢と見て、且つそこに住む多くの婦女子や老人の事を思い、サンティアゴ市に撤退する。同時にこの歌章には、コンセプション市での掠奪、放火やその荒廃ぶりが含まれる。

名誉ある死を吾人から遠ざけ

不面目、不名誉な人生を招く恐怖心が

未だ嘗て安住の地を持ち得なかつたのは

勇気の尊重故ではなかつたらうか。

大いなる危険に際し、大胆さは万人により評価されるに応わしい。

慎重なる人にとって恐怖は当然の事。

且つそれを克服できるのが勇者である。

これは疲れた馬を急ぎ立て

拍車をかけていた者たちの言い得べきこと、

彼らは恐れゆえに慌てふためいていたので

仮令言わずとも、それを信じるであろう。

彼らは踵と脚と腕でしっかりと掴み

その胴体に拍車をかけていた。

アラウカ人も息を切らし
その勢いと動きを鈍らせていた。

彼らは精一杯の働きに疲れ、

長距離に亘る早駆けも鈍り、

大いなる奮闘により気力を失い

六レグワまで迫り乍らも断念した。

わが軍は恐怖心に駆られ、

夜の帳の降りる頃には

ピオピオ河がその名と実体を失う

河口にまで達していた。

彼らは河岸の老松に

大型の船が繋がれているのを見た。

重傷を負った者はその中に入り、

水の上に活路を開いた。

他の者たちは元気を取り戻し

船の到来を待った。

そして準備を整えて
待望の都市に到着する。

彼らが様々な仕事や負傷により

如何に甚だしき状態にあったか想像がつく。

或る者たちは殆んど顔の無い有様であった。

打撃を受けて、顔面の膨れ上がった者もいて

恰も地獄より来た様であった。

彼らは語らず、声高に返事する者もない。

皆の者をその目で見詰め

黙すことでその被害を一層際立たせていた。

疲労と恐怖によるぎこちなき姿は

事の次第を物語り

市民を痛く驚かせたが

突然悲痛なる調子で

ざわめきと涙が生じ、

この災難を一際厳粛なものにした。

そして調子外れの、不協和なる音に
隣の家も応えていた。

斃れし父に涙する者あり、
夫を、息子を、甥を、兄弟を悼む者あり、
女たちは狂人の如く、意識を失い、
苦しそうに美しき手を撚じる。
新たな悲痛に呻きが起こり、
その出来事に空しく抗議する。
子供らは母親にすがり、
泣きながら父親の事を訊く。

声や懸命の叫びが
家から家へと走り
戦いに斃れし人の事や
崖より落ちし不幸な人の事を伝える。
乙女、人妻、未亡人、嘆き悲しみ
手と目を高く上げて

かくも厳しき苦痛に対し
死という最後の手段を神に乞う。

彼らは苦々しい不眠の夜を
悲痛な音の楽器に合わせて過ごした。
されど日中になるとこの歎きは
更に大いなる不幸により乱される。
恐怖におののくイスパニア人の町に
血に飢えたアラウカ人が
片手に鉄、片手に火を持って
非常な勢いで接近中との噂が立った。

早くも饒舌の女神ファーマは
鈍重粗野な舌を延べて触れ歩き
ラウタローの事をば増大させ
その敵の士気を阻喪させた。
されば大方のイスパニア人は震えつつ
ファーマに益々力を与え、最も弱き

アラウカの男を天上にまで持ち上げ、
人びとの心に氷を撒いた。

敵と戦つては到底

耐え得ぬと言いながら

撤退し、憐れな町を見放そうとする

ざわめきが起こつた。

処々に小さき人の群ができ、

町を無人化すべしの声が共に起こる。

中には重大な発言を行い

根拠薄弱のため認め難しとする者もいた。

恐怖心と財産への愛という

二つの相反する立ち場があつた。

僅かな人数、死と負傷が

町の防衛の断念を呼びかけ、

手に入れた財産や収入が

気前よき恐怖を支配する。

だが恐怖はやがて力を盛り返し
遂にはすべてを手中に収めた。

主要な人物は明確に

町と自己の住み家を捨てようとする。

恐れを抱く大衆はまだ訳がわからず、

たゞあの騒音に耳を欝てる。

事が明白となるのを見てそれ以上待たず

突然、驚き、ざわめき

再び涙と苦情を募らせ

星に向つて悲鳴を上げる。

夷狄の兵の到来を

わが家に走り帰りて告げる者あり、

一等足速の馬に腹帯を付けんと

鞍に向つて急ぐ者あり、

閉じ込められていた乙女たちは泣きながら、

マントも従者も持たずに、

呆然と通りをあちこちさ迷いながら
哀れな母親を探していた。

愛しき母親からはぐれた小羊が

不安げに鳴き声を上げ

足早にさ迷い歩き、

幾度となく立ち止まりながら

あらゆる物に耳を^{そばだ}敬て

あちこちを徘徊するように

うら若き少女たちが泣きながら

口々に母の名を呼んでいる。

泣き声と嘆き声と悲鳴が

刻々と新たになり、増大する。

突如としてその声の消える事もある、

感覚をたゞ耳にのみ集中するからである。

如何なる影もラウタローに見え

如何なる音も彼の厳しき声に思える。

他の人たちの走るのを見るだけで、訳もなく
叫び声を上げ、走って行く。

嘆息、叫喚、嘆声を聞くのは

いと悲しき事であった。

風の齋す如何なる物も

恐怖のために拡大され

恐れ戦く大衆は

家財道具や田畑や

絹や襪布やベッドや刺繍、

基調な金塊、銀塊を見捨てる。

町を捨ててはならじと

抗議する物あらば

顔役は、「はても合点がゆかぬ、それがしは

己が意志にすら関りが無いわ」と言う。

だが一人の老人が恐れをかなぐり捨て

彼らに言う、賤しき奴め、臆病者、

イスパニアの名誉と存在を汚す者め！

「こはそも何事ぞ、何処へ行くのか、誰に欺されたのか？」

勇躍剣と盾を手にして

懸命に隣人たちについて出た。

かかる諫めもまたその他の

老人の言葉も効き目はなかった。

彼らは如何せん、言に従わず

既に遠くに走り去った者に追いつこうとする。

筆による記憶が絶え

全てがその存在を失う日まで

讃えるに応わしき出来事を

ファーマが歌うのは当然のこと。

高貴にして分別あり、且つ勇敢なる婦人、

ドニャ・メンシーア・デ・ニドスこそ

男共には拒まれたるあの久遠の

名声を勝ち得し人。

瘠せ細り病の床に臥っていたが

騒ぎを聞きつけるや

後に残した家や土地を

悲痛な面持ちで振り向き

鶏の声を幾度も聞きながら

人びとははや山道を登っていた。

猫は恐ろしい声で鳴き、

犬は悲しげに遠吠えし、

燕と取り乱した小夜啼き鳥（三）の啼き声は

深き苦しみを含んでいた。

それにも勝る苦しみが

ドニャ・メンシーアにあることは

あらゆる兆候から明らかだったが、

彼女は刀を抜き、皆の後を追った。

坂道の半ばで、彼らに追いつき、立ち止まる。

そして町の方を振り向き乍ら言った、

「ああ、勇ましい国民よ！厳しさと
劔で得た土地と名声の何と高価な事か！

答えてほしい、いま左程に恐れる相手に

嘗て御身らの示した堅固なる意志は何処に？

御身らの求めしあの高き地点、

不滅の偉大さはどうなったのか？

御身らの重んぜし努力と誇と勇敢さ、

そして天賦の勇氣は如何が致した？

御身らは思い患って何処へ行くのか、

背後から押し寄せる者は誰も居ぬのに？

ああ、幾度か御身らは

紛らわしき事態に臨んで大胆に、

必要なる手段も講ぜず、それ故

性急、高慢、無謀の者と呼ばれた事か。

数多の敵兵を支配し

頸木をつける御身らの姿を、

御身らの不滅を証す

その企てと成就の様を、私共は見た。

情の籠った御身らの目を、町に向け給え。

その礎は御身らの築きしもの、

御身らに貢物をもたらす

生い茂る肥沃なる野を眺め給え、

豊富なる鉱山と水量豊かなる

川と黄金の砂と

薄情なる牧童の後を追って

山道を迷い歩く家畜の群を。

御身の如き理解力に

恵まれぬ畜生どもさえも

それなりに考え、同情し

悲痛な気持を表している。

感情とは凡縁の無い石の如き頑な心も

柔かくなり、畜生どもは

大いなる悲しみを風に乗せて広め
人間の如き声を出して私どもを誇っている。

御身らは自らの努力と腕で築いた

平安と財と真なる暮らしを捨て、

私共が惨めに迎えられる

苦勞多き他人の家に向かわんとしている。

終生客人たることほど

恥ずべき事がありましたようや？

帰り給え、真なる人間には

真なる暮しか潔き死こそ相応わしい。

戻り給え、恐怖を友として

か様に立ち去るは悪し。

先ずこの私が敵の鉄に

身を投じて進ぜましよう。

私はこの言葉を真の物とし

御身らはその証人となるのです。

戻り給え、戻り給え！と叫べと甲斐なし、
誰一人その忠告を健全とは思わなかった。

正直にして分別ある父親が

邪悪な考えを抱く息子を

説得により思い止まらさんと

諄諄と諭せども

手におえぬ頑固者の息子には

説教は邪魔であり耳に逆う、

この様に恐怖に身を委ねたる人びとには

説得も説得とは思えない。

軽やかに飛び続けて

パウロのこめかみを貫き

その命を奪いし

かの投げ槍といえども

気高き婦人ニドスの

憎らしくも勇ましき言葉ほど速くはなかった。

人びとの耳に片方から入るや

忽ち他方の耳から抜け出たからである。

彼女の言に耳を貸さず、彼らは

思い思いに道を行った。

履物も履かずに女たちは泥道を

裾を引きづり乍ら歩いた。

こうして十二日を費して

彼らはようやくマポーチヨに辿り着いた。

さて、休みを十分にとったラウタローが、

ひどく遅れた私を急き立てている。

彼の事を妄に疎んじてはならぬ。

彼は我が方を害する事を怠らないからである。

されば彼が大勝利を博した所まで

話を戻すことにしたい。

記憶を辿り詳述すれば

長々しき物語となろう程に

顕著な出来事とその結末について

極く僅かな文面に要約したい。

今も延べた如く、可能な限り

手短かにし、冗漫を避けたい。

些細な事柄については

なるだけ簡単に触れることにする。

よく耳を傾けて聞いてほしい。

話は重大であり、力の籠った巧妙な筆致で

この蛮人の諸行を要約するには

注意が肝心であるから。

さて追跡が終わるや否や

喜々として彼はピジャンの子の許に引揚げた。

ピジャンの子は、恐れではなく権限から

遙か後方に陣取っていた。

將軍に一兵士が派遣され、

彼は牧草と食糧の豊富な

要衝タルカマビーダの
素晴らしき盆地に野宿する。

かの盆地に土地と家屋を所有していた
或る勇敢なる蛮人が

路上にて基督教徒のインディオを見つけ、
その男を殺るを不憫と思ひ

虜として自宅に連れ帰り

次の様に言う

「ああ、浅ましき奴よ、その値打も無いが
お前に命をくれてやろう。

「お前は武士の名誉を擔い

戦のために此処に来たのに

同僚が鉄を受けて斃れるのを見ながら

何故に女どもと隠れたか？

劔の刃をかくも恐れた故、

お前は女に違いない。

従つてお前には専ら我が輩に
仕える仕事を与えよう。」

彼は男に女性にのみ許された
仕事をすべく命じ、

寝所と夕食の準備をさせ、

その間、眠くなれば

疲れた五体を休めよと言つて

自らは寢床に就いた。

日輪は世界を二回りしたが

アラウカ人は目覚めなかつた。

没して千年も経たかの様に

深々とした眠りに埋もれた彼は

明るき太陽が世界を三度巡つて

遂に目を覚ますと先ず

着慣れた衣服を取らせ、そして

食事は出来ているかと尋ねた。

勤勉なる下僕は、食事は作りましたが冷めましたと答えた。

またこうとも言った、

仕事も食事も忘れ、

又これまでにあった全てを忘れて

五十時間も寢床に就いておられました、

眠りに満足なされましたのなら

食事はもう用意できております、と。

その蛮人はこう答える、「我が輩は

かくも長く眠りたることに驚きはせぬ、

「何故なら万事そつ無きラウタローは

お前らの到来に備えて

隊を編成し、厳格な

訓練を施したからである。

アポロが一回りし終えても

その明るき光が

その回転を確かめるまでは

われわれは腰を下ろすことすらできなかつた。

「もしも誰かがその部処を動けば

抗弁の余地無く、忽ち厳しき罰を受け、

疲れて寝入る者は

二本の長槍の間に吊り下げられ

宛がわれた食糧の他に

一本の穂たりとも切る者は直ちに討たれた。

われらはこの様にして

厳しい掟に従わされた。

「こうしてわが兵は

十四晩以上もの間

長槍を立て、確と握って

遅い汝らの到来を待ったのだ。

ただならぬ苦勞を重ね

睡魔と疲勞に打ちひしがれた頃

漸く汝らの接近を知り、

われらの疲れは吹き飛んだ。」

盆地一帯の静けさを見て

隊は引き揚げたのかと尋ねると

若者は答えて「昨日、夜明け前、

突如、騒々しくここを発ちました。

その訳は確とは申せませんが、

或る明白な証拠から、

塔の立つペンコの町は

イスパニア人が捨てたものと理解します。」

それに相違はなかった。

勝ち誇れる軍は、不覚なる住民の守る

イスパニア人支配下の村に向けて

移動中であつたが、

掠奪への欲望が刺戟となり

彼らを励ますことになった。

盆地よりペンコ迄は七レグワの道程だったが

一行は僅か半日でそこに着いた。

民家が見え始めるや各人は

村中が一様に

衣類に溢れ住民不在である事を希って

夫々の道に分散する。

出発の合図を感じるや否や

白き小麦の山に舞い降りる

黒き^{むくどり}棕鳥の群の様に

敵の軍は集落目指して降りて行く。

静まりかえる不毛の都市は

大音響と共に駆け下りる

怒濤の如き蛮人の

激しき攻撃を待つ。

其処では最も無欲なる者も

最も大きく、整える家を狙う、

彼らは犇き合い乍ら

開け放たれた戸口に殺到する。

彼らは直ちに家中を駆り

瞬く間に隅々を探す。

多くの者は、感触に欺かれてはならじと

箱を破り、錠前を壊す。

壁布や重ねたる物、装飾の品々、

絹の寝床や豪華な天蓋、

目に入る一切の物を詮索するが

それを妨げる者も反抗する者もない。

フリギアの血と燃え盛る火を撒き散らし

礎石までも切り崩し乍ら

トロイの民家を荒らした

ギリシア人と言えども、

怒りと復讐心に目が暗み

掠奪のみにては満足せず

破壊し廢墟となしつつも思いを遂げ得ぬ

この蛮人の烈しさには及ばない。

階段を昇る者、下りる者、

衣服へと急ぐ者、櫃に急ぐ者、

開ける者、外す者、引き出す者、

包みも小物も残らず浚える者、

口論し、争い、奪い取る者、

文句をつけて分け前に与る者、

荷物を持った蛮人共は

塔に、屋根裏部屋に、納屋に現れる。

蜂窩に蜜を作る蜂の

巣箱でのあの頻繁な出入りと

速度と熱意は、人間には

決して教えぬものだが、

また若き草花から蜜を取る時の

あの熱心なる働きぶりも、

彼らの見せたあの素早さとは

較ぶべくも無く、想像だにつかない。

一部たりとも他人には譲らなかつた。

中には、幸運を齎した家での

賢くて始末屋の蟻が

掠奪のみに満足せず

豊かな穀倉を往来し、

飽くことのなき貧欲から

忙しく運搬に従事して

更に大いなる収穫の家ありと見て

各仕度を整える様に、

愚かにも欲張りたる計算の下、

彼らは互いに妨げず邪魔せず立ち止まらず、

不確かな物のために確かな物を捨て、

素手の者は荷を持つ者に道を譲り、

やがて日が落ち宿に帰ると、

この様にして貧欲にアラウカ人は

探し過ぎて何も持たぬ者もいる。

入りては出で、また素早く引き返す。

また彼らは互いに盗品を盗み合う。

十分に手に入れた者は、今ぞとばかり

彼らの間には心遣いも友情も余り無く

速かに家に火を放つ。

大泥棒ほど多くを手に入れ得たので

他の者たちが外に出るのを待たず、

用心して守るしかなかった。

また建物を尊重することもない、

引きずる者あり、担ぐ者あり、

貧欲なる火の手は熾烈なる勢で

血を分けた兄弟すら信用できなかつた。

燃え広がり、そのため

彼らは己の持ち得る物のうち

火はすでに家から家へと走り、

哀れにも町全体が焼け焦げる。

貧困ほど悲惨な事は無いからである。

火は高く低く燃え広がり

或る者は一万、或る者は二万、

すさまじい音が天を脅かす。

或る者は三万ドゥカードの収入があり

朦々たる煙と紅蓮の焰で

極貧の者すら、年収千ドゥカード、

この哀れなる町は覆われてゆく。

これを下回る者は皆無だった。

辺りの大地は戦き、火は吠え立てて

もしもこの地が平穩に保たれていたら

空に昇ろうとするかの様であった。

バルデイビアの所得は漠大だった。

丹念なる造作の木造の家が

掘り易き豊富なる金鉱脈が

灰燼となって落下する。

町の周辺に横たわっていたからである。

豊かな大地に横たわった町、

見放されしこの町には

伝説によれば周辺には

十万の既婚の下僕が仕えていた。

更なる富と財宝が秘められていた

大量の金を掘り出し得たため、

黄金に富む町が失われてしまった。

それを軽んじる程になっていた。

ああ、打ち続く戦の方がまだしもと

彼らは劔の力を弛めたるが故に、

幾人の人が悲しき涙の中に生きるだろう。

これと名声とを失った。

栄えし富を享受せし者にとって、

家畜と耕地ともはや燃え盛る

燠となりつ、ある豪壮なる館も。

夷狄の叫びが響き亘る

戦慄の劫火が美しき家並も

造作を施した天井も許さぬを見て

彼らの喜びはその胸中に収らなかつた。

かくも大勢の者の中誰一人これを見て

その悲惨さに心を痛める者はいない。

剩へ、火から身を守る人びとを見て

彼らは嘆息し、呻吟し、立腹する。

焼き尽くすのに手間どりしため

彼らは痺しびれを切らせ、

嵐吹きか細き焰を煽らざりし

北西の風を罵る

家屋が倒壊するに及んで

一際高き悲鳴が響いた。

立ち昇る煙と火の粉と共に

その声は星にも達せんばかりであった。

火の手はその烈しさを加え

遙かに高き雲までも焦がしていた。

強き北西の風が突如として起こり

木々を激しく揺さぶった。

薄汚れたるウルカヌスは風の音に

鍛冶屋の鞆かじを携えて駆けつけた。

鞆は速かに火に加勢し、

かくて火は忽ち一切を我が物とした。

強大なるローマにて

辻ごとに火の放たれし町を見て

独り悦に入った

ネロの喜びも

邪悪なる蛮人が広がる焰を眺め

悲惨にも燃え尽きる町をみて

喜んだ程には

大きくはなかった。

別な歌章で述べることにする。

宛然窯の如き炸裂の轟音を聞くは
すさまじくも苛酷な事であった。

耐え難き程に立ち昇る黒煙は
雲の如く空に留まる。

猛火を免れ得るものは何も無く

一切はその為すがままとなり、

美しかりし建造物も

嘗ての平たき囲い場と化す。

復讐の鬼と化したあの猛き人たちの

無念は遂に晴らされたが、

彼らの悪意は止まることを知らず、

草木も生き物も生かしては置かぬ。

火はやがて鎮まり、

レオカンの子の使者が一人

早駆けで到来する、だがその使命に関しては

第八歌章

酋長並びに主要な人たちが総会のため、アラウコの盆地に集まる。トゥカベルは酋長プチエカルコを殺し、カウポリカンは強力な軍を揮いて、カウテンの盆地に建設された都市ラ・インペリアルを襲撃する。

名誉心が一度傷つけば、人はその恥辱を決して忘れない。それは常に人を萎縮させ、口にせずとも自ずとわかる。さればいと満足すべき時も万人が後指を差し示すほどに

不満げで、厳しくも深刻な屈辱感を示すものである。

もしも我が軍がこれを弁え努めて恐怖心に抗ったなら、財産も家も保ち得たであろうに、そして天寿を全うし得たものを。さすれば様々な不快を味わうこともなく、決して他を良く言わぬ、且つ嗜みもなく人の非を論う俗人の非難の的とはならざりしものを。

されども彼我の側から眺める時、

人数の違いと

何の防壁に囲まれる事もなく

また数々の不便を託つ町と

女、子供、乙女たちなど

罪無き数多の人々の喉が

刃先に曝されていた事は

十分に正当なる弁解となるだろう。

いま申せし事が弁解ないし原因で無いなら

この度の出来事の理由は

度を過ぎた思い上がりに対する

主の正しき御咎であった。

神は野蛮なる敵に、

下僕たる抑圧されし敵に、

イスパニア人の土地財産を奪わしめ、

イスパニア人の名誉を危くさせ給うた。

確かにコンセプションの地には

当時可成りの人がいたが、大方は

白き髻と皺寄りし額の者にして

苛酷なる戦いには役立たなかつた。

軍神マルテの只ならぬ厳しさと

今や万事に不吉な態度を示す

不公平なる運命の女神に

耐えるに相応しき者は少なかつた。

ラウタローの名声更に轟き

好運は我らを拒み

敵に微笑し、道を開くを見て

誰が彼に対抗し得たろうか？

天もこれを改め

その王国を亡そうとせず

かの夷狄をして

大いなる勇猛ぶりを発揮させる。

偕、既に述べた通り

焰に焼き尽くされた

荒涼たるペンコの町に

カウポリカンにより派遣された

顔見知りのインディオの使者が急拠到来した。

そして記憶に留むべき大合戦を

彼の方から強調した後、

勝利への感謝を表明した。

彼はまた手短かに

將軍がラウタローに

精鋭なる部隊を揮いて出発し

アラウコの盆地に赴き

其処にて元老院と男共の会議を持ち

最適の方法を決めよと命じた旨を述べた。

その肥沃なる盆地には

総会のための設備が整っているのである。

ラウタローはその命を聞くと直ちに

陣営を畳み、休みなく歩き、

僅かの間に広々とした土地を後にし、

アンダリカンの山に近づく。

そして意外なる到着を目指し、

敵軍の名前と声を用いて

味方の軍をからかわんと

海の方に方角を向けた。

左程に早く前進したため

夜明けには騒音と叫声と共に

突然部隊に押し寄せ、それ故彼らは

色をなして武器を手にした。

だがやおら冗談とわかり

騒ぎは転じて歓喜となった。

そして互いに確認し合う事もなく

武器を手放し、走り寄りて抱き合う。

喜色を浮かべた、人間味ある、且つ莊重な

カウポリカンは一行を迎え、ラウタローを抱き

いたわりと優しさのある言葉で

親しき兄弟としての名誉を与える。

一同は満面に喜びを溢えながら

清らかに流れる小川の畔で

あちこちに車座をなして集まり

例によって宴会を催す。

其の後漸くして、

大元老院会議が開催され

徹頭徹尾万事遺漏なく

行事と予算の討議が行われた。

だが予定通りの時間に

他の人たちも遅れず着き、

国の主要な人びとが

作戦会議に入った。

將軍は嘗てバルデイビアが

謁見した折の服装であった。

緑と紫の糸で織られ、

金銀の豪華な浮き彫り刺繍があった。

頑丈な胸当ては去る勝戦の時の物で、

程よく浮き彫りされており、

面付き兜は白く光る鋼鉄製で、

その上部には一面に翠^{エメラルド}緑玉^{ちりほ}が鑲められていた。

凱旋祝賀の時のように

この服装で出るよう命じられ

こうして百三十名の選ばれた酋長たちが

先述の如く、会議に入った。

彼らは昔乍らの階級順に

各自の席についた。

誇り高き勇者たちが静まりかえった時

カウポリカンはこう語った。

「諸君、余の理解するところ

我らの名声を高めるに

理性の力は不要である。

ただここで些か指摘すべき事がある。

諸君の勇敢なる精神を以てすれば、

余の考えでは、イスパニアに攻め入り

偉大なる国王、無敵のカルロを

アラウカの支配下に置くは簡単。

「我らの見るところ、イスパニア人は

漸く装甲せる槌矛の重みを知つたらしい、

野戦にても城壁にても我らに敵わぬが故に。

彼らの劔の切れ味の程は吾人の知るところ。

またわが鋼鉄の斧の切れ味により、

彼らの鎖帷子の脆さも知れたもの。

彼らの長槍は長大にして頑丈なれど

御身らの物によりその威力の程は実証済み。

「余は御身らの意志を確かめたい。

御身らの勇氣には充分に満足である、

鍛えた鋼鉄の厚き壁も

御身らの胸にて崩し得るだろう程に。

この確信の許、余は先頭に立ち

御身らが強力なるイスパニアを打ち破り

世界の戦いを勝ち抜くことは

必定である。

「彼らが神なるや否や漸て分るだろう。

仮に高き澄みわたる大空から

彼らの言う如く天降つたとしても

我々は鉄の力で広塗を開こう。

彼らの種族と血統を壊滅させよう。

仮令神の軍と言えども、

神の力、神の努力、神の業と言えども

団結せる我らの力には及ぶまい。

「強き戦士諸君、要するに、

余の意図は明白至極なれば、

余を共として愛する者は

それを示す絶好の機会である。

和睦に固執せんとする者は

以後、この余を敵と考えよ。」

彼はここで言葉を終え、披露された意図への

返答を静かに待った。

偉大なるカウポリカンの

莊重な演説が続く間、

彼らは眉一つ動かさず、

咳しわがき一つしなかつた。

返答には儀礼に適った

丁寧さと謹しみがあつた。

ラウタローの番であつたが、許されて

リンコーヤが起ち上がり、こう答えた。

「上様、私儀、この悲しき世に

生を受けて以来、貴方様の堂々たる

不屈の氣力に充ちた御心が示されたのを

見た事ほど嬉しく思つた事は御座いませぬ。

されば、かくも榮えある御心に感服致し、

上様の一奴隸、一虜囚としてお仕え致します。

若しもいま戦いを止めざるを得ないなら、

天地の王たることも望みは致しますまい。

「そしてこの事の証しとして

貴方様に誓います。如何に厳しき場合も、

苛酷なる逆境にあつても貴方様に従い

祖国に決して背かないことを。

この事を何卒信用下さいます様に、

この私が誓つて述べた

信ずるに足る言葉が裏切られるなら

その前に一切の物が崩れ去つていくでしょう。」

彼はこの様に述べ、次に、請われて

ペテゲレンと言う名の老酋長が続いた。

現下の厳しき状況に立腹してはいるが

平時は愛想よく、優しく、人間味ある男。

老齢で瘠身、端正で恰幅よく、

かの肥沃にして美しき平原の主である。

彼は徐に、荘重な身ぶりで

次の様な賢明な考えを提唱した。

「強き丈夫にして無欠なる隊長殿、

私はこの胸甲の品質を試すべく、

また私の斧が上質の鋼を凌ぐのを見るべく

先陣を勤める覚悟であります。

だが、事情を知る者として、誓って申しませんが

イスパニア人を此の地から去らせる前に、

また戦のためにイスパニアに行く前に、

先ず為すべき事が多々あります。

「先祖が我々に残し給うた物にて

満足する方が良かろうかと存じます。

その大部分を手中に収めている

我らの敵を駆逐致しましょう。

その後、様子の如何によつて、

我らの運が如何なるものか分る筈です。

私にはこの様に思えますが、更に良い

考えのある方はご提案を願いたい。」

この酋長が黙ると、トゥカペーロが

進み出で、怒りに燃え乍ら、

辺り構わず大声を上げ、

横柄且つ大胆な口調でこう言った。

「我が輩はイスパニア人など恐れはせぬ、

神であろうが人であろうが、

キリスト教徒らを若しこの手で皆殺しできぬなら

男と呼ばれたくはない。

「奴らをチリから叩き出し破滅させるは

我が輩にとって戦の中には入らぬ、
望みとあらば奴らをば

大地の奥深くに葬ってくれよう。

若し逃げるなら、槌矛で追い打ちぞ。

これぞ奴らをこの世より駆逐する道。

だがそれにて我らを恐るるは尚早、

これは我らの為し得るほんの一部に過ぎぬ。

「且つわが右腕にかけて確言するが、

若しも槌矛が二年の間この身を支えるなら

天に抗っても、鉄の力にて

この事態から解放し、報復し、

イスパニア人の城壁を悉く倒してくれよう。

しかも我が輩の心は更に広がり、

広大なる土地が平定された後も、

いと高き天にまで戦を挑む積りだ。

「我らを妨げ戸惑わせるものは

運勢に非ずして脆弱さに他ならぬ。

運勢を云々するは、愚かなる考え。

運勢これ乃ち腕力なり。

トゥカペルのかかる諸々の企ての

約束に微塵の狂いの生ずる以前に

空や城砦が先に崩れ

粉々になって落ちるであろう。」

ペテゲレンという老練なる勇者が

怒りを燃やし、立ち上がって言う、

「何たる高慢！思慮なき大胆は

嘗って勇者のものたりし試しなし……！」

だがこの老人の勇ましき気質を

熟知せるカウポリカンは

彼の言葉を慎重に遮り、

他の人たちに提案を求めた。

さればプレレンが発言し、アングルも

彼に劣らず勇ましく壮語する。

オンゴルモもその堂々たる考えを

表明せずにはいなかった様である。

一人また一人と同様な発言をする者の
数が膨れ上がる。

一部始終を熱心に見守っていたコロコロは
沈黙を破って次のように言った。

「各々方、かかる血気は若さの所産、

おお、息子たちよ！だが我ら老人は

この世にあって、健全なる忠告をする他は

何の役にも立たないが、

さりとて、若さの熱気や

瑞々しき齡の立てる湯気に目が曇る事はない。

さればより自由なる人間として

若き時には不可能なりし事が理解できる。

「御身ら、勇ましき武将たち、

御身らは只一度の勝利に思い上がり

意気益々盛んとなり、

人を軽んずるに至った。

その常ならぬ胸を鎮め給え、鎮め給え。

また慎重を欠くその空しき努力を。

イスパニア人を侮ってはならぬ、

彼らは決して安々と命を売り渡しはしない。

「諸君は幸運にも彼らを二度破ったが

彼らがこの地に初渡来した時を考え給え。

諸君は彼らの力に抗い得ず、

五度を越える敗北を喫した。

エリクーラの野では、諸君も見た通り

あれは僅か十四人の仕業であった。

笑われし土地と信用を奪回するは

なまかな事に非ず、与し易き相手でもない。

「我らは脳味噌と巧みな業を用いて

祖国を救い、自由にならねばならぬ、

諸君の勇猛心は手控えるが得策、

そは益するよりも却って有害となろう。

おお、レオカンの子よ！貴殿に忠言を呈したい。

若し賢者として我らを治めんと願わば、

その沸る熱を冷し、円熟せる頭脳にて

未来を考え、対策を講じられたい。

「最も健全にして適切なる助言として

我が陣営を三つに分ち

夫々の個所より一斉に

憎きカウテンの町を襲うよう提案する。

大方の者がその町の防禦に当たっていようが、

その数は僅少。この拠点を破れば

バルディビアを倒すは容易となろう、

銃砲もここまでは届かぬ程に。

「ただ、サンティアゴのみは無念至極、

されど何れ何らかの方策を考え、

その町に突入する。されば

ラ・セレーナの平定もた易くなるう、

尤もすべては運命の命ずる事ではあるが。

これこそ我らの最善の道である。」

老賢者がこう言い終ると、

多くの者にその助言は宜々しく思えた。

彼の次に、老衰し体の不自由な

妖術に長けた酋長が

(この占い師の名はプチエカルコと言い、

予測の賢者として知られている)

深く息を吸い込み、神妙に、

物悲しげな口調でこう言い始める

「拙者は爾来常々言いし事や、これから

言う事の証人として、黒人エポナモンを指名する。

僅かな期間なれど、汝らの

自由と至高の楽しみは姿を隠すことになる。

この宣告は今や動かし難きもの。

辰星により定められし事にして、

又運命の女神も汝らに与せぬからである。

見よ既に正確なる定めは

汝らを苛酷なる抑圧と試煉へと誘う。

さればせめて数多の使者に備えよ。

「空中に兆しが充ち溢れ、

百千の不吉なる椿事を告げて

夜の鳥が音もなく飛び行き

晴れ渡る昼間の空を濁す

大地の気を存分に含む草木は

実を結ぶことなく、枯れてゆく。

星が、月が、太陽がそれを断言し

十万の悲しき予兆がそれを確認している。

「拙者はそのすべてを眺めるが、

しかも如何なる物に慰みを求むべきか分らぬ。

何故なら武装せるオリオンはその剣にて

あわや大地の荒廃を起こさんとし、

ユピテルは西に退き

空にはただ血腥きマルテがあるのみにて、

而も来るべき戦を示しつつ

大地に向って戦の火を燃やしているからである。

「既に如何とも為し難き死神が

その怒れる右手を延ばして我らに迫る。

而して好運を齎すべき優しき運命の女神も

我らに異なる顔を向けている。

戦慄すべきエポナモンは

我らの熱き血潮に包まれ、

背を硬ばらせ、湾曲せるその爪を伸ばして

我らを未知なる港に連れ去るのだ。」

怒りの爆発を抑えつつ、トゥカペルは

老人の話聞いていたが、その言には従わず
こう言った、「拙者はこの愚か者が

予測により、拙者の槌矛より身を守るや否や

試してやる」、そして槌矛を振り上げ、

遊星の軌道を測った事もなく、

左程の予測者でも予言者でもない彼は

それを打ち下ろして老人を倒す。

これにより彼の腕は

味をしめて、あわよくば

その宗教づきし元老に追い打ちをと思ったが

何故かそれを思い止まった。

呆気にとられたカウポリカンは立腹し、

一瞬動揺したが、やおら我に帰り

恐ろしく猛々しい声で叫んだ

「隊長たち、殺してしまえ、殺してしまえ！」

カウポリカンのこの言葉は

あの横柄で短気な蛮人が

かかる機会を得て喜んだほどに

人びとを喜ばせはしなかった。

会場は高みにあったが、勇ましき彼は

一同を促し、強引に跳び越えさせると

居合わせた百三十人のうち

即座に百人が跳び越し、彼も後を追った。

高き会場に居残った人たちこそ

この物語りの中で際立つ人である。

彼らは決してその場を動かず、

そこから彼を静かに見守っていた。

彼らは唯一人の行動を見たのみで

軽々に周章狼狽はしなかった。

尤もかくも高所を跳び下りた者も

その行為を左程重大視してはいなかったが。

上等なる鎖帷子を付けたトゥカペルは

身軽な豹の放たれた如く、

臆病なる悪党の真只中に飛び出した。

堂々たるこの蛮人は、不利な戦いの中で

口笛を吹き、叫びながら人を掻き分ける。

一同は石や棒や弓の矢や

長短の槍で彼を追い詰める、

恰も牡牛か猛獣であるかの様に。

劔の指南が軽々と

巧みに劔を操るように、

いとも軽やかに傷つけ乍ら

前に後に左に右に

伸び伸びと器用に動き

強く確かな打撃を示し、

戦う猛者トゥカペルは

重き戦棍を振り回す。

確かに満足するには不十分ではあったが

相手の手足を損い奪うことに飽き足りず、

哀れな彼らを一途に戦棍によって

微塵に砕くことに専念し、

破壊し、細分し、痛めつけ、苦しめ、

脱臼させ、粉碎し、消耗させる。

宛ら激しい霰のように

投槍が彼の頭上に降りかかる。

だが血に染まったこの蛮人は恐れず

十重廿重の武器の中を動き回り、

腕と頭と、無数の尊大な魂とを

その一日で打ち砕いた。

そして小糠雨が風に吹かれる様に、

血と新鮮な脳味噌を散らせた。

こうして親類他人の別なく、

同様に害を加えた。

武器はすべて只管

山をなして攻めかかる野蛮なアラウカの

悪党たちから身を守るためであった。

だがその攻撃も恐れによって衰えていた。

確かに彼が飛び出し、

只ならぬ勢いで攻めかかり

その戦棍の素早さで人々を

蹴散らす様は見事であった。

意外の事態にカウポリカンは

烈火の如く怒り、

あわや平地に降りんとしたが

流星に生来の慎重さがそれを制した。

だがラウタローは痛く喜び、

自らを疑い信じぬ

あれ程の野蛮な態度に対し

一人の男が自制する様に感心した。

さればこの時、恭々しく、

伏し目勝ちに將軍に対し

この様に言う、「もしも私の意図と熱意に

何程かの価値あらば、一つお願いが御座います。

すなわちトゥカペルの犯した無礼をば

何卒お寛し賜りたいのです。

この者、戦場にては彼ら全員も及ばぬ

価値を示した者で御座いますので。」

將軍は当惑し、決め兼ねていた。

だが言葉の主の人柄を見て

直ちに処刑の意図を翻し、

陽気な顔でこう答えた。

「あの者はその方に助けられたよ、

彼を寛すことに致そう。」そして

更に部隊に彼と戦うのを

直ちに止めるよう指示した。

ラウタローは平地に降り、速かに

見事な角笛を吹いて、撤退を命じた。

その音に合わせて人々は鎮まった。

それをつらく思う者は誰もいなかった。

ただ一人残念がったのはあの勇ましい蛮人だった。

彼は自分の行いに満足せず、

ラウタローの方を厳しい目で見ながら

大声を出してこう言い放った。

「隊長、貴方はなぜこのさもない奴らを

叩き直そうとするのを妨げられるのか？

拙者はこうしてこの田舎者らに復讐し、

勇気の程を知らせようとしたのに。」

ラウタローは彼に言う、「お主がいま

その証拠を示したように、お主の右腕に

敵う者がいるや否や、もはや戦ってみる

必要は御座らぬ。」

「拙者と共に行くがよい、確約する、

途中にてそなたに何ら害は及ぶまい。」

トゥカペルは彼に答える、「誓って申すが

左様な恐れのために立ち止まる様な者ではない。

わが戦棍が道中の安全を保証してくれよう。

それ以外の物はどうなるうが知らぬ事。

恐れは女、子供の抱くもの。

さあ、お主のお望みの所に参ろう。」

二人は共に議場に着く。

トゥカペルはラウタローに続いて

階段を上るが、今しがたの出来事に

毫も動じる事はなかった。

聡明なる將軍はそ知らぬ振りにて

如何にも好意的に彼を遇し、

ラウタローは中断せし話の糸を

次の様に結んだ。

「無敵なる隊長殿、これらの人々が

提案せし事を具に聞き、

彼らの氣力の程を確かめ、

得も言えぬ喜びを感じております。

私が貴殿にお仕えせんとする誠意は

その為す所により証明されるでしょう。

もしも十分なる感謝を得られるなら、

幾度命を失つても本望です。

「この猛き戦士たちは、国土回復の為に

役立たんと望んでおります。

それは彼らの務めであり、

戦争の大きいなる誤りに対するものであります。

助言はすべて貴殿の役ではありませんが、

私は敢えて貴殿に対し最良にして

且つ公共の為となるべき助言を

致さずには居られません。

「誓って申し上げます、何卒

コロコロの賢明なる助言に

慎重に耳をお貸し下さい、

幸い彼は万事、完璧な男であります。

されば、將軍、遅延なく、

キリスト教徒に氣付かれぬ中に

彼らの迎撃態勢の整わぬ中に

これを実行されますように。

「さて、全てが平定された後、

恐るべきはマポチョーのみなれば、

強力なるエポナモンにかけてお願いします、

彼を倒す役を私に賜らんことを。

地勢は隅々まで承知致し、

イスパニア人とは常に戦つて参りました。

彼らの狡智や企み、

方法、業、時と場合を私は心得て居ります。

「私の申すこの企てのために

我々の中から選ばれた五百人の

アラウカ人を所望いたします。

それ以上は一人も要りませぬ。

貴殿をはじめここに御列席の

博識なる酋長の方々の前で申しますが、

百人のキリスト教徒たちの手中にある

その町を、是非取り還して見せます。」

この時、誇り高き蛮人は無言を守り、

一同はこの件につき長々と論議した。

この方法は有益と見做され

全員がこれに賛成した。

彼らはやがて知らせを待つ

群衆の所に下り、

決定された事柄を

広く皆の者に通知した。

彼らはそこに十四日間留まり

晴れやかな祭りを催し、

遊戯や娯楽に打ち興じ

また酒の呑み較べに賭をした。

その後、狂喜せる人びとは

カウポリカンを前衛に

レモレモを後衛に迎えて

メシアの民に向って行進する。

勇み立つ軍隊は、堅固なる地にある

ラ・インペリアルに迫った。

勝ち誇れる勇猛な敵は、速かにその町を

死神に委ねようと思っていた。

だが偉大なる永遠の父は

別な具合に配剤し

熱心なる諸氏にはお分りの様に

当然の仕打ちを遅らせ給うた。

第九歌章

アラウカ人の主力部隊はラ・インペリアルから三レグアの所に迫るが、神の思召しにより、彼らの意図は実現しない。彼らが引揚げたとき、イスパニア人がペンコに陣を構えコンセプションの町を再建中という知らせが入る。彼らはイスパニア人を襲撃し、激戦となった。

過ぎにし時代に見た程に

奇蹟が見られなくなったのは

聖者が少なくなつたせいであり、

基督の掟に権威があるからである。

それ故、自然の営みによる

如何なる物も驚きの対象となり、神が信じられぬのみならずその信心も損われている。

病める者を治す時、神は

習慣と時間を以て立ち直らせる。

憐れなる賤しき者を起こす時は

平凡なる手段によって偉大ならしめる。

奢り高ぶる者を懲らしめんとする時は

自然なる状況の下にこれを行う。

さればこの世の事は皆

自然なる道を辿るものである。

この事からも分る通り、神は

その御心を表わされる時、

神のみが力を加え得る

自然を利用されるのである。

故に純なる信念によって信ずる人びとは、

一たび目に見えてからはそれより

離れ得ぬ物を確と見るよりも

価値のあるというもの。

私は或る事柄を語るに当り躊躇している。

疑いを抱かせるのが大嫌いだからである。

而も事は不可思議で奇蹟的であり、

軍全体がその目撃者であった。

主よ、私はいま述べた事に関して

慎重ではあるが、さりとて

インディオたちも認めるとあれば

語らずには居られません。

我らの神がその聖なる教えが広まり

自然の秩序が超越されんため

諸々の奇蹟を起し給いし事を

いま、我々は明らかに知る。

これにより推測し得るのは、

野蛮なる風習と盲目なる人びとが

信仰へと帰依せんがため、

神は奇蹟を表わし給うたという事。

既に述べた通り、アラウカ軍は

ラ・インペリアルより三レグワ距たる

平地の格好の地に屯し、

カウポリカンは武装して

町に突入せんと決意していた。

そして神は改心の意志なき恩知らずの民に

慈悲と寛容の心を以て

その咎めを引き延ばしていた。

ラ・インペリアルの町には

武器も弾薬も兵糧も乏しかった。

町人は選り抜かれた人々とは言え、

戦うには余りにも少数であった。

若しも蛮人共が眼前に迫れば

町は根底から破壊され、

いかなる卑しき力もそれを荒廃させ

内部の人々は誰一人逃げられないと思えた。

既に進軍の喇叭が鳴り

屯する軍が移動を始めた時、

俄かに空が濁り出し、

悲しき奇蹟で充滿した。

雲は雲と連なり

騒々しい音が響いた。

四方からの風が怒りをこめて

猛烈に吹き荒れた。

入り組んだ雲が激しい雨と

固き石のような霰を降らせた。

稲妻、雷鳴、電光が慌だしく

空を破り大地を裂いた。

暴しさを競う風は

凄しく吹き荒れ

旋風となって全てを倒し

竜巻となって吹き飛ばす。

恐怖が一樣に皆を襲う。

かかる混乱と勢いと嵐の中で

たとえ鋼でできていようと、

震かず落ち着く者は一人もない。

この時戦慄すべき竜の形の

猛々しいエポナモンが姿を現わす。

蜷局とぐろを巻き尻尾は火に包まれ、

やがて、嗚れた悠長な声で

皆の者に、恐れ戦くイスパニア人の町に

急ぎ進むべし、彼らは

到着するいかなる隊によつても

いとも簡単に占領されよう、

且つ刃物と火により降伏せしめ、

人は一人も生かさず、壁は全て崩すべしと言う、

一同は了解するが、忽ち彼の姿は

煙の如く消え去り、見えなくなった。

折しも混乱せる四元は

次第にその動きを鎮め、

荒れ狂いし四方の風も

元の洞うつろの中に退いて行く。

雲は元の座に戻り

空と明るい太陽を解き放つ。

ただ恐怖のみは、最も大胆なる胸をも

解き放たなかった。

嵐は止み、晴れ渡つた空は

潤える大地を喜びで覆つた。

折しも雲に乗って一人の女性が

輝きながらさつとばかり飛来した。

清らかで美しい薄帛うすぎぬに包まれていたが

その輝きは尋常でなく、彼女の前の

真昼の太陽の輝きも、星の明るさに

見える程であつた。

到来したその女の聖き顔は

一同の恐れを払い、和やかにした。

彼女は白髪しろかみの老人を従えていた。

老人は莊重で、実に聖き生を営む者の様だつた。

彼女は優しく妙なる声で

皆の者に言った、「迷える者よ、何処いずこへ？

その歩みを汝らの地に戻しなさい、戻るので、

戦のためにラ・インペリアルへ行つてはなりません。

一言も交わさなかった。

「神はキリスト教徒を助け給い

権能を与え給うのです。

命令も懇願もなのままに

汝らは恩を忘れ、逆い、人道に反き

恰もそののみが彼らの意図であったかの如く

神への恭順を拒みました。

やおらアラウコへの道を歩み始める。

行つてはなりません、神は

彼らは思い思いに風のように軽やかに行く。

彼らの手に万物と裁きを委ねました。」

宛ら背後を可成りの火で

こう言うと彼女は、低い地面を後にして

焼かれんとしているかの如く、

広漠たる空に舞い上がって行った。

彼らは力一ぱい走って行った。

純白の薄帛に包まれた

以上は十分なる権威の下に語られるべく

栄光に輝くその姿を

大勢の人から聞き正した事柄である。

アラウカ人はうっとりとして、

今日は睦月、二十三日の半ば、

口を開けたまゝ、息もつかずに眺めていた。

ここに述べた奇蹟が

その姿が消えると一同は不思議がった。

軍を前にして起つてから

眠りから覚めたばかりの様に

早くも正に四年となる。

呆然と、互いに顔を見合わせたまま

確かな年は千年に加えて

本来の貢物を齎さなかった。

要するに、蛮人共も知る事なれば

眞実なることは明白、

粉飾によるものに非ず。

あの様な場合、あり得ぬこと。

この幻視の故にそれより二年の間

空腹と病と死とその他の災いがあつた事を

彼らは確認済みと見做している。

(その証拠は少なからず深刻な物)。

海は水分の蒸発を抑え

分水嶺に水は無く

太陽は戦火の支援を得て

たおやかな草花を枯らした。

乾燥と熱気はつのもり

大地は湿気を欠き

その務めを果たさず、果実を持ち逃げ

これによりアラウコの地に

悪が齎される事となった、

すなわち人は人肉を食するに至つた。

(何たる人にあるまじき行いよ！)

また尊属殺しの過ちも生じ

兄弟が互いにその糧となった。

母親の中には最愛のわが子を

嘗て居りし自らの腹中に戻す者もいた。

偕、蛮人共が武器を手に

父祖の地プレンの盆地に

辿り着くや

空は一変して荒れ模様となった。

この時、この地で

身を潜め居し冬が

氷と共に地上の全てを支配し

戦いの続行に止めを刺した。

人びとは離散し

軍隊を捨てて人里に赴き

一様に厳しき訓練も止み

湿った雲が大地を掩う。

だが燃える太陽がさそり座を焦がし

峰々がその屹立せる頂から

冷たき雪を振り払い

新たな草で飾られる時、

この時期物騒なる軍神マルテは

恐るべき音と共に車を取り出し

好戦的な怒りに燃えて

準備の整えるアラウコの地を駆けり始める。

装備せる馬をけしかけ、

その行く処で大地を震わせ、

馬手には血に飢えた鋭き鉄を持ち

弓手にて強力なる盾を振う。

戦士たちはやおら闘志を燃やし

武器を手にし、休息を終える。

戦いの餌にありつかんとして

遠方より見知らぬ者たちも馳せ参じ、

鉄を鋼鉄に代え、

強力なる弓の弦を調え

戦棍の重さをふやし

堅きとねりこ梣の槍を試す。

この様にして早くも人びとは

武器と騒めきの中にあつた。

彼らは待ち侘びし戦の訓練を

一日も早く始めんものと

例の酒盛りに集い

(古来のしまたり為来にして憎むべき悪徳)

高位高官の士は

戦いの決定に集う。

彼らは総会を開き、

国の利益と発展のため討議を重ねていた。

その折しも四人の兵士が到来し、

悲しみと急を告げる表情で、

荒廃せしペンコの地に

既に大勢のイスパニア人が働き

分厚く強力な市壁を

建設中なることを彼らに知らせ

この様に言った、「おお、戦士たちよ、

身共は地区内の住民の使者にして、

御身らへの約束を携えて参上致した。

御身らが再びキリスト教徒を放逐すれば

相当の金銭にて御身らの労力に

報わせていただきたい。また仮に

望む結果が得られずとも

所定の額の三つ一は献上致す。

「御身らの御好意無くしては

防禦も抵抗もなし兼ねる故、

惨めなる時の常として

彼らにたやすく恭順を示した次第。

抑圧によるに非ず、暴力でもなかった。

身共は不運なる者にはあれど、

運勢に終りと境を告げる死の歎息の

如何に短かきかを心得ています。

「されど、アラウコの国がかくも近く、

定めなき輪も有利に定まり居れば、

和平こそすべてを治すべき

最良の道と身共には思えました。

苛酷な運命がそれを損おうとも

身共には死ぬための時間が残されています。

両の腕はまだ脇腹を開き得ぬ程

疲れてはいない筈。」

「されば御身らにとって身共の

使者の任務と緊急は明白でございましょう。

そこで早速その件につき御討議願いたい。

決意のお返事をお待ち致します。

速かにお願ひ致します。それによって

彼らが力を回復する以前に、

危険なくイスパニア人の尊大さと自信を

打ち砕くことができましよう程に。」

使者たちの言葉に酋長たちは

得も言えぬ満足を覚えた。

彼らの心にはその言葉が

まだ終らぬ中に受け容られていた。

だが一同は、最初の一声がレオカンの子に

与えられることに我慢せねばならなかった。

彼は相談を受けるや

元老院の名においてこう答える。

「我々はこの度の事を聞き及んで

当然乍ら驚嘆している、

一体、我々と更に騒ぎを起こさんとする程

大胆なキリスト教徒は本當に居るのかと。

さればじゃ、この勇ましき男^{おのこ}たちは

約束と戦いをお引き受け致す。

戦を完遂するまでは

仕事の代金は一文も貰うまい。

「御主らはこの返事を携えて疾く帰られよ。

我々は必ずや実行致すであろう程に。

そして命令の下り次第、キリスト教徒に

襲撃を加えるであろう。

彼らが我々の眼中になき事が

やがて十分に明示される筈。

だが賢明なる御主らもお気付きの通り、

万事に警戒を怠ってはならぬ。」

この返事を持ち帰るべく、四人の使者は

痛く喜び出發した。そして歩いて

間もなく彼らの帰りを待ち侘びる

主人の許に帰り着いた。

色よき返事を得て万事心得、

満足と裏切りを偽り、

偽りの心を隠しながら

彼らは慎重に迫害に耐えた。

最良の方法はアラウカの

軍に以てする事と心得た彼らは

努めて大人しく振舞い

敢えて大義に立ち上がらず、守ろうともしない。

そして二重の熱き契約により

彼らの思いが実現される様、

謙虚さと大いなる秘密の下で

待望の復讐が目論まれる。

我が方の人びとや壊れた町について

述べるのを私は失念していた。

敗者を疎んじる事が

この世にはよくある様に、

私は好運な側に着き添い

余りにも歩き過ぎた様だ。

もし機会が知らせてくれなければ

思い出しもしなかっただろう。

荒れ果てた大都市と市民たちの

歩んだ道について、私は語った。

それらを、止むなく放棄することとなる

戦いの終りの部分に書き留めた。

偕、始めた物語りに戻り、また

運命の苛酷な仕打ちに立ち戻れば、

彼らは当時サンティアゴにいた、が

ここではその話は割愛する。

その地に撤退した彼らは

必要な武器を整えて再編し、

投票によりペンコの町を

再建することに決め、

多大の労力と費用を投じて

僅少な人数の町を作った。

この事の詳細について、給金の多少や

恐怖の程については、私には断言できない。

彼らは草生すペンコに着き、

町の中央だった場所を

堀で囲んで砦となし

その小さな四面の角に

夫々二面を露わす

強力な二つの稜堡を築き、

砲門により、通路を

警護していた。

土地の住民らはさり気なく、

秘かに進み来る約束の

援軍の到来を待ち乍ら

底意ある平静を保っていた。

だがこの出発は秘密ではなかった。

キリスト教徒らの間では

勇敢なるラウタローが軍を揮いて

丘を越えたと噂されていたからである。

それによれば、プレンに向かうのは

トメ、ピジョルコ、アングルモ、カジェグワーノ、

トゥカペル、この男、誇りと勇氣では

アラウカ人の中、彼に敵う者はいなかった、

オングルモ、レモレモ、レポピア、

カニオマンゲ、エリクラー、マレグワーノ、

カヨクピル、リンコーヤ、レポマンデ、

チルカーノ、レウコトンとマレアンデ。

これらの名だたる男兒らは何れも

この戦に備えた人たちであり、

更に数多の兵の中から選りすぐった

百戦錬磨の二千人がいた。

彼らは強力な胸当てを着け、

頑丈な鉄の太い槍と

鉄の戦棍、鋼の斧、

柄付きの投擲用の武器を備えていた。

この様にして部隊は

夜の静かな暗い影の中を

慎重なラウタローの指揮と

統制の下、進撃した。彼は

夜明けの星が

黙せる緑の野を愉しませる頃、

敵の警戒と密偵により

彼の到着に気付かれぬ中に着きたかった。

だがイスパニア人は、彼らと

契約する味方の一蛮人を通じて

敵軍が如何に確固たる意志を抱いて

接近中なるやを知っている。

彼らはこの情報の他にも

秘密裏に行われる悉皆の事を知り、

濠や塀に依って

危機と戦いに備えている。

イスパニア人の隊長はラ・モンターニャ出身の

貴族フワン・デ・アルバード、

聡明にして熱意に充ち、術数に長け

大の努力家にして分別の持ち主。

この男、稀に見る速かさで、

目前に迫る危険を確かめ

時間と機会を逃さぬのみか、

むしろ急拠防備の策を講じる。

直ちに兵を招集し、

各自をその部処に就かしめ、

歴戦の勇士九人に命じて

敵状を視察せしめた。

彼らは夜陰に乗り

蛮人の露営地に着くが、

静かな敵の隊に感知され

大騒ぎとなる。

叫声と驚きと騒ぎと

時ならぬ戦の音、

響きも高き喇叭と太鼓が

大地を叩かせ振るわせる。

この時斥候兵は策を用いて

小山を越え、

近道を通って帰着し

友軍の隊に報告する。

フワン・デ・アルバラードは巧妙に

手薄き個所を補強し

最も必要と思われる所に

鉄砲隊と槍騎兵と配置する。

すべての部処の準備が整うと、

戦戦恐恐と敵を待つ代りに

軽騎兵を揮いて勢いよく

アラウカ人に撃って出る。

明くる日の新たな光りが

地平線上に延びていた。

黄色の太陽は、清々しい東の空の

雲を早くも赤く染めていた。

その頃アルバラードは兵を揮い

防備せる要砦を離れて

ラウタローの隊を目指す。

ラウタローも亦大急ぎで彼に接近する。

我が軍がまだ自軍の城壁から
半レグワも進まぬ内に

山の端を整然と進む

アラウカ軍の姿が見えた。

磨かれた武器が陽光を浴びて

澄んだガラスよりも輝いていた。

兜は緑、青、白、真紅の

高々と立つ羽根で覆われていた。

音を聞き、馬手を高く挙げ、

天に向って関の声を上げた

アラウカ人の喜び様を、

一体誰が描き得るだろう。

蛮人どもは千余の楽器を打ち鳴らし

誇りに充ち、大急ぎで、

辺りの平原に地響きを立てながら

イスパニア人の方に向って来る。

イスパニア人は手に手に武器を持ち

物凄い音を立て乍ら彼らに応えんとする。

平地の方が好都合と考え、

敵を攻めに山を降りる。

槍の穂先を下に構えて突破を目指す。

しかしその大胆な作戦も空しかった。

既に訓練を積んだ蛮人どもは

円陣の輪を隙間なく狭めて行った。

足と顔をしっかりと前方に向け

かくも大勢が槍を揃えて進んだので

激突を外らせたのみか、

相手を当惑させるに充分であった。

我が軍は突破することなく引き退った。

相手は堂々と、威勢よく

この好運な機会に総仕上げをせんものと

足どりも軽く進軍を続ける。

要塞に引き籠っていた。

我が軍は抵抗し戦いつつ

太陽がまさに中天に

激しく彼らを圧迫し、

昇り詰めた時、そして

橋の掛る狭い難所に差しかかった。

騒がしい蟬が

この時ラウタローは角笛を吹き

鳴き声を競っていた時、

従順なるアラウカ軍は

狡猾なるラウタローは全軍を揮いて

聞き慣れたその音を聞いて力を挽回する。

露营地を引き揚げ

要害から可成り距る所で

轟く歩調を合わせて

一発の砲声が轟いた。

城塞のイスパニア軍へと向かった。

ラウタローは暑い真昼を待つて

大胆さと軽蔑と自信を以て

立ち止まった。

ラウタローは要塞に接近した。

朝の中の涼風が

部下が隊をなして彼の後に続く。

兵と馬を憩わせると思ったからだ。

彼は一風変った持ち方で

彼は我が軍の見ている前に落着き、

長い、節くれだつ、太い槍を引きづっていたが、

隊の再編をはかった。

威勢よくそれを斜に構え、

わが隊は最良の策と考え、

東尻を素早く振り回したので、

両端が触れ合うかに見えた。

閉じ籠って敵を待つを嫌う

若干のイスパニア人が外に出る。

前列に火繩銃を備え、

その後に長槍の列を配し、

両側を馬で固め、この様にして

勇ましく敵を求めて進み出る。

互いに傷つき合う所まで来ると、

両者は互いに引き下がる。

やおら夫々の恨みに駆られて

両軍は激突する。

狙い定めた火繩銃が音を発し

一面は煙と火と埃で覆われる。

勢よく番えた張りつめた弦は

多数の矢を放った。

柄の着いた武器が雲霞の様に

勇ましい腕を放れて飛んで行く。

相對する二つの水の流れが

大音響と共に互いに接近し、

やがて混り合う瞬間、

より激しい流れの方が

勢いの劣る他方に耐えて止まることなく

その流れを押し返すように

野蠻の流れは強引に

我が隊から力を奪い去った。

人数と動きの齎らす

猛々しい力に耐え切れぬ

イスパニア人を、蛮人たちは宛ら

強風が軽き藁を吹き飛ばす如く押し流した。

彼らは乱暴に、既に破れた

陣地に全員が雪崩れこみ、

四角形の広い城壁の中で

激しい白兵戦が展開される。

素早く帆に風を孕ませる。

懲らしめられた幾人かのイスパニア人は

やや遅れて着いた人たちは

要塞の中に身を潜めることを望まなかった。

船の錨の上がるのを見て、

彼らは歎き心の持ち主であり、

この方が惨めさ少なしと考へ

苦境に耐えられなかった。

迷わず荒波の海に身を投じる。

彼らは広々とした原野を望み、

嘗て泳ぎを恐れた人も

乱入した群の両側に散った。

今や波を分けて泳ぐ

だが雄雄しき人たちは大胆な手で

恐怖の凄じさも分ろうというもの。

侵入者たちから広場を守ろうとする。

恐れ故に人は大胆な人間となる。

彼らは守り抜くか、さもなければ死を望む。

砦に引き退りし者たちは

他の者たちは遠くまで走り去った。

死者となるとも敗者にはならじと

彼らは時を稼いで難を逃れんとした。

戦士として天晴防戦に努める。

又或る者は海岸に辿り着き

今はただ名誉ある最後を望むのみ。

船に乗り込み、耐え切れずに

この覚悟にて彼らは勇み立ち

曲がれる錨を上げた。

生命を捨てて攻めて出る。

彼らは恐怖と下劣な意図を満足させ、

敵の損傷夥しく、

広場は今や血の海となった。

ラウタローは人と武器とを対置させ

先頭切つて要塞に突入したが

その日の突入で偶々出くわした

二人の兵を打ち倒した。

リンコーヤも傷つけ倒したが

トウカペルの勇姿を誰が語り得よう？

もし道か階段さえあれば

天までも攻め込んだに違いない。

この勇者は戸口からも橋からも入らず、

巧みに、奔放に跳躍し

軽々と濠を越え

一瞬のうちに頂上に達した。

これは彼にのみ為し得る事であり、

他の人たちは遥かに及ばなかった。

だが彼は千人の兵に守られているかの様に

やおら城壁の中に踊り込む。

要塞に足を踏み入れるや否や

猛り立つ蛮人は日頃錬えた

硬く太き戦棍を振りかざし

敵群を追い払った。

上質の鎖帷子も胸甲も役立たず、

又頑丈な面付き兜も

打ち下される烈しい力に耐え切れず

脳は碎かれ窪みを生じた。

或る者は手足が痺れ、

或る者は息を引き取り

或る者は首筋を胸に沈め

或る者は背中や脇を

宛ら軟かい蠟の様に碎かれる。

彼は殴りつけ、痛めつけ撚じ曲げる。

そして危険のさ中にあつても大胆に

武器や兵を恐れず突進する。

彼は元気な若者トルキンを殺した

オルテスに向って激怒の形相で迫った。

戦棍を高く振り上げ、相手に視線を釘づけにし、

猛烈に犇めく武器の間を突破する。

あのアラウカ人の背骨と

片手の二本の指を切り落とした

見事な劔が、また力強い巧みな腕が

誰のものであったのか、私には分らない。

燃え立つ闘志のために、彼は

咄嗟の負傷に気付かなかった。

だが激しく腕を振り下ろさんとして

指と戦棍の無いのに気付いたとき、

カスピの手負の虎も追^四い立てられた獅子も

このインディオ程に猛り、

苛立ちはしなかったろう。

指は化膿し、彼は天と地と海と地獄を罵った。

彼は両足の先に力を入れ

体を一層高くする。

腕は当るを幸い薙ぎ倒し

その戦棍の勢いは凄まじく

彼を撃たんと劔を振り上げたオルティスの

面付き兜と頭蓋骨を砕くと

烈しい苦痛に気を失い

感覚を失って地面に倒れた。

蛮人はまだ復讐し足らぬとばかり、

更に激しく襲いかかり、

尚恐れを知らぬ右の手で、怒りをこめ、

オルティスから劔を奪い取り、

その鎖帷子を片方に上げ、

片脇からもう一方の脇まで貫くと、

肉体に宿る魂は止むなく

辛い別れを告げた。

右手の効かなくなるのを感じて
インディオは劔を左手に持ち変え、
更に一撃を加える。
左手も劣らず殺傷の名手である。

トゥカペルは草刈り人が
手慣れたその手で簡単に
枯れた藁を刈り取る様に
手足や首を切断した。

激怒の命ずるがままに
彼は辺りを歩き回り、
濃き茂みを槍の柄で薙ぎ倒しつつ
敵を傷つけ、虐げ、蹴散らして行く。
偶然ロボ神父にも一撃を加え、
四人を相手に闘っていたその神父は
その戦いの終りを見ることなく

魂を神に捧げ、肉体を大地に委ねた。

劣らず強く、^{いかめ}厳しきレウコトン、
天より授かりし勇気を以て
傷つけ、気絶させ、倒し、死に至らせる。
力と気力にかけては彼に優る者はない。
様子を全て書き記す述を私は知らない。
余りの混乱に、私の疲れた手は
もはや筆を走らせることが出来ない。
そこで止むなく、簡潔に纏^{まと}めたい。

アンゴルも同様に堂々として豪気な男、
湾曲せる大刀を振り回して
若きディオゴ・オロを傷つけ、その重き
一撃は彼の体を硬き大地に押しつける。
だがこの時、フワン・デ・アルバラードが
彼の切先の勢いを抑えたため
彼は烈しく刀を振り上げると忽ち

脇の下より差し込んだ。

敵の劔は防禦を知らず、

露わな部分を目指して突進し

真直ぐに心臓に入って行った。

そして地塗られた広い扉を開けた。

血色よき若者の顔は

萎えた黄色で覆われた

致命的な氷の刃は腕を切り離し、

凍る五体は硬い地面を叩いた。

巨体の若者マレグワノは

怒りに燃えて遠近おちこちに足を運び、

アングルが巧みな業によって

厳しき鉄に参るその時、そこに到着した。

彼は親友にして従兄弟であり、

長い間、親しい間柄にあった。

「彼は生きている間、常に同じ運命だった、

死ぬ時と同じでありたい」と彼は言った。

そして彼の胸と血管を焦がす

俄かな怒りをこめて殺人者に向かい

太く頑丈な丸太を持ち上げ

力をこめて彼の上に倒し掛けた。

だがその打撃による破壊を恐れて

用心深く見守っていたアルバードは

忽ち用意していた馬を駆ると

丸太は地面に喰い込んだ。

チルカン、オングルモ、カジエグワンが一方に、

レポマンデとプレンが隊を組み、

こうして我が軍を圧迫したため

あの日、彼らは非常な信用を得た。

トメ、カヨクピル、そして元気な

ピジョルコ、カニオマンゲとレボピア、

マレアンデ、エリクラーとレモレモが

夫々に勇氣の限りを見せつけた。

この時、窪んだ空に高鳴る

突然の響動^{とよ}めきが感じられた。

野蛮なる異教徒が勝利を

高らかに宣言していたのである。

潰滅したイスパニア人は既に

血と敵軍に占領された

不運な土地を見捨てて

イタタへの道を急いでいた。

イスパニア人は全員が

退却を始めていた。

恐怖が逃亡に拍車をかけ

一際急き立てていた。

勢いに乗じて蛮人共は

濛濛たる土煙に包まれ乍ら

執拗に追跡を続け、

逃げ遅れた者たちを殺めた。

アルバラードは勇を鼓し、思慮深く

彼らを叱咤激励するが効果は無い。

甚だしき被害を蒙り取り乱す者たちは

死と非常なる窮地から逃れて行く、

或る者は山に向かい、或る者は

マポーチヨの狭い道を行く。

若干の、まだ意志強固なる者は

勇氣を出し、アトロポス^(五)と共に頑張る。

彼らは不名誉な生を軽んじ

名誉ある死を望む。

稀に見る闘志と勇ましい劔により

万事休す時を引き延ばす。

やがて広場は魂の去った肉体で覆われ

何れの側の兵も居なくなる。

僅かに残りし勇者らも

干戈と死に身を委ねたからである。

或る者は両脇に傷を負って倒れ

或る者は体を串刺しにされ、

或る者は己が血に覆われて

血の氣を失い、死神に降伏する。

残酷なる鉄の武器に寸断され、

遂に全員が死亡する。

偕、馬を急かせる者達の後を追おう、

彼らに追いつくのは一苦労の様だから。

或る者は疎覚うろおぼえの道を、

或る者は険阻な、人の通わぬ小道を

馬に拍車をかけ乍ら走って行く。

恐れも道程も多いからである。

夷狄の隊は凄じい叫声を挙げて

山を、丘を、平地を、峽谷を通り

背後から彼らを攻め立て、

傷つけ、殺し、倒して行った。

地方から人々が集まり、

何れかの側に味方すべく武装していたが

優劣が明らかになるのを見届けるまで

公平中立の立場を保っていた。

この時、誇らし気に勝者たちに対して

突然の関の聲が挙がり、

それまで中立だった武器は

帝国の旗に抗って構えられた。

彼らはイスパニア軍が

風よりも軽く懸命に走り、

一目散に逃れるのを

強欲に追跡する。

恐怖心がわが軍に齎した

多大の困惑のために

彼らは山や谷や丘や畑に分散し

道なき道を駈けて行く。

駿足なる馬の持ち主の、

ああ、何と羨ましがられる事か！

親しく長くつき合った友の

何と薄情なことか！

金銭による約束も益無く、

財産の所有者も力無し。

彼らを支配する恐怖心は余りにも強く、

物を持つ心の余猶は無かった。

寧ろ利益を軽んじ、

嘗て無い恬淡ぶりを發揮する。

上等の面付き兜に次いで

華美な銀の胸当ても邪魔とばかり打ち捨て、

この様にして彼らは約束によりも

迅速なる踵に命を賭けた。

たとえ海に溶け落ちようと、たゞ

イカロスの翼のみを欲しがった。

アルバラード家のフワンとエルナンドは

疲れ切った人たちを励ましつつ

勇ましきイバラと道を急いだが

このためにも足を緩めはしなかった。

駿馬に跨る二人は塞がれた道を

切り開いて行くが

力一杯拍車をかけても

一人のインディオからも逃れ得なかった。

人びとの遙か前方を

一人の肩幅広き強の蛮人が

三人を追いかけて行く。

レンゴという名の優れた若者。

大胆にも彼は单身彼らを追い、

大声で彼らを罵り、

広野を走って距離を詰めるが、

彼らは一步も先んじ得ない。

「どう、どう、待て！待て！」と彼は怒鳴る。

(イスパニア語はそれしか知らなかった)

だが生来の言葉で

大胆な侮辱の言葉を彼らに吐いた。

この様にして卑怯者、愚か者と呼び乍ら

彼らを三レグワばかり追跡した。

彼らが如何に拍車をかけようとも

彼は決してその尻尾から離れなかった。

彼はその形や格好について

誰も言い得ぬ一丁の武器を振りかざしていた。

太い樵の木で出来た荒削りの物で、

梁ほどの大きさと重さだった。

その頭部は金属の枠に納まっていた。

若者はそれを軽やかに

敏捷な剣士が右手で杖を弄ぶ程の

疲れも見せず振り回した。

蛮人がその重い丸太を

馬たちに当てると

物凄い打撃の力で

馬は殆んど二つ折りになった。

こうして痛めつけられた馬は

拍車をきままに道を急いだ。

闘牛の折の棒といえども

この蛮人の棒程に恐れられた例はない。

あの傲慢なる男は安全な友軍の群から

可成りかけ離れてはいたが、

尚もその厳しい追跡を止めず、

寧ろ彼らを更に追い立て、苦しめる。

駿足と戦棍で彼らを痛めつけ、

アラウカの言葉でイスパニアの事を

悪し様に言う。その言葉を解する三人は

力の限り走り、彼から逃れ去った。

二十度^{たむ}キリスト教徒は引き返し

彼に向つて突然襲いかかる。

彼は両手に握つた武器で、

三人に素早く応讐する。

その間にも勝ち誇るインディオたちが

着実に近づいて来る。

折を見て三人が再び走り出すと

棒を持った蛮人は彼らに襲いかかった。

峻しき山、厳しき坂にさしかかっても

彼はその勢いを弛めることなく、

寧ろ東からの逆風を受けて

競つて動物を追い慣れた者らしく、

彼らを追い詰め、痛め、圧迫し、煩わせる。

そして十マイルの所に迫つた時、

海に注ぐ川が道を横切る辺りで、

その湿つた川岸に停止した。

夷狄の一隊は既に停止していたが、

頑固者のレンゴのみが執拗に戦っていた。

彼は自軍の者は一人も見かけなかったが

その企てを断念しなくなかつた。

疲れ切つた三人のキリスト教徒は

懸命に広い浅瀬を横切ろうとした。

この時レンゴが一箇の重い石を

使い慣れた石投げ繩に素早く取りつけた。

彼は上体を濕つた地面に固定し、

腕を二度回わして、突起せる

大きな石を、こうして投げると

丘にはその音が響き亘つた。

妖精たちは浅瀬の中央で

水晶の様な水を掻き混ぜながら

その金髪の頭を起こし、

じっと立ち止まって、事の成り行きを眺めた。

この招かれざる蛮人は

その意図する企てを止めず、

弛めもせずに、寧ろ口笛と

叫声と巨石とによって

腰まで水につかる三人を攻め立て急ぎ立て、

「さあ、外に出ろ、拙者が相手になるぞ」、

と言えば、彼らは慌てふためき、

馬に水を飲ませる暇もない。

かくも高慢なレンゴを見て

アルバラードは堪忍袋の緒を切らし

二人に向って言う、「おお何たる恥辱、

一人のインディオに我ら三人が追われ、

而もわれらが敗北を喫しようとは！

これぞイスパニア人と思わるるは口惜し、

いざ、引き返そう、ここよりは決して

先に行くまいぞ、先ず奴を殺めぬ限り。」

彼はこう述べると手綱を引き、

死ぬか、さもなくば彼を斃すかを標語に、

疲弊した馬に拍車をかけ

再び浅瀬を引き返した。

その時、アラウカ人は彼らが

怒りに燃えて引き返す様を見て

戦棍と計画を置き去りにして

翔ぶが如く、足を動かさせた。

長らく砂の上を走り、

三人は全力で彼を追った。

尤もこれは無駄骨であった、

何しろインディオは彼らよりも駿足だった。

気持に不足はなかったが活力に欠ける三人は

疲労困憊し、手綱を引き寄せた。

そしてとある険阻な個所にて三人は

あの元氣者の蛮人の顔を見た。

彼は背後に巨大な崖を控え

不敵に三人を掻き回し、

いつもの戦棍無き故、

しばしば投石綱を振り回した。

彼はそこから嘲笑と口笛と投石で

彼らを攻めたが、彼らは彼を攻め得なかった。

その場所が断崖であった上、

蛮人が彼らより駿足だったからである。

アルバラードは、かくも望んだ最期が

こうして免れたのを見て、

悔しがったに違いない。

かの威勢よき蛮人を放置して

今や安全となった浅瀬を再び渡り、

通い慣れた道に向って直行した。

彼らは運命の女神がこの様に万事、

彼らに逆様だったことを悲しんだ。

長い追跡に目を奪われて

私はラウタローの陣営から距っていた。

イスパニア人は、群を外れた羊の様に

道無き道を歩んでいた。

この辺で彼らの後を追うのは止める、

何れその機会は到来する筈。

今は只、彼らを、そっとして置きたい、

これまで何度かそうして来たように。

私は今や幸福と喜びの絶頂にある

アラウカの人びとに同行したい。

そして何時もの様に、敗北を喫し

不幸に沈む側から道を外らしたい。

踏み慣れた道を通って、常に大勢が

行く処へ、私も行きたい。

風習と時代が私を納得させ、

片や万人の認める様に「勝者万歳」^七だから。

打ち拉^{ひし}がれた者は逃れ

定めなき運命の女神の寵を得た

傲慢なる勝者がその後を追う。

だが彼らも倒されるのが世の常、

所詮この世の好運は言わば

次の歌章も示す通り、やがて

七倍にして支払わねばならぬ

貸り物の財産なのである。

第十歌章

アラウカ人は、勝利を手中に収めて思い上がり、国を
挙げての祝宴を催す。内外の様々な人が集まった。そし
て彼らの間で派手な試合が始まった。

掌も阻しき山となる。

栄光に取り囲まれ

異変の兆しの片鱗もなく

中天高き月の角に座せる

イスパニア人を見しや。

東の間に崩れ去りし彼らを見しや。

幸運転じて不運となり

血を呼ぶ神マルテによらずして

臆病なる女人に追われる彼らを見しや。

移り気なる女神が頬笑み

好運の贈物を施すときは

弱き心も流石に猛くなり

悲し気なる女子も軍神の如くなる。

又別な所では、雄々しき気力も

崩れ、^{ひる}怯み、弱まり

平坦なる地も上り坂となり、

かくも変り果てし運を見よ。

かの天を恐れる者ども、

糸取り棒に応わしき女どもが

男勝りの力を出して彼らを追撃したのだ。

家事に慣れたるその右手で

大胆に槍を振り回したのだ。

槍は順風に押されて

生々しい効果と傷を齎した。

これらの女たちは山中に潜み

戦の終りを待っていたが、

カステイリアの軍隊が

敗れ去るのを見て

天にも届く叫び声を上げ、

女としての恐れも捨てて下りて来た。

宛ら別人き如き勇気で武装し、

斃れし者たちの劔を奪う。

そして轟きと大軍とに加えて

勝利の味に陶醉した彼女らは

か弱くたおやかな姿から、

不敵なる殺人者へと変容する。

走れどその胸は平然として

苦しみを感じない。

八カ月の巨大な下腹部を抱える

妊りし女が彼女らよりも疾く走る。

最後になった女は身の不幸を歎き

天に向って祈願した、

かかる折にその走り方で

より早く足を動かせ得なかつた為である。

女たちでさえか様な状態であれば

野蛮なる荒くれ男は如何ばかりだったか。

この時よりこの国では

女性も戦に加わる習慣が生まれた。

彼女らは夫に付き添って現れ、

戦いの行方を見守る。

されど相手の敗北を見届けるや

懸命にその後を追う。

降伏した者を相手に、そのか弱き力を試し、

且つその劔の切れ味を試す。

そして様々な方法で死に到らしめる。

実に女人は残忍である。

かくて此の度は彼女らは

わが軍をかなり追跡した後、

すでに敵軍に荒された

村の方に引き返した。

彼女らは他に害を加える事がない時は

牧場に放たれて自由に歩む

馬に飛び乗り戯れ乍ら

所有者の真似事をした。

戦う素振りをする者、逃げる者、

逃げる者の後を追う者、

死んだふりをして地面に寝そべる者、

走ろうとして走れない者、

陽気な人たちはむずかしき仕事はさて置き

こうして楽しく時を過ごした。

やがて太陽が峰間にかかる頃、

将軍が大方の兵を揮いて到着した。

人びとは互いに走り寄り

堅く抱き合った。

だが幾人かは懸命に努めたが

羨望のために額に皺を寄せた。

勝者たちは大らかに振舞い

戦利品を愉しげに分け与えていた。

卑しき心も、その素性に反し、

運次第でか程の事をなし得るのだ。

カウポリカンはこの地にて、

アラウカ人の集りのうち

軍人だけのいるこの地にて

莊嚴なる視察の行われる事を望んだ。

かくて、一般大衆の介入なしに、

喜びと大満足の体で、彼らは

踊りや遊戯や楽しい行事で

数日間を愉快に過ごした。

遊戯と訓練が終ったとき

兵士たちはアラウコの盆地に向かった。

そこで彼らは恒例の祭礼のために

広く土地の人たちを招いた。

可成りの期間が定められ、

競技への参加者に応わしい賞として

勝利を収めた人たちのために

高価な宝石が提示された。

祭の噂は熱心なる

使者たちよりも早く走り

瞬く間に地元の人たちや

隣国の人たちの知る所となる。

大勢の人々が集まり

戦士たちの数も著しく増加し

異国人の天幕や谷や

丘や平原や河岸までも塞がった。

諸人の待ち望みし

第十四日目には、

不似合いな影は拭い去られ

野はその色を取り戻し、

生氣溢るる若者たちの

賑やかなる一隊が

情熱と新たなる血潮をたぎらせ

準備を整えて競技場に現れていた。

莊嚴にして華やかな雰囲気の中で

賞品の順位が告げられたが、第一位は

銀細工師の丹誠こめて作った

輝きわたる新月刀であった。

この賞品は最も優れた腕で

太く頑丈な槍を投げ

他者をその力にて引き離した者のため

与えられるものであった。

多彩なる高き羽毛で覆われ、

様々な細工の施された

純金の輪に囲まれた

輝く銀の面付き兜は

優れた戦士たちの中で

熾烈なる試合にて力の限りを尽くし

競技場の主として立ち通した人のため

贈られる見事な品物であった。

先の尖った金属の鋌のある

記し付きの首輪をはめた

猛き班の猟犬は、

完全武装したまま速かに

幾里もの彼方に揺れる

標識の旗の所まで

一番早く着いた者に

与えられる賞であった。

象眼細工の二箇の太い尾錠のある

巾広い上製の革帯に吊された

黄金の鍍金を施した箭付きの

芸術的なる弓の矢、

これは弓の試合にて

鸚鵡おうむの曲れる嘴を射当て

その巧妙さにて賞を得る者のために

示され、取って置かれた。

面繫おもがひの馬銜はみを嚙かんでいた

尾のみ白き黒駒は

自由に軽々と右腕の様に

戦棍を操る名手のための賞であり、

その審判員としてカウポリカンが指名された。

彼は全ゆる武術に長けていた。

早くも喇叭は響きも新たに

闘う両者を呼んでいた。

陽気な喇叭が鳴り終るや

既に位置に就いていた若者オロンページョは

威勢よた合羽を脱ぎ捨て、

均勢整える美しき肉体を見せ、

力強き右の手で大きな槍を

振り回していた。やがてこの間に

レポマンデ、クリーノ、ピジョルコ、

グワンボ、マレアンデが姿を現わす。

この六名は一行をなして走り乍ら

キリスト教徒と同じ槍を

右手で同時に揺さぶりながら

六つの呻きと共に投じた。

槍はその力に運ばれて

唸り声を上げて飛び行き

空気を突き破って空に昇り、

同じ勢で地面に落下する。

ピジョルコの槍が先ず始めに

力尽きて地面に着いた。

その次にグワンボの槍が、そして三番目は

レポマンデ、四番目がクリーノのもの、

五番目にマレアンデ、そして最後が

最も力強く、最も遠く飛んだ

力のある若者オロンページョのもの。

他の槍を五尋も抜いた。

これらの若者に続いて

強者と目される別の六名が槍を持った。

そして力の限りに遠くへ投げんと

努力はしたが達しなかった。

これに続いて更に六名が挑んだが

腑甲斐なき結果となった。

扱てこの話で足踏みしない為に言うが

百人以上がこれを試みた。

オロンページョの投げた地点の六尋手前まで

届く者さえ誰もいなかった。

遂にレウコトンという筋骨隆々の男が、

競技が緩むのを見て、大声で言った

「恐らく拙者は敗れるであろう、

だが皆の者が見守ってくれるので

この腕がどこまで可能か、わが星がどこまで

達するのを許してくれるか見てみたい。」

こう述べるや、槍を所望して

忽ち位置についた。

こうして軽く一投して

その堂々たる強さを証明した。

槍は推されて空中を

大いなる爆弾の如く、否

厚き雲を引き裂く

恐ろしき雷の如く飛んで行った。

槍は唸り乍ら飛び、前者の

印の線を四尋も越えた。

鉄は堅き地面を突き破り、

出ている柄の部分が長らく揺れる。

群衆は天を仰いで喚声を挙げ、

犇き合って駆け出し、

その投げ槍を見る、そして

射手の力の偉大さに感歎する。

或る者はその長い距離を歩幅で測り、

また槍の重さを測った。

或る者は感激し、この様に強い

腕力を羨ましがった。

或る者は賞品を身に行き、或る者は

レウコトンの名を讃え

大声で勝者のために

讃歌をうたった。

オロンページョは飛び上がって群衆を分け

腹立たしげに人声を押し止めて言った、

「拙者はまだ負けてはおらぬ、而も

唯一度の投擲^{とうてき}では優劣は決め難い。」

この時カウポリカンは官杖を差し延べ、

従兄弟に味方するトゥカペルと

レウコトンに組する他の者たちの

燃え盛る火を消し止める。

審判役のカウポリカンは

公平に、分別を以て振舞い

優しく、穏やかな言葉で

オロンページョの激情を素早く宥める。

この様にして、この件で互いの非難は止み、

規則に従って正当に

最も優れしレウコトンは腰に

曲れる新月刀を帯びることになった。

これに依って決着がつき

レウコトンが勝者と決まると

オロンページョは引き下がる。

彼はこの件で些か赤面しながらも

賢明なる若者らしくそれを隠し、

いつかもし何らかの新たな理由で

レウコトンと再会し

競い合う日の来ることを望んだ。

オロンページョは実に価値ある若者。

幼き頃より元気潑刺にして

且つ従順、丁寧、素直にして礼儀正しく

一旦事あれば勇ましかつた。

トゥカペルの従兄弟にして親友、

尊敬を集めるマウロパンデの子、という

その優れた血筋と努力故に

彼は土地の多くの人に好まれていた。

新たな沈黙が戻り、

競技場となった野原が広々となった時、

威勢のよい若者で技巧派のカジエグワンが

闘技のために入場した。

漸くして反対側から

準備を整えたトルキンが

力と機敏さを伺わせながら現れた。

両者とも何れ劣らぬ闘士だった。

合図と共に二人の凜々しき蛮人は

足どりも整然と、互いに動く、

時には接近し、時には離れ、

時には体を伸ばし、時にはそれを縮める

一方に、そして他方に、両者は慎重に

探り、近づき、調べ、払い、

試み、戻し、又戻し、互いに狙いを定め、

そして遂に激突する。

技が仕掛けられ、両者は身を縮めて

互いにその力を確かめ合う。

だが両者は怒りの火と燃え

闘技場の中を動き回る。

足と足が衝突し、からみ合い、

一方へ、そして他方へと攻め込む。

だが、懸命の努力にも拘らず

微塵も優劣の差は得られない。

かかる折に、素早く、慎重に

カジエグワーノは右脚を踏み込んだ。

トルキンは懸命にそれを捉えんとして

手に強き力を加える。

と同時に巧妙なカジエグワーノが

それを引けば、トルキンの五体は力無く、

自らの重みと力によって

相手の足許に横たわった。

彼に続いて強の者レンゴが登場する。

この男、着衣を脱ぎ捨てて

大きな凶体、頑丈な腕、

逞しき筋骨を露出する。

呆然として群衆は彼を眺める。

この勇ましき蛮人は

全員より選ばれた四人の一人で

これまでに一度も敗れたことがない。

大きく力強く肩を揺すり

戦いと挑戦の用意をする。

そして勝者たる相手を見届けると

意欲に充ち威勢よく彼を出迎える。

片側からカジエグワンが悠然と

競技場の中央に進み出る。

堂々たる二人は激突し

互いに優位を求めて争う。

観衆はしばし当惑し、

勝利の行方に疑問を抱いた。

だがやがてレンゴが明らかな兆しを見せた。

彼は力を發揮して

両の腕かいなで厳しく攻め立て

口を開いた憐れなカジエグワンを

息つく暇も与えず引き寄せ、

右に左に振り回わした。

彼は相手を持ち上げ、締めつけたまま

長い間宙吊りにする。

カジエグワンは色を失い、力無く

両腕を広げ、両脚を伸ばす。

勝利にのみ関心のあつた張り切り者の

レンゴは、相手の降参を見て

彼を難なく下ろし、

地面に力強く貼りつける。

気を失つた彼は場外に運び出され、

肩に担がれて彼の天幕に運ばれた。

一同はレンゴの大力と

試合ぶりを大声で讃えた。

だがこの時、騒音は止み、

一同は元の席に戻った。

準備を整えたタルコが

闘技場に現れていたからである。

このタルコは仕合い巧者だった。

厳いかつき体に猛き顔、

格闘技にも武技にも秀で、

高慢なれども身軽で活澆。

だが、こうした才能にも拘らず

鍛え抜かれたレンゴの方が

力において優っていた。

その体格が優位を物語っていた。

タルコは素早く進み出る。

レンゴはじつと身構える。

前者は技に自信を抱き

後者は力を頼みとする。

この時、レンゴは類希なる早業で

タルコの見せた隙を突き

さつとばかりに跳び上がり

不意に相手に襲いかかった。

慎重なる一匹の虎が

逞ましき豹の姿を認めるとき

首を下げ、悠長な面持ちで

嗷れ声を立て乍ら緩やかに歩み

やがて突然勢い激しく

豹に襲いかかり

爪を立てて抑えつけ

締めつけて制圧するにも似て

レンゴはタルコを掴み、

相手が防禦の姿勢を取る前に

猛烈な力で地面に抑えつけると

相手の背骨は折れて曲る。

この状態を見て彼は手を放し

相手の反撃を待つ。

彼はその並外れた力に満足し

競技場を出て自席に戻る。

だが居合わせた者の中には

敢えてその蛮人と張り合う勇氣はなかった。

こうして早くも夜が近づいたので

始められた競技は

翌日の車が新たな光で

野を喜ばせるまで延期となった。

やがて様々な楽器が鳴り響き

卓子の土台を膨ませた。

翌日、レオカンの息子が

父を伴い天幕を出て

楽隊の奏でる甲高き響きと共に

囲われた競技場に現れた。

レンゴはその名を更に広めんと

囲いの周りを一巡し乍ら

華麗なる仕ぐさで中に入り、

そして競技の姿勢を取った。

レンゴは延々二時間その場にいたが、

誰一人現れて拍手を浴びる者はなかった。

彼の姿を見てその空席を占めんとする

勇気のある戦士は見当らなかつた。

だがこれを見てレウコトンは、

自らの勇名を馳せんものと

最強の男の現れるのを待っていたが、

荘重な足取りで囲いの中に入った。

両者の対決するのを見て、

その気力と怪力を知り尽くす一同は、

騒然となり、どよめきが

噂高い大衆の間から起こった。

レウコトンは身を屈めて

レンゴを迎えんと前進する。

レンゴは堂々たる足どりで

遅しく、気力に溢れて相対した。

気力と力にかけて比類なき

この二人は意欲満々で競い合う。

或る時は速かに足を動かし

或る時は動きを抑え、

回り合い、用心深く睨み合い、

あらゆる策略に備える。

だが程なく両者は激突し

がっちり四つに組み合った。

両者は胸と胸を突き合わせ

最後の力を振りしぼる。

或る時は足を踏ん張り、体を合わせて倒れ、

或る時は投げ合って転がり、

或る時は左足が、或る時は右足が

からまり、巻き付き、力も

訓練も技も、両者の一方が優位となる

決め手とはならぬ。

互いの力は拮抗し、

あちこちで激しく転り合う。

左程に力を尽くし、呻き、喘げば

四肢は次第に弱まり、

疲れ切った膝は震え、よろめき

執拗なる激しさに耐え切れなくなる。

所詮は人間の骨と肉。

二人の蛮人は玉の汗と

大きな吐息に包まれていた。

そして火の如き激しい動きと共に

噎れた声は胸の奥で響いていた。

彼らは尚も燃え、

新たな力を発揮し、名誉と兜を

獲得するために、始められた企の

成就を期して努力した。

だが彼らの間には際立った優位も

劣勢の兆しも見当らなかつた。

二人の若者は共に花咲く年齢であり、

力と訓練にかけては同等だった。

だが、それまで女神に味方されていた

レンゴの運が傾き出した。

彼は賞品と名誉の権利をすべて

本意なくも失うことになった。

競技場の片側に窪みがあつた。

小石で塞がれていたが

競技と群衆の足により

その小石が外れていた。

疲れたレンゴはこれに気付かず、

そこに片足を突っ込み、不運にも

斧によって松の木が倒れる如く、

それに劣らぬ音を立て地面に倒れた。

恥ずかしむ心に理性を失い、

怒り狂って、空を脅かし乍ら

レンゴは跳び上がり、地面に着かぬ中に

レウコトンに激しく攻めかかった。

大地に跳ねる毬も、か程に

早く飛び上りはしないだろう。

高みから獲物目ざして舞い降りる鷲も

か程に素早く空に舞い上りはしないだろう。

かの烈しき格闘にて恐るべきアンテオが

恐れるアルシーデスに倒されし折、

母なる大地に抱かれて

力を回復し、氣力を倍加した如く、

怒れるレンゴは猛り狂い、

地面に触れるや否や

激しく相手に襲いかかり、

遂に強者として最高の名譽を得る。

公式の場たることに鑑み

彼はこの深刻なる状況を痛く悲しむ。

されば火と燃え、燃え盛る怒りに

力は次第に加わって行った。

そして、堪忍袋の緒を切らし、勢烈しく

レウコトンを追い詰めれば、

彼は辛うじて耐え得るのみ。扱てその

結末は次の歌章でお聴かせしたい。

第十一歌章

ここで祭と競技は終り、ラウタローはサンティアゴ市に向けて進軍する。そこに到着する以前に要塞を築くが、その時イスパニア軍が襲撃を加え、双方は激戦を交えた。

容易なる物となる。

未だ嘗て弱点の片鱗だに

示したことの無い人物が

大衆の面前で恥辱を舐める時ほど

持てる力の威大さを發揮するものはない。

疲弊せる手足も力を取り戻し

疲れと鈍さを追い払い、

嘗て困難と思えし物も

レンゴが正しくまさそうだった。倒れるや否や羞恥心が異常な力を齎し、

彼は怒りに充ち、憤に燃え、

力と勇気を倍増した。

そして以前はその強力なる敵手に

一步も優り得なかったのに

地面に立ち上った彼は今や百歩も抜きん出た。

彼は相手が地面に踏ん張る事も許さなかった。

もしも事の成り行きを心配して

カウポリカンの官杖を持つ

ピジャーノの息子が速かに下りて来、

二人を自ら引き分けなかったら

勢いは更に進み、あの野原に

何らかの騒ぎが起きていただろう。

あれ程燃え立つ中で、

彼に敬意を示したことは、流石だった。

高ぶる戦いもこの様にして

穏かに引き離されて、

レンゴはその名誉を回復した。

だが兜の権利は得られなかった、

まだ完全に判定が為された訳でもなく

競技場からも観衆は去ってはいなかった。

その時、若者オロンページョが素早く言った、

「今度は拙者の番、地位は拙者の物ぞ」

彼はレウコトンが待ち受けるのを見て

槍投げの時のことを忘れず

あの待望の時を今や遅しと

盛んに咆え立てていた。

彼は軽やかに、威勢よく

柵を跳び越え、場内に入る

そしてその中央に立って、

相手に一騎打ちを呼びかける。

一斉に群衆のどよめきが起った。

群衆は彼の様子に注目し、

勇者レウコトンに対してオロンページョが

如何に不満なるやを承知していた。

今にも戦いが開始される気配であるが

誰もそれを止めようとはしない。

寧ろ彼らのために場所を開け

各自は遠くに陣取った。

格闘を待ち望む群衆の

大方はオロページョに分ありと見た

その美しき手足、赤裸な姿の

堂々たる体躯、

風格、縮れ毛と端正なる容貌、

レウコトンの力に挑む

まだ二十歳に満たぬ

若さが一日瞭然であった。

片や堂々の身の丈と逞しい筋肉、

完熟せる齡と経験、

それとは異なる他方の体格、

軽快乍らも少年の如き若輩ぶりに

並居る人たちはその二人の力を

外から測り知ることが出来ない。

ただオロページョの大胆なる態度は

評判に逆うものではあったが。

彼は己が部処につき、

宛ら合図を待つ競争馬のように

気力に溢れ、誇らしげに

喇叭の響きを待っている。

恰も河岸の湿地の彼方に

白鷺の姿を認め

喜びながら爪を研ぎ

跳びかからんとする鷹の様であった。

凜々しきオロページョは、この様にして

行動を起こすための愉しき響きを待ったが

遅れに気付き、何らかの

支障の生ぜしものと想像した。が

その余りの遅さに業を煮やし

ならば此方からと一直線に

勢いよくレオコトンに向かつて行く

彼もまた迎撃を怠らなかつた。

騒めきも空しく大いなる沈黙に閉ざされ

並居る者は皆黙せる者となった。

広場の中央に二人の勇者が

一騎打ちに現れる。

恰も獵犬と猛きアラーノ種の犬が

虚ろに吠え乍ら歯を見せ合い、

首を硬ばらせ、眼を燃え立たせて

互いに激しく噛み合う時の様に。

両者は将に噛み合はんばかりに、

喇叭も介添人も待つことなく

勇氣と怨念に刺戟され

互いに半歩ずつ道を分ける。

と同時に一瞬の中に、力を尽し

狙いも巧に捉え合い

強力なる腕は互いに組み合い

節くれ立つ綱を足許に捨て、

同等なれど相反する二つの力が

彼らを運び、投げ、四方八方に引き戻す。

時には両者、一步も動かず

宛ら大地に釘づけされた様になる。

彼らが足を置くところ、

堅き地面は窪み、その印を残す。

二人は固く膝を合わせ、

体中の骨を軌ませる。

両者とも、厳しき相手の強固さと

類稀なる力を見、

かかる場合に用い得る

勇氣と手際と策を用いた。

二人は野原を狭しと動き回り

然も互いに優劣を認め兼ねた。

だが余りに歩き続けたため

両者は同時に地面に倒れた。

倒れる速さも速ければ

起き上がるのも亦速く

いかな目敏き者とても

瞬まはたきする間に見損じる程であつた。

されば、優劣の差は

その兆だに断じ得なかつた。

レウコトンは地面に膝を突き

オロンページョは僅かに片手をつきしのみ。

この時介添人が入場し

夫々に両者を引き離した。

両者は互いに己が長所と理由を

口にて争あらがい、結果を予告し合つた。

両側より群衆が駈け寄り

激論と騒ぎが高まつた。

片方に代価と名誉と栄光を誓う者がいれば

他方に勝利を賭ける者もいた。

ピジャーノの息子の左側の

座席に居りしトゥカペーロは

事の次第を見て、がばとばかり

場内に飛び入り、手に鉄の武器を持ち

日頃示せるかの大胆さでこの様に言う、

「賞品はわが従兄弟が戴いたぞ、

若しも異論のある奴は

拙者が物分りの悪さを思い知らせてやる。」

「宝物はオロンページョのものなるぞ、

拙者の言を否認する気力のある者は、

前に進み出よ、ここは闘技場なり。

拙者が挑戦し、その嘘をあは発いてやる。」

レウコトンは傲慢な口調でこう言う、

「拙者がお主のその狂気の勢いを弱めよう、

そして空威張りと愚にもつかぬ戯言を。

そは兼ねてより拙者の望みし事。」

「お主はこの拙者と果たし合うべきなり、

試合は既に始まっているからには」と

オロンページョが言った。レウコトンは

猛々しく、「お主とお主の従兄弟を相手にしたい。」

この時、一等高き座席にいた

カウポリカンが、それを見て、

当惑しつっ下りて来た。そして

全権を以て介入した。

偉大なるカウポリカンの出座を知り、

レウコトンとオロンページョは

激高せる声を抑え乍ら

各自の場所へと引き退る。

だがトゥカペルは、これ以外の

取り決めは望まぬとばかりに

悪魔の様な声を張り上げ、

戦棍を振り回して皆の者に戦いを挑む。

レオカンの息子や他の人々の

懇願も策も何ら益することなく、

彼はオロンページョに勝者としての、

最も勇ましき者としての兜を与うべしと言ひ

また両者の中の一人が命を失う事まで

論争に決着をつけるべく

広々とした囲いの中で

レウコトンと二人にさせよと言った。

カウポリカンは窮地に立ち、

怒に充ち、憤に駆られて

彼に言う、「余がそちに対し、余の人格と

職務に応わしき敬意を払わせようぞ」

トゥカペルは彼に答えて、「誓って言うが

恐れて志を捨てることはせぬ、

拙者の言に異論ある者は

力の限り何なりとするがよい。

「拙者の正当に求める権利を

保証して下さるなら、また正しく健全な心にて

この事の原因を私情なく考えて下さるなら

貴殿を尊敬仕る。

但し理に反し、唯事実のみにて

正義を曲げ、それを行われるなら、

地位高き貴殿に対してと雖も又何人に対しても

拙者の権利は毫も損なわれはしない。」

堪忍袋の緒を切らしたカウポリカンは

決然とトゥカペルの方に進み出る。

だが心配して常時彼の側にいた

経験豊かなコロコロが

恭々しく彼を引き止めて言った、

「殿、殿の権威と我らの安全を

お忘れになり、その右の手を

偶然に任せようとされるのですか。」

「御一考下さい、全てが懸っております、

大方の者は最早意見を異にしております、

トゥカペルの狂気と彼の一族の持つ力は

御存じの通りでございます。

正気の業にて改め得る事を

罪なき人々の血によって行つてはなりません。

件の賞品はオロンページョにお授け下さい、

そして等価の別の物をその相手に。

「もしも厳格にして血生臭き手段にて

他の者たちを危機に陥れようとなさるなら

たとえ運命の女神が揺ぎなき基盤に立ち

殿のお望み通りにその車輪を動かし

この若者の勢いと大胆さを

首尾よく懲らしめさせてくれようとも

殿はその力を更に減じ

遂には殿の権威も軽んじられましょう。

「わが国の境界を拓げ、

遙かなる猛き国々の民に

殿の名を恐れしめた二人の男、

二振りの太刀を殿は失われます。

如何にも今は不遜な振舞いを見せましたが

嘗ては重大な危機に臨んで

自らの血と敵軍の血を流して

役立ちし事をお考え下さい。」

老人の説得と熱意は

カウポリカンに感銘を与え、

彼は怒りを抑えて言った、「そちの手に

全てを委ね、忠告に耳を貸そう。」

この様な決意の下、老賢者は

道も手段も開かれたことに鑑み、

レウコトンと話せば、彼は万事同意し、

やがて従兄弟たちも同様に同意した。

かくして老人は手際よく彼らを諭したが、

これは斯様な不和と懸隔のある場合、

全世界を以てしても不可能であつたらう。

彼は分別と慎重さによって可能にした。

彼は二人を宥め、彼の望み通りに

するよう納得させた。

但し条件として面付き兜は

賞としてオロンページョに与えることにした。

見事な面付き兜が持ち出され

誇らしげなオロンページョに冠せられた。

同時に上等の金で飾られた革の陣羽織が

兜と共に持ち出され

レウコトンに着せられた。

一同は納得し、愉しき祭の

数ある食卓に腰を下ろし

互いの友情を固めていった。

食事が終り、食卓が片付けられると

彼らはその日の残された時間を

恒例の踏りの輪を組みながら

喜びと楽しみの中に過ごした。

そこには若者たちや着飾った

女性たちが大勢参加した。

競技と危険は去り、各自は

新たな問題を起さぬ様気を配った。

夜の闇が地平線を閉ざし

黒い影が世界を包み込む頃、

土地の名士たちが

昔の広場に集まり

戦に関する論議を行い

様々な計画を立てた。

彼らは蒙った被害は

血を以て償うべしと主張した。

必要な任務をピジャーノの息子に託し

且つ兵の数も彼によって

絶対的に指示されるべしという

結論に達した。

このアラウカ人の評判は極めて高く

その信用と名声は唯ならぬものがあつた。

されば仮に彼が天を誅すと誓おうとも

人々は彼を信用しただろう。

こうして優秀なる若者たちの中から

彼は五百名を選抜した。

威勢の良い、勇み肌の若者であり

何よりも勇まじさが身上であつた。

他にも多数の志願者があり、

数多の懇願と抗議と支援の声が上り

更に百名数を増やさねば

収まりがつかかなかつた。

ラウタローの選んだ士たちは

騒ぎを好み、強引で、

苛酷な仕事にも手馴れ、

邪悪で地墮落で暴れん坊で、

如何なる悪事にも勇み立ち、

獲物と儲けに敏感で

殺生で残忍で無謀で、

泥棒で追剥で海賊であった。

かかる見事な人々を揮いて

彼はマウレ河まで行き、平穩に横切り、

やがて通過する土地を

火と血によって制圧した。

全ては何の抵抗も無く平定され

彼の支配下に置かれた。

酋長たちは氣前よく、彼らに奉仕し

武器と兵糧、衣類と人手を提供する。

こうして蛮人たちは村や町を通り、

その地域を破壊する。

食料、家屋はおろか田畑まで荒すので

インディオたちは恐れて村を逃げる。

凌辱、姦淫と暴力の数々が

果てしもなく犯される。

年齢も身分も土地も考慮されない。

全ての物を危くする戦であった。

彼らは意欲に溢れ

わが軍との対決を恐れない。

人々の噂と騒ぎが巻き起こり

逃亡した地元のインディオたちが、

戦乱は更に拡大する模様という

悲しき知らせを町に齎す。

但し事態を目撃した者の中には

かかる知らせを信じぬ者もいた。

かくも僅かなる数の、

而も統一を欠く一隊が

彼らの地より か離れたる

この名だたる町に対して

左様な進軍を敢行せんと企てるは

将に狂気の沙汰なりと彼らは言う。

だがペンコを發つた人たちは

実害は騒ぎに優ると判断する。

いざ迎え撃たんと言う声がる

(これは勇ましき若者たちのもの)。

他の者たちは、峠や危険な個所もある故

そは無謀にして思慮なき事と言った。

迅速に防禦の策が万端整えられ

巧妙なる手段によって

町は要塞と化した。ある時点で一斉に

斥候兵が繰り出される。

熱心なる指揮者の下、

敵の人数とその意図についての

確かな情報を得んためである。

彼らは指令により、緊急の際は

名誉と護身のためなら

蛮人の隊を攻撃し、

直ちに報告すべく

早駆けにて帰着する手筈であった。

この件に関しては特記事項も無き故

唯、彼らが発した事のみを記すに止めたい。

その四日後、彼らは勇を鼓して

敵の領域で夜を明かした。

計略が巡らせられたが長くは続かなかつた。

蛮人たちに早速壊された為である。

こうして全員が注意深く、且つ軽い足取で

報告の材料を探し回った。

彼らは猛き蛮人共の力により

如何に打ち破られたかの

有力なる証拠を携えて

息せき切らせ、疲れ切つて帰着する。

彼らは血にまみれ、傷ついていた。

一人の兵が失われたが彼は

戦場のさ中で上官の命に背き、

ラウタローの手にかかつて落命した。

彼らは報告する。ラウタローが

部下の蛮人共と逃げ込む城壁を築いたこと、

無数の者が兵を志願し駈けつけたが

その中の最も器用で力持ちを彼が選んだこと、

また毎日の糧末と

多数の弾薬を集積したこと、

そしてこの他に、確かな事として

都市への襲撃の間近いことを。

この地までも来るとは無謀な事と

嘗ては信用せざりし者も

か程に明白なる証拠を前に信用した。

冷たき恐怖が彼らの血を凍らせた。

ラウタローの勇名を既に知り

只管歎き汗ばむ者あれば、

燃える勇士の胸を張り

その時よ早く来いと嘯く者もいた。

ビジャグランは若しや病を患いしか、

その時戦を続行すること能わず。

だが懇請と施しにより

土地の威勢よき人たちを動員し

身代りの主将として

親しき従兄弟を立てた。彼は

良き強者として応わしき一切を備えていた。

ペドロ・デ・ビジャグランという名であった。

彼は直ちに蛮人の

ラウタローを求めて出立した。

そして此の地まで攻め来る甚だしき狂気の

代価を支払わさんとした。

彼は道を急ぎ、程なく

クラロ河の河岸に達した。

この河は円形に大きく曲り

やがて一直線に海に注ぐ。

彼は蛮人の陣営より

小半レグワ離れた

最も都合のよい場所を選定し、

夜の模様を見んものと其処に留った。

彼は護衛兵や歩哨に囲まれ

如何なる危険や騒ぎにも備えていた。

折しも、如何なる事情か定かではなかったが

人びとが「武器だ、武器だ、警戒、警戒。」と叫んだ。

実はラウタローがわが兵の

到達を感知したのである。

彼は自らわが軍を確かめ

その数を数えた後、

何人にも悟られぬ様引き帰し

如何なる大事も無しと思う素振り

手許にいる馬のうちで

最も勢いのある若駒を放たしめ

大声で言った、「余の目に狂い無くば

敵は余がラウタローなる事を知らぬ筈。

彼らは相手の男により取り返しをつかぬ程の

大損害を蒙った。

だが余はここで見知らぬ者と思われぬ様、

また余が最も名高き者と気付かれるべく、

この馬にその知らせを託するのだ、

余には彼らが何人と戦いたいかわかっておる故に。

扱々、かれは過般の小競り合いにて

十頭の馬を手に入れたが、それには

最高の鞍と手綱がついていた。

確実なる知らせを持ち来るべく

放たれたる猛き馬は刺戟を得て、

先行馬の足跡と臭いを追って

イスパニアの陣営目指して疾駆する。

こは敵を慌てふためかす好機であった。

馬は唯ならぬ音と勢いで到来したため

武器を持つ彼らの手には一層力が籠った。

慎重なる人士も且は驚き

且は慌てて起き上がる。

その醜態もさることながら

僅か一頭の馬があのようにして

彼らに武器を取らしめ慌てしめた後の

嘲笑と遊興の様は一際凄じかった。

この為彼らは朝の新しき光の射すまで
まんじりともしなかった。

彼らは氣力を振り絞り

勝利か、さもなくば死かの固き決意で

いそいそと、陣営を發ち

アラウカの蛮人たちを目指す。

だがこちらもそれに劣らず

干戈を交える時を待ち望んでいた。

ラウタローは、城壁から一步たりとも

踏み出す者あらば、重大なる犯罪にして

反逆行為と見做し、有無を言わせず

即刻死を与える旨、布告していた。

従ってその恐れは大胆さを抑制し

如何に機会が挑発しようとも

従順の手綱は切れることなく、

その激しき力も許容の域を越えなかった。

蛮人は城壁で囲まれていた、

そして一人の兵士もその外に出なかった。

彼はわが軍の兵を閉じ込め、

原野での軽やかな馬の走りを

無益なものとなさせ、

唯気力と努力と沈着と

腕の力と精神の力のみとして

戦いの結果を一層確実なものにせんとした。

戦場での蛮人共の戦いぶりは

攻撃し、傷を負わせると同時に

背を向けて逃走するというものであった、

わが軍を内部に引き入れんが為であった。

唯若干の者が外部を放浪し

キリスト教徒らの気付かぬうちに

柵の扉を占領し、

その狭き場所で戦うのであった。

この様な計略を立ててインディオたちは

到来するイスパニア人を待っていた。

そして彼らが姿を現すのを見て、

甚だしい銅鑼声で挨拶し、

尊大な態度でイスパニア人を威嚇した。

大胆に不遜に、勇ましく。

或る者は太く長い槍を振り回し

或る者は鉄の戦棍を振り上げて。

闘牛場で牡牛たちの

もつと近くで闘うよう

観客が口笛や床板を鳴らせば

闘牛士は危険を知り乍らも敢えて闘い

研ぎすました鉄片を

大胆に振りかざして威嚇する様に、

アラウカの蛮人たちは

城壁からキリスト教徒たちを威嚇した。

イスパニア人はその攻略を

容易なるものと考え、

強力なる砦を占領せんと

一歩ずつ前進する。

そして「汝らの犯せし破廉恥なる行為故に

当然下さるべき死罪は城壁と

長槍と堅き戦棍を以てしても

免れ得るものに非ず」と大声で言う。

城塞より程無きところに到達するや

四方より十分に確認の上、

敵と相対し、曲る事なく真直に

濠を備えし堡壘を跳び越える。

この作戦が大方完了した頃、

蛮人たちの大多数は逃亡する。

大いなる栄光と共に開ける扉に達し

大声で勝利を祝う。

若しもインディオたちが

イスパニア人が扉を占領した一瞬ほどの

時を待ち得ていたなら

この満足ぶりに関する報告はあり得なかった。

インディオたちはイスパニア人が

何の苦もなく入城するのを見て、気が付いた。

彼らは、為すべからざる合図を行って

逃げ行く者共を戻らせた。

後方に居残る牝馬や

馴れた牧草の匂いを嗅いで

心が傾き、烈しき不在感にいななき、

呻きながら走り出し

足を弛めて耳を後方に傾け、

帰れの合図もないままに

主人の許可を待ち侘びつつ

既に踵を返し居る馬宛らに、

偽り乍らも、恐怖の表情で

逃げ行く蛮人たちは

愉しくも確かなる

見慣れし合図を認めて足取りも確かに、

一見降伏したやに見えたその劔を

生々しくわれわれに向けて振り乍ら

凄じい勢いで帰って来、

その音は大地を轟かせた。

宛ら風ぎ巨る大海の水面に

重々しき波が続き

激烈なる動きと共に

逆風俄に起こり

深い水底の砂を

濁れる渦となって引き上げ、

膨れたる波が混ぜ返し

激しき風に続くが如く

わが軍の兵士は

果てしなく追撃を加えていたが

思いもかけぬ急変に

勝利も歓喜も揺れ動いた。

かくて、何の配慮もなく

厳しき同じ道を引き返した、

衆寡敵せぬ相手に

必死の抵抗を試みながら。

だが名だたる大河が

堰を切り土手を越えて

道なき道に拡がり

倒せし木の幹を流し

奔流となって嘯き

行く手の一切を押し倒し

埋もれた堅き巖も

その激流に流されるように

インディオたちはその激しさで

わが軍を根こそぎにし

彼らの前に立つ者は皆

激流に運び去られた。

彼らは烈しい怒りと共に

やおら閉ざされた砦よりわが軍を放逐した。

一命を失うことへの恐怖心から

彼らは出口に轟き合った。

入りし時よりも更に足早に

イスパニア人は飛び出し

土埃にまみれ乍ら

柵の狭い囲いから去って行く。

彼らの間を暴れる蛮人どもが進み

互いに重ならんばかりとなって

一瞬を惜しんで懸命に

手足を傷つけ合った。

高き胸壁も、周辺に

掘られし穴凹も

強力な葛かすらで結ゆわえたる

丸太の砦も

鉄片の刺戟を受けた

駿馬の走りを止めはしなかった。

馬は助からんとして風に乗り

飛ぶが如くに平地に出た。

イスパニア人は止まらず走り

砦を敵軍に開け渡す。

彼らは好運に導かれて

足取りも軽快に彼らを苦しめる。

然るにわが軍は死を恐れ、

時折、反撃を加えながらも

敵の大勢力と怒りに

遠ざからんとして足を早める。

彼らは乾燥した砂地を

優に一レグワ走った。

ラウタローのみは、怒りと無念に充ち、

彼らを追わなかった。

戦場の統制の不十分な様を見て

彼は響きも高く角笛を吹く。

されば最前線に居る者もそれを聞き

走るのを止め、引き帰した。

彼の怒りと焦立ちは甚だしく、

何人も彼の顔を直視し得なかった。

彼は館に唯一人引き籠り、

新たな布先を公表せしめた。

即ちいかなる兵士も穴の外に

仮令イスパニア人が立ち戻り

千度砦を攻め立てんとも

一步たりとも出るべからず、と。

やがて彼は兵士たちを呼び集め、

燃える怒りを抑えて、穏やかに

彼らに言う、「友なる諸君、

もしもかかる少数にて、かの高き

城壁を崩さんと考えるなら、

その考えは誤なり。

今や猛き軍神の不敵さよりも

策略こそ力があり、吾に味方するものぞ。

「それは猛る心を抑え

弱者に気力を与えるもの。

服従を知らぬ首筋を抑えつけ

力によって飼い馴らすもの。

それは名誉を保ち損失を償い

用いる時期を吾人に強制する。

すなわち緻密なる策略と運命の女神は

肝胆相照らし一つとなるのだ。

「恐れて退却すると見せかけ

この地を去り、吾人が名誉と

戦場を見捨てしものとイスパニア人に思わせ

彼らに油断をさせるのだ。

やがて我らは然るべき時に立ち戻り、

彼らが平原を占有し、近き根城として

砦と化した都市を控え、吾人に不可能と

思える時、事を行うのだ。」

ピジャンの息子がこう言ったとき、

カステイリア軍の一隊が姿を現した。

彼らは気力も新たに、大胆に

二度目の挑戦を望んでいた。

平原にわが軍の現れるのを見た

蛮人どもの喜びは甚だしく、

早速大声を張り上げ

満足げに手を叩いた。

この時キリスト教徒たちは少しずつ

接近を試み、戦闘に着手する。

愈々開始の時到来するや

野蛮なる悪党共を立ち去らせる。

或る者は戦棍を高く振り上げ

或る者は槍先を下げ、城壁の中で

気力に充ちた裸体姿は

戦いの開始を促していた。

或る者は広き扉に駆けつけ

その場で激戦を開始する。

或る者は頭部を盾で十分に覆い

固く守る城壁に迫る。

或る者は露なる個所に

上り口と最も確かな通路を探す。

イスパニア軍は深き穴を充たし

アラウカ軍は城壁の周囲を充たす。

だがイスパニア人は大胆にも

頑丈限りなき盾に守られ

投石の雨にも耐え

鋭利なる投槍にも耐えた。

叫び声と響きと夥しい打撃の

連続はすさまじく、ために

マウレの川も辺りの騒音に当惑し

轟くその奔流を抑えた。

城壁の正面の扉と両側で

攻防戦が展開される。

最も危険と目される場所に

急ぎ足で奔る人たちが向う一方

素早く攻撃を加え乍ら

夫々に敵を撃退せしめる者もいる。

その勢いと力は唯ならず、

盾も武器も者の数ではない。

わが軍は射撃と打撃に妨げられ

三度の反撃に三度とも

屈辱感と怒りに駆られ乍ら

後退し、引き返した。

長い間、彼らは運命に抗った。

だが既に全員甚だしく傷を負い

瘠せ衰え、力無く、疲弊し、

血の気を失い、武器は朱に染まっていた。

勇気と怒りは著しく、

損害も残虐さも益々募る。

イスパニア人にとって要塞は

益々堅固、打撃は益々熾烈に見えてくる。

彼らは死を恐れず攻め立てるが

その勇猛ぶりも効果は少い。

最も傷の少ない者でも

六ヶ所からは血を流していたのだ。

激しい打撃や弓の矢や

絶え間なく雨と降る投石を

わが軍がよく耐え、

決然として、三度に亘り

攻撃を加える様を

蛮人たちは見て驚き、

これによつて焦れる敵は

拳を握りしめ、齒を喰いしぼる。

恰も嵐が鎮まるどころか

次第に勢を増し、

凍てつく石が屋根を打ち、

吹き荒ぶように、

頑強なる蛮人たちは

羞恥心に動かされて

槍と投げ槍と投石とで

円盾を、そして兜を急襲する。

疲れ切ったキリスト教徒は

この難事業に耐え切れず

空しき試みと不落の砦を

放棄して後退する。

彼らは自らの運勢の悪さを認め

破壊された原野を

来た時と同じ道を通り、

だが勢いは衰えたまま引き返した。

その夜、彼らはとある山麓に

野営することになった。

彼らを追う者は一人もなく、

平野は敵から安全であった。

小生今は元気なく、疲れ、声も渴れているので

後刻、ラウタローの稀に見る

慎重さについて述べてみたい。

その間、新たな歌章のために声を整えたい。

第十二歌章

ラウタローは砦に引き籠り、イスパニア人をあしらい、勝利のための深追いはしない。マルコス・ベアスが彼と話し合う。それにより、ペドロ・デ・ビジャグランは自分
分が危険な地点にいることを悟る。そこで彼は陣営を引き
き払って後退する。ペルーはシウダー・デ・ロス・レジェ
ス(三)にカニエーテ侯爵が着く。

危機孕む秘密を厳守するは

得難き美德であり、困難なる試練である。

如何にそれが健全、安全、有益なるやは

困難さが十分に証明している。

有害なる事を他言する無益の悪徳は

齎す成果少なく、不幸多し。

その一例はリビコ(三)を殺めし人たちであり、

それを他言して命を落せし人たちである。

今の世や過ぎにし時代の

残酷なる行為、崩壊、不運、

不名誉、犯せし罪への罰、

重大なる時の重大なる過失、

一命と地位の喪失は、

目と書物を通じて知ることができる。

総てはこれ分別により

秘密という危険なる荷に耐えざりし故なり。

悪徳の中で最も益するところ少く

最も大いなる外を齎すものは、

安易なる心故に、時至るまで

秘密を保ち得ざること。

それは遂には為されし一切を破壊し

謀はかりごとの持つ力を奪い、

戦と怒りとで和を燃え上らせ

己が主を、そして又、己が友を売り渡す。

されば賢明なるピジャーノの息子は

兵たちがあの日の勝利を追い続けて

平原に出る事のなき様戒めたる理由を

部下の者たちに秘めておいた。

そしてカステイリア人の退却した平原を

安全に、足早に通って

先にも述べた様に、怒を鎮め、

例の如く、町に帰り着く。

ラウタローが斯様な策を用いたのは

或る賢明な意図によるものと思われる。

その意図を推し測るに、

極めて重要且つ根拠のあるものに違いない。

この事は暫く措き、われらの本題に

立ち戻れば、彼らはその強力な陣地から

遠ざかり、その翌日、三レグワ程の処で

停止し、定着し、兵舎を設営した。

イスパニアの軍は二日間、

勇者を気取って、敵を待った。

だが蛮人たちは一向に現れなかった。

別の隊の者も姿を見せなかった。

遂にわが方の二人の兵が勇を鼓して

砦の偵察に向った。そして近くまで行くと、

城壁から大声で叫ぶ声を聞いた、

「こつちへ来い、身の安全は保証する。」

或る者にはその名を呼び

身の安全を約束した。

男は連れのを残して

大胆な声の主を確かめんとそこに向った。

イスパニア人は穴の近くに進んだ時、

声の主の誰なるやを知った。

堂々たるピジャーノの息子だった。

彼は暫し同胞の様に扱われた。

彼は磨き上げた胸甲を纏い、

兜の庇には金の飾りが付いていた。

鉄の石突きをついた

太い長槍に凭れていた。

その太い頑丈な鉄は朱に彩られ

槍の穂先半分は血に染まっていた。

端正な鋼鉄の兜は処々に穴が開き

凹みが出来ていた。

イスパニア人は彼に話しかけ、

判然と聞き分け得る所まで近づくと、

凜々しいラウタローが彼に言った、

「マルコス殿、貴殿には、

そしてお連れの方には全く、驚き申した。

御身らは浅はかにも、理性も脳味噌もなく

盲目的に拙者の考えを変えさせようと試み、

御身らだけで拙者を怒らせ得るとお考えの様じゃ。」

「その方らがわれらの土地に対しこの様に

横暴に振舞うは何故か、何に怒れるや、

汝らの幸福も不幸も、平和も戦も

すべては今、拙者の手中にあるを知らずや、

アラウカ人の名声と信用は

高ぶる者共の心を恐れしめ

世界の心胆を寒からしめ

武力も気力も打ち砕くを知らずや。

「各地において汝らは自己の土地を

守り抜く程強くはなかった。

その訳は、小鳥と雖も己が巢では

獅子にさえも立ち向かう道理だ。

扱々、小石で覆われしこの荒野で

汝らは最大の不安に襲われ

その相手は気力に溢れている今、

汝らは尚その旗を保たんとするのか。

「余の考える所、われわれに対抗し

耐えんとするは狂気、無謀の業なり。

技においても策においても、他の手段にても

汝らはわれわれに害を及ぼすことはできぬ。

もしも勇気の証として、敢えて望むなら、

汝らの蒙る害は、今ので十分である。

何故なら傷口は今も鮮血を流し、

草葉もそれに染まるのを余は知っているからだ。」

「余の誓いし通り、汝らを

追い詰めぬ、という言葉は撤回も可能である。

イスパニアの奥地までも汝らを追うと

余は大元老に約束したのだ。

但し汝らが若し時を失せず神妙にし、

汝らに命ぜられる事を行えば、

その約束と誓いを元に戻し、

汝らは滅亡を免れることになるう。

「左様な取り決めと交換に、毎年

汝らは三十人の若き女性を当方に引き渡す。

色白で金髪で美人で姿形よく、

年の頃は欺く事なく十五から二十まで、

彼女らはすべてイスパニア人たること。

更に緑色の上等の布地の合羽三十着、

と同じく三十着の、金の飾りのついた
上等の糸で織った紫の合羽。

「その他に、新しい

上等の馬具付きの、力強い、

飼い馴らされた、軽快な足の馬を十二頭、

手綱さばきのし易いもの、

更に狩に馴れた六匹の

威勢のよい獵犬が欲しい。

以上の貢物さえあらば、

世界と雖も阻み得ぬ事を阻む事になろう。

カステイリア人は熱心に聞き入り、

この話を楽しんでいたが

かかる言辭を聞くに及んで

もはやここに落ち着いてはおれなかった。

されば、苛立ち乍ら、蛮人の言を妨げ

こう述べた。「自惚れも程々にされよ、

おおラウタロー！其方の求むる貢物は、
やがて高価な代価となろうぞ。

「其方の狂気にも似る大胆ぶりの

代価としてイスパニア人は、

散々なる死と手荒き仕打を貢ぐであろう。

そしてアラウコの地を久遠の喪で覆うだろう。」

ラウタローは言った、「そは風に向って

話す様なもの。マルコス、論争はこれまで。

決めるのは舌ではなく、武力である。

力と勇気が決める筈。

「其方は安全を約されし人として

何なりと言うがよい、そして

後刻、出事得る事をすればよからう。

拙者は誓いし事を実行するのであるう。

例の事は然るべき時に始めることとし、

今は他の、楽しい話を致そう。

時間もある故、其の方にお見せ致そう、磨きのかかった騎馬隊で御座る。

「其方たちに安心させてはならじと

当方も馬を持つことに決定致した。

拙者は家来共に命じて

馬の扱いに馴れさせたい所存じゃ。」

ラウタローがこう言う

家来の六人の凛々しき若者に命じ

城壁より六頭の馬に跨らせて

彼の前を歩かせた。

号令と共に二つの橋が下り

馬に乗ったチルカンの部下の六人が現れた。

腕には絵塗りの巾広の盾を持ち、

手には斜に構えた太い槍を持っていた。

強力な鎖帷を纏い、頭は

アフリカ人風に手入れを施し

合羽は腰の辺まで垂らし、

両の腕は肘の辺まで袖がめくられていた。

彼等は堂々たる姿で

熱心に眺めるイスパニア人の前を二往復した。

だが彼の体もその顔も

微動だにする気配はなかった。

寧ろ高慢にして勇壮な身ぶりと

大きな声で、全員に分るように

(城壁には既に大勢の者が集まっていた)

ラウタローに対し、次の様に言った。

「おお、隊長、畜生を以て

我らを驚かさんとするは空しき試み。

拙者は其方の目にするものに毫も驚かぬ。

又、かかる誇示には些かも恐れはしない。

されば、拙者が其方の優位を恐れるや否やを

その六名を相手に示すこと示したい。

これにより、六千名にも十分と分るだろう。
速かに眼前に試合に現れるがよい。」

ラウタローはこれに答えて、「マルコスよ、
それ程までに其方の力と勇気を示して
死にたくば、其方の選ぶ最少の人数が、
其方の好む方法にて挑戦すべく
徒歩にて現れるであろう。

武器と場所は適当に選ぶがよい、
武器を用いて闘うもよし、
殴り、蹴り、引掻き、咬みつき合うもよし。」

イスパニア人は彼に言う、「断って置くが、この様な
場合、彼らに対し一人ずつ

罰を加えるのは、拙者の名誉が許さぬ。

蛮人が敢えて一人で闘技場に入り

拙者と一騎打ちを行いたいと

人々に決して言われたくはないのだ。

それ故、拙者の要求を拒むなら、
それ以外の果し合いは御免蒙る。」

この事で両者は一致を見るに至らなかった。
その後、他の事共につき論じ合い、
やがて別れの時が到来し、
二人はその蛮人に挨拶した。

彼らは自分の道に戻った時、呼び声を聞いた。
聞き覚えのある声に振り向くと
ラウタローであった。彼はこう呼びかけていた、
「一つ言うのを忘れておった。

「わが部下の者たちは必需品の欠乏のため
大いに悲しみ、苦しんでおる、
不当なる命令と管理の欠如故に

拙者には食糧が全く無い。

其方らが悉く掻き集めたが為である。

ここは一つ気前良く分けては下さらぬか。

身共に与えて欲しい。拙者の考えでは、
其方らの栄光と名誉を高めることになる筈だ。

「古来の習ならわしとして、優れし国では

良き兵士たちの間で守られるべき定めとして

敵に力となる者を食せしめ、

劔の力のみにて敵を圧すべしとある。

いま、拙者は分つて欲しいのだ。

其方が一層大いなる勝利のため食物を与え

その力を従えたと宣伝するは讃うべき事と。

「勇気の決して為し得ざりし事を

さもしき空腹が成したと言える程の

極端なる状況に敵が立ち至っている時、

果して真に勝つたと言い得るか、拙者は疑う。

屈従を知らぬ筋骨隆々の腕を

弱らせ、支配し、無能にさせ、

この様にして、下賤な方法により、

弱き者を強く見せるのが。」

陛下、実は彼の意図は、

その偽の困窮を本物と思わせ

わが兵の士気を煽って

故意にあの裏門を開けたのです。

こうして彼らを待ち受け、

慎重に巧んだ欺瞞の

待望の期限が到来するまで

奸計の秘密を守る為でした。

マルコスはその言葉に感動し

彼に言った、「そうする事を約束致す、

但し其方の申す理由によってのみですぞ、

申出での物を調達すべく全力を尽そう。」

こう言つて彼に別れを告げると

馬の手綱を引き、

彼とその連れれの者は、徒歩で

イスパニア軍の陣営に帰着した。

ラウタローがマルコスに言った事を

ビジャグランは全て聞き、

食糧を要請した事を知り

疑念を抱き、当惑し、且つ感心した。

彼は聡明で熱心で慎重だった。

素早く空想を回らし

その裏に秘む意図を察知し、

危険なる状態を理解する。

彼は速かに対策を決めると、

外界が最も暗くなるのを待ち、

危険に備えて喇叭を吹かずに

狡猾なる策略に感心し乍ら

安全なる町への道を進んで行く。

だがここで我が軍については暫し扱置き、

その前に、敵の見事な狡智と

新たな、珍しい欺瞞について述べてみたい。

新なる光の到来はまだ十分ではなかった。

その時、蛮人たちは、突然の

出発と退却を知り、

この戦いで、結局短期間の中に

キリスト教徒らの誰一人、今後槍を持ってぬ様

殺戮することの不可能なことが

明白となったのを見て

少なからず残念な表情をした。

山に囲まれたその場所は

低い、奥まった平地であった。

掘り開かれた多くの溝を

水が流れていた。

水源が破壊されれば、平地は

瞬く間に湖となり、沼地となる。

土は深く柔く水中に潜り、

窪み、ぬかるみ、海面の如くなる。

若しも溝が壊れれば、

原野は水びたしとなり

粘る泥水に足を取られて

馬も動けなくなるだろう。

彼らが若し待っていたら、

小鳥が鳥糞とりもちにかかる様に捕まるだろう。

既にラウタローは早手廻しに

策略を実行に移していた。

彼はその出発を悲しみ、残念がり乍ら

その同じ日に軍を見放し

アラウコへの道を

歩兵隊と共に直進する。

その悲しき胸中には

様々な事が去来したが、何れも

彼の求める慰めと弁明は無く、

独り考えに耽り乍ら嘆息して

こう言った、「何の容かんはせあつて

余はこの責を免れ得ようぞ、

余は重要な任務を果さんと

懸命に努めたのではなかったか。

全ては余の手により運ばれし事、

苦情は唯、己に対して述べ得るのみ。

僅か一年の間に、北の果から南の果まで

征服すると約せしはこの余であったか。

「かくも優れし者たちと共に居て

未だイスパニア人の城壁を見るに至らず、

月は既に三度、わが陣營の整わざる姿を

正面より眺め、

輝くファエトンの車は^四

蠍座より水瓶座へと移行した。

今に至って我が方は惨めにも

百人以上の兵を失い乍ら引き返すとは。

「若しも死に依りて

かかる恥に赤面せし事の証しが得られるなら

余はこの無益なる腕に、この槍にて

己が弱き心の臓を貫かせようものを。

されど若し敵に、この細き腕よりも

彼らの力強き腕を恐れたりと思わるるなら

余の恥は益々募り

敵の名譽は弥増すであらう。

「余は永遠なる地獄の如き力に誓う

(若し死に依りて一年以内に葬られざれば)

チリよりイスパニアの支配を駆逐し

全土を血で覆わんことを。

氣候の変化も、暑さも、厳しき冬も

戦の糸を断つことはできぬ。

而して深く暗きこの地にて

余を免れ得るイスパニア人は皆無なり。」

彼はまた厳かに誓った、

二度と再びわが家に帰らず、

水や太陽や夜気や風からも

身を守らず、氣に掛けもすまじと。

また世人がラウタローに就いて

彼は難事を企てるに常に勇氣を以てし、

名譽ある結末を与えたりと評するまで、

喜び事に興じはせぬと。

察するにこれにより彼のその

苦痛の紐は弛められた。

その時まで、苦痛は彼を厳しく締めつけ

將に正氣を失わしめんばかりだった。

この様にして猛きラウタローは歩み、

三日目の終りに、そしてその間にも

待望の時は近づいて来るのであるが、

海辺のとある平地で宿泊する。

そこは、山奥から勢い激しく

水量豊かに流れるイタタ河が

鬱蒼たる原野を

荘重に、静かに横切る辺りであった。

木々は満悦を誘い

風は優しく吹き

赤、青、白、黄色の

可憐なる花草と戯れる。

ペンコより正しく七レグワの所に

この快適にして肥沃なる土地はある。

豊かな土地で、戦う人々にとって

十分に耐え得る処。

東には間近に

大山脈と高い山々があり

そこよりイタタの奔流が勢よく

塩辛き海に貢物を送るべく流れ下りる。

一時、そこはイスパニア人の物であったが

彼らは運命の女神がこの国に与すと

思しきを見て

早くもその誓いし信念を捨て去っていた。

この国は二十二レグワに及び、

彼の領土だった。

彼の信用は絶大にて

国民は挙って彼を尊敬していた。

威勢よきイスパニア人を

彼は地面にまで下ろして賤しめ

嘗て身分低き、悲しき臆病者たちを

空に向かって起ち上らしめた。

されば力強き異国の民も

彼を恐れ、懸念を抱きつつ日を送る。

遙か彼方の異邦人たちは

降伏し、彼の定めに従う。

彼はこの国の精華たらんとして

この平地に、遅れ乍らも到着した。

蓋し喜びを待つ者にとっては遅く見え、

慶事を待たざる者にとっては早く思えるもの。

だが彼は時機を見計らい急拠

部下の勇敢なる蛮人どもを招集し

彼らが壮途に就く前に

次の様に言った。

「わが朋輩たち、他の何物をも省ず、

只管抱く戦意、余が諸君の中に見る

火の如き意欲こそ勝利の基ぞ。

若しこれを諸君が弁えるなら、

勝利は諸君の手中にありと

余は敢えて断言する。

また、仮令世界が束となりて余を襲おうとも

余は一步たりとも退きはしない。

「されど困難にして苦しき事は

気力のみにて克服できるものではない。

慎重さを欠く努力に何の利点があるうか、

我々には限られた力しかないのだ。

だがこの限られた力も

深き思慮と才智によって統べられる時、

非常なる困難をも

容易なものとなし得るのだ。

「散散に痛めつけられ、放逐され、

信用を失いし人を吾人は如何に多く見し事か。

それも全ては思慮なく敵の鉄に

大胆にも胸を張ったがためである。

そは勇氣とは呼び得ず、寧ろ

狂気の沙汰、愚かなる誤りと言えよう。

勇氣とは秩序に従うことにして、

狂気とは秩序なき勇敢さである。

「この度の大战において

並々ならぬ努力にも拘らず身を亡したのは、
吾人が何一つ見なかった為である。

只盲目的に欲望を追求した為である。

若しも我らが予期せる力を用い、

折角の好機を逸する事が無かりせば、

イスパニア人も、他の如何なる者も

好運の女神の微笑む所とはなり得なかった。

「もし敵軍が侵攻した折、

慎重に耐え忍んでいたら、

諸君の努力は讃えられたであろうに。

敵は一人も我々から免れ得なかったからである。

彼らは都市にて油断をしておった。

我々は時間と死によって消えることのない

一大快拳と好運に

恵まれたであろうに。

「だが余はここに、諸君に忠告したい、

諸君は行動に対しては慎重に、

且つ時機が到来し諸君を呼ぶまで

理性に基づいて自制すべきである。

而して余への従順を一步も逸脱してはならぬ。

諸君に命じぬ内に先走りしてはならぬ。

不従順にして無謀なる者に対しては

見せしめの為、未聞の罰を加えるであろう。

「扱、ここで我々の無秩序ぶりの為

我々の価値が僅かしか示されぬ点に

話を戻すでしょう。

まことに、余は右手を挙げて誓うが、

諸君は第一級の名譽を回復せねばならぬ。

さもなくば野には我らの血が流れ、

畜生どもの牧草として、

又汚れし猛禽の餌食として斃れねばならぬ。」

彼の演説はここで終った。

そして決起の喇叭が鳴り響き、

一同は新たな作戦の開始により、

例の如く足早に歩き始めた。

かくて、マタキーノを右にとり乍ら

とある入江の見え始めた頃、

道中に一人の蛮人が現れた。

男は町から来たと言われ彼らに告げた。

男は彼らに誓って言った。

マポチヨでは彼らの到来が知られていると。

風が彼らに知らせたのか、

将又目敏き間者の業か。

男は又こゝも告げた

町はすでに大量の食糧と

武器、弾薬などを準備し

防禦の態勢を整えていると。

ラウタローは事情を篤と確かめ

かかる小部隊にて事に当るは

無謀極まりなしと見て

それまで抱きし計画を変更する。

彼は直ちに大勢の者を集めんと考え、

盆地に築かれていた強力なる陣地を

才智と周到なる配慮の下に

新たに強化し始める。

彼が急拠陣地内に入り

且つその場所が濠や強力な壁に囲まれた

適切な場所であったため、

忽ちにして陣地は強化された。

この事が明らかになると

掠奪を待ち侘びる大勢が駆けつけた。

さて私はここから足早に去らねばならない。

わが町から大音響が聞こえて来たのである。

町には、ピジャーノの息子が

武装した老練の一隊を揮いて

激しく襲いかかるに違いないという

知らせが行き渡り、

突然の恐れがカステイリアの人たちを

警戒させ、混乱に陥れるが、

同時に、臆病で凍てつく血を

勇気が火の如く燃え上らせた。

勇者たちは武器を持ち

年老いて衰えた者たちは

有益な対策や忠言で応えて

弱点と思しき個所を修繕した。

やがて三十人の元気ある若者と

一人の才智長けた主将が

若干の味方の蛮人を連れて

索敵に出発する準備にかかった。

その頃、ピジャグランは、大騒ぎの

イスパニア人の町にはいなかった。

彼は既にアラウコの脇道を通って

インペリアルに出かけていた。

そして新たな部下を揮いて帰途につき、

蛮人たちが丸太や束柴で作った

城壁のすぐ近くに、

何も知らず一夜投宿した。

陽気で清々しい朝が訪れ、

彼らは再び旅を続けた。

そして途中、丘陵にさしかかった時、

土地の一蛮人に遭遇した。

その男は隣の平原の様子と

その理由を詳細に彼に知らせた。

その若者は掠奪目当てに来た者らしく

万事知り尽していた。

イスパニア人はインディオから
野蛮なる敵の決意する一切の事を、
また、如何にして人を集め、好機の
到来を待っているかを聞き及んだ。
カウテンの人たちはこれに驚かなかつた。
わが兵たちも近くに武装せる敵在りと知り
臆する事はなかつた。尤も敵は
まだ一日の行程の処まで至ってはいなかつた。

アラウカ族の石垣に達し得るや否や、
ビジャグランは彼に訊ねた。
インディオは微笑しつつ
その場所と準備された状況から
それを試すことは到底不可能と答えた。
背後は絶壁となつた岩山に
守られている為と、その辺で

城塞は閉ざされている為であつた。

ビジャグランは彼に言った、「余は
その方の報告に従うこととし、
高い山に道を切り開こう。
余は万難に対し敢えて冒険を試みたい。
それは扱て措き、ラウタローの地に
若し何時の夜か余を案内してくれるなら
その方に礼を取らせよう。
だが若し嘘をつけば火刑に処す。」

蛮人は恐れず、こう言う、「安全なれど
峻しき道を通り、一日以内に
その地にお連れすることを誓います。
手前の言葉に間違いはありません。
後はラウタローに気をつけるだけ。
また部下や友軍を連れられない方がよいでしょう。
そこに行かれるなら、全員を連れられない様に。」

これは、残酷な死を蒙らぬ為です。」

蛮人の戦士が抱かした恐れも

ビジャグランを動ぜしめる事はなかった。

蛮人は彼の恐れを知らぬ身の処し方に、

この話は本物なりと思つた。

そして後に続く町の人びとに

熱意ある使者を送り、

然るべく急いで、彼に

合流するよう告げさせた。

扱てその翌日、大勢の者が集まり、

蛮人の案内する道を進んで行つた。

彼らは暗闇の夜も

絶えず馬に拍車を掛けた。

何が起つたかは後で語ることにしたい。

今は、戦いに新たな力を添えるべく

この地を集つた人たちについて述べる為、

彼らの事は扱て措く方が良からう。

ここまで私の概略した事は、

陛下、私が直接目撃した事では御座居ませぬ。

従つて、疑わしい事については、片寄つた

通詞たちから聞くことを避け、

両者の側から同じ個所に就き知識を得ました。

而して正しく全ての人びとが

意見の一致を見、話すもののみを、

且つ全般に違ひの最も少いものを記します。

話を進める上で、約束致しますが、

益々権威のあるものとなる筈であります。

私の述べる事柄を証す物として

流された多くの血を私どもは目にします。

これよりは目撃者として述べ得るでしょう、

私は全ての作戦に加つていたのですから。

情熱で盲目になる事なく、感情的にならず、

事実を毫も損うことなく。

踏み進んだ土地の中、

わが足で測られなかったものはなく、

衝突や戦闘で負った傷の中、

私の言及しないものもない。

私が左程傷を負わなかったのは

自分の心が余りにも

見る事に熱中し、忙殺されたため、

腕が剣を忘れたからである。

乏しきわが才能と愚鈍なる筆にも拘らず

私が敢えて書くに至ったのは、

あの勇敢さが消え失せぬため、

又、時が不当にもそれを無にしないため。

己が賢明さを誇示せんとしたのだとは

賢明なる読者諸氏、夢思いませぬように。

何故なら確かに私は己が乏しさを、

己が頭脳の貧弱さを承知していますから。

私の蓄えの乏しさの十分なる印と

証拠がここに判然と残されています。

真実は、確かな物であるが故に

人為の衣を纏うことはないのです。

されど若しこの他に欠点があるなら、

その部分に、正確に且つ満足を

与えるようにという善意の意図を

見つけて下さる様、お願いします。

たとえ髭は顔中を覆うことなく

筆は大胆にも書き記さんとして、

名声を必要とする程であっても、

私の年齢に依るものではありません。

希はくば、陛下、私を動かす

正しき熱意と大義を御高覧下さり

これと併せて私の意志を御考慮賜わり

何らかの誤りあらば御寛容下さい。

ここで暫時、アラウコの事を措きたい。

私の話の都合で、ペルーの事について

扱わざるを得ないためである。尤もそこは

遙か遠方の地ではあるが。

扱て今後の事柄を一層簡単に

且つ容易に理解するために、

若しラウタローがそれを許せば、

彼に害を与えるべく進む人々の事を話そう。

偉大なるカルロス五世に遣わされ、

法律の監視と修復のため、

誉れ高き両王の都市に

カニエーテ侯爵^五が到着した。

この御方はその資質を買われ、

二人の副王が大胆なる反逆の

腕によって死に至らしめられし地の

副王に任せられた。

新しき副王は、習慣として導入された

諸々の情念と悪意、

忠誠という外観の中に織り交ぜられた

反逆心、侮辱、罵倒、

そして厚顔にも犯される

裏切り行為を嗅ぎ取り、

死して尚、新鮮にして悪臭を放たぬ

暴君^五の事を知り、

賢明にして用心深き男子に相応しく

短刀も、堅い鉄も見せる事なく^{じやうらい}入来した。

当時、それは危険な事であったらう。

鉄^{ジエロ}を著しき^{ジエロ}誤りに^五激突させる事となつたらう。

彼は善良で心優しき人として振舞い

やおら悪意に対する一步を踏み出し、

人びとを手なづけ、

正義に一層の手を貸すことになる。

彼は悪を一掃するために

万事処置を行う一方、

従来の裁判官を罷免し

自ら、全都市に新裁判官を置いた。

これらの人たちは、彼が

神を畏れ、王を畏れ、世界を畏れる

かかる任務に応わしき

優れた人格者と考えた人たちであった。

彼は民衆を愉しませ、

万遍なき分配により支えていた。

そして過去の政治に基づき

最も罪深き者にも、大いなる賞を期待せしめた。

侯爵はその間にも情報を得て

犯されし過ちに対し様々に処置を講じた。

即ち罪ある者を罰したのみならず、

罰を免れた居し者を有罪とした。

すなわち彼らの侮辱が時と共に

既に忘れ去られたと思えた時、

大々的な宣伝と共に改められ

罪状が明らかにされたのである。

罪を犯した町や村の大部分で、

暴君の側に立ち、且つ

その力を振った者たちは

夜明けと同時に死を迎えた。

陛下、死者たちを悪し様には申しません。

かつて陛下に御奉仕すべく馳せ参じ

肝心なる時に恭順を示し、

立派に許され認められた人だったのです。

そして彼らの犯した大いなる過は

陛下の寛大なる慈悲心に委ねられています。

彼らを裁くのは、又彼らを救い、或いは

刑を告げるのは陛下のみ為し得る事です。

この件に関し、勝手な判断は差控えます。

面目に係る事には、常に憚る事にして居ます。

唯、侯爵が当時としては厳しい罰により、

無礼なる者に稀に見る恐怖を与えた事に触れ、

無謀にして想像するだに危険な

如何はしき出来事に

呆然となり、困惑した王国については

述べない事に致します。

明確に有罪と認められた者は

罰としてペルーから追放された。

これは彼らの間では最も酷な罰であり

最も耐え難いものである。

正しくて、模範的で、平凡な生活を営む者も

既に鞘から抜き放たれた

恐れる正義の刃の厳しさに

自らの良心を恐る恐る詮索する。

戦いで輝かしい働きぶりを見せ

現地での判断に従い

幾莫かの褒賞を期待していた

隊長や兵士たちまで

反逆者の疑いをかけられ

捕虜として土地を追われ

至高の権力を有する国王の手に

判断が委ねられる。

この事は人々を一層驚かせた。

追放の原因が明らかでないため

その処置が正当なるや否や分らない。

分っている事は唯、黙す事と震える事のみ。

人々は怒りと厳しさを恐れるが

その理由を敢えて詮索はしない。

如何なる噂にも耳を聳てるが

聴き取れるのは雑音のみ。

恐怖と沈黙と混乱が横行した。

人びとは呆然として考えこんでいた。

何人も秘められし原因を尋ねなかつた。

尋ねる事さえ間違ひと思われた。

人々は互いに知ろうとして顔を見合わせた、

だが町一番の物知りも肩をすぼめた、

偶然に触発されるやも知れぬ

怒りの一撃を恐れたためである。

それは極めて賢明で偉大で大胆な事だったため

人より先んじる者は少なかった。

それは当時相当に賞賛され

自由な心を抱く人士に重視された。

これによりペルーは恐れられ

大胆で反逆的で尊大となり、

正義への最も確かな第一歩を踏み出し、

未来への希望が膨らんだ。

彼はこうして、ペルーを

轡をはめ手綱を引いて制御し、

野心家や不穏なる分子をして

己が財に満足せしめた。

そして彼らの騒々しき欲望を

新たに鎮め、改修した。

経験の教える通り、結局、

据りの悪き物は長続きはしない。

嘗て二万乃至三万ペソの収入で

満足するとは到底思えざりし者を

生命さえあらばそれにて満足と

その考えを転換せしめ、その後、

侯爵は功績著しき人々の間に

分配を行い、

落膽せし人々を励まし

不埒なる者共を懲らしめた。

かかる手本や処置にも拘らず

かくも数多の道を過れる者を見るは何故か。

彼らは砂上に或いは脆き地盤に

樓閣を建てている。

その脆弱なる基礎は明白である。

彼らがその名声を穢し、

儂くも地上に崩れる様を吾人は見、

彼らの汚れから逃れる。

おお、空しき過ちよ！無知なる心にて

危険なる峠に差しかかり、

他者の犠牲を見て他山の石とせず、

先行く者の足取りを見ず

只当惑する愚鈍なる者よ！

最も忠実なるべき友の腕が

自身の罪の言い訳にわが血を流し

その場で罪の劔を洗うのが見えぬとは。

私は彼が暫時、裏切り者共の肩に

担がれているそぶりをする様望む。

何故なら突然巻き起こる筈の強風が

彼を苦しめ、驚かせ、あの音を掻き乱すから。

蓋し国王の声の聞えるとき、

か程に耳に抗う音は無い。

その御名のみにも多大の力を有し、

彼の筋骨を抑えつけ、押し壊すからである。

運命の女神が彼に何らかの満足を

望見せしめん事を。あの疑心、あの不快感、

あのかくも慎み深く悲しい生き様は

如何に多くの味気無さと混っていることか。

彼は絶えず苛酷な死を呑み込んでいる。

最も信頼すべき人が恐れられる。

嘗て自由にして保護されていた生命も

今や不慮の力に抑えられている。

国王に対する報恩と忠節を拒み

最も低劣なる兵士に従い

甚だしく畏み、心を用いて

その男を喜ばさんと汲々とする。

目の前では最も親しき友ながら

その脇腹に槍を突きつける

そして頭上には千本の劔が並び、

彼を脅かしている。

暴君に対しても信頼は置かぬだろう。

彼等はいくも早く亡びし

汚名に相応しき人びとの

穢らわしき役割や住居、

党や家や損われた血筋を

見るのみにては事足りぬとも、

吾人は国王と王子に対し奉り

生まれながらにして抱く

義務感だけで十分である。

微かな音も、密やかな声も彼を驚かせ、

一寸した隠し事も彼を拒む物と考える。

若しも誰かが片腕を動かし上げれば

憐れなその男は、自分を殺すためだと考える。

喉に紐がかかり、縄で引かれると言うのに

如何なる信頼感が彼を安堵させ得ようか。

国王に対し否定的な男は

私はこれまでの考えや事柄から外れ、

別な道へと向かっている。

されどたとえ案内人無く険阻を極める道を

盲目的に歩めども

恐れる軍神の凄まじい音が

正しい道へと歩ませてくれるだろう。

私はこの事を固く信じ、

疲れを取るため敢えて憩いを求めたい。

第十三歌章

カニエーテ侯爵がペルーにて懲罰を加えていた時、チリから副王に救援を求めて使者が到着する。副王はその要請が重要で且つ正当なものと考え、直ちに海陸から大軍を派遣する。なお、本歌章の最後には、フランシスコ・デ・ビジャグランがインディオの案内で、ラウタローを急襲する件も含まれる。

危険に身を投じ、而も

汚れなく其処より脱出し

罪を負わずに済む人こそ

誠に幸運な人と言えるだろう。

然しその危険を免れ得る人こそ更に幸運な人ではなからうか。

危険を冒してこそ完璧ありとは言え、それから離れる人は分別がある。

空想により、我々はしばしば

安全を確かな物と思い、

首尾よく脱出できると思い勝ちである。

そこで大胆にも、それに向って突進する。

やがて危険の中で錯乱し、

突入箇所から抜け出し得ない。

奴隷に屈服せしめられた女主人は、
抜け出す力も、理性も失うものである。

諸氏はペルーに例を見るだろう。

人々は暴君を担ぎ上げ、支援したが

反乱の後に残されたものは、唯、

彼を倒すという裏切りの忠誠心であった。

そして邪悪な意図と気力で

彼に力を与えたが、やがて

国王や友人に対して不義を働いた

悪と裏切りの劔が

彼を殺すことになる。

彼らは戦を画策し、不和を煽り

偽の忠誠の衣を纏い、

阻しく躓き易い近道を通り、

より多くの階段を上ろうと考えた。

遂にその悪辣なる意図は

この土地の内戦と騒動の様子を

よく観察すれば、諸氏にもお分りの通り、

いとも惨めで不名誉な結末を迎える。

侯爵の英断と慎重さにより

こうして霧は晴れ渡り、

国王の御名の下に、

不穏なる分子を厳しく正し、

痛みがよく解る人として

悪臭に染っていた人たちには

厳しさの下に隠されていた慈悲を示し、

広く彼らの罪を赦免した。

爾来、ペルーでは絶えて

驚愕すべき大事件は起らなかった。

猛り狂う激しき国民を宥めた

あの厳格且つ模範的懲罰も

その頃起っていた蛮人共の騒ぎと

各地に広がるアラウカ人の
叫びとその名声を
黙らせるだけの力はなかった。

強力なる蛮人アラウカ族の
大勝利の知らせと、出撃による
我が兵の損害と喪失の報告が
陸と海から齎されていた。
困惑する町や村は
速かにして十分なる救援を求め
生じつつある事態について
詳細に報告した。

統治を委任されていた
前線総督ヘロニモ・アルデレーテは
当地では高名の人物であり、
信頼すべき大人物と思われていた。
彼は嘗て気力ある兵士として

様々な苦勞を経験した人であった
―彼の処刑に関しては記述を憚りたい。
歴史書が記録するだろうから―。

今はさしたる戦もなく
甚だしき不幸や逆境にはないが、
偉大なるフェリーペ陛下、
英国にて新たななる信仰の基を築かれ給いし折、
陛下は彼にこの地の任務をお与えになり、
その地より親しく派遣されました。
然し苛酷なる運命が彼の人生の糸を
途半ばにして断ち切ったのです。

彼の死は涙と共に悲しまれ、
統卒が失われ、人は思いの俣に振舞い
領土が失われるに至って、
その悲しみは一際募った。
既に不和の焰は燃え上がり

権力への野望が渦巻いていた。
所詮、胴体と頭が離れたまま
生きることは有り得ない。

必須の援助を求めて

チリより馳せつけた人たちは

彼らの総督の死を知り

万事が彼らの意図に反するのを見て

悲嘆と苦悩の表情も露わに、

全員の自発的な意図で

ドン・ウルタードに対し速かに

その対策を願ひ出る。

彼らは言う、「令名高き優れし御方、

先刻御承知の通り、私共は窮地に陥り、

而して強力なる夷狄の軍は

チリを著しき困難に陥れております。

これに対する最も有力なる策は人員の派遣、

御承知の通り、これは極めて高くつきます。
国王陛下に尽くす者として、お願いします。
私共の頼みをどうか適えて下さい。

「侯爵様、大いなる美德と品格を備えた

閣下の御子息をお願い致します。

私共はその御方により、

不運と不幸の終る事を信じております。

閣下、私共はその御方の人柄に満足です。

何故なら、自明の事として周知の通り、

又当地で古来下世話に申す通り、

獅子より羊は生まれぬ道理であります故。

「私共には兵士の不足が著しき故、

ドン・ガルシアが御加勢下されば

下々の者も騎士たちも、優れし指南を得て

喜々として行動する事で御座いましょう。

黄金の山を以て為し得ぬことを、

愛と、よき伴侶とが為し得るでしょう。
それは閣下を憤らせる事への羞恥と恐れか、
閣下を喜ばせようとする彼らの心の表れです。」

カニエーテ侯は、妥当至極なる要請に

快く返答し、事は必要にして

且つ好都合なることを承知し

喜んでその要請に応じた。

彼はその子息と財産と親類の者を提供し、

彼の地に渡り、武器を用いて

戦を交えんとする大いなる意欲を

早速、全員に周知させた。

或る者はその場にて志願し、他の者も

次々と申し出で、大勢の者が動員された。

その様に振舞わぬ者は義務に反くか

それを履行せぬ者に思えてくる。

遂には疲れた老人まで

若い情熱で再び生氣を取り戻し
細った体液と凍てつく程の血も
出陣の陽気な響きに騒ぎ立つ。

おお、勇氣を誇るアラウカの兵共よ、

武器と心を備えるがよい、

そして南極の地にて恐れられている

汝らの手の、その類稀なる勇氣とを。

何故なら、意気盛んなる数多の若者が

汝らを撃たんと、軍旗を翻しながら

汝らの地に隅なく浸透し、

夥しき害を与えんと考えているからだ。

壁面を均す職人の用いる

先の丸い、錆びた鉄で以てではなく、

又非常な疲れに覆われた

鈍く怠墮な腕でもなく、

又如何なる僅な変化に遭遇しても

気が変り、困惑し、鈍り

又聞慣れぬ音に意気消沈する

役立たずの気力で以てでもなく、

寧ろ鍛え抜かれた、鋭い

暴君共の血で研ぎすまされた鉄、

必殺の打撃のために錬磨された

頑丈で筋骨隆々の強い腕、

他の者なら苦しむ恐ろしき音も

彼らを喜ばせ、目覚めさせ、育て上げる

如何なる危険にも慣れた

恐れを知らぬ、赤裸な気力。

思うに、これらの中の如何なる物も

汝らの今の状態を崩すことは出来ぬ。

されど唯一つ、疑念を抱かせる物がある。

何人もそれを免れ得ざる物。

乃ち運命の女神の動きであり、彼女は

これまで汝らに陽気な顔を見せてきたが、

したたかなる浮気者であり、変り易く、

不幸にあつては腰を据え、好事には尻軽。

扱てここで借問したい、

若しもイスパニア人がその誇らかな劔で

戦を挑まんとするなら、

その劔は汝らの物よりも鋭利なりやと。

仮にその腕の力がその常勝の右手から

力と安全を保つとしても。

過去の事を具に考えれば、

彼らの屍で原野が埋まるは必定。

私は知らず。だが一見して、

住民は尊大にして戦意に燃えている。

一方、武器を持ち、上等の武器を纏った

意欲に充ちたイスパニア人がいと淋し気だ。

おお、アラウコよ、私は汝を敗者と見る。

若しも作戦が突然牛追いの如くなり
その勇猛ぶりが途中弛むこと無くば
汝の増長と威張れる態度の末路や哀れなり。

この戦に臨むべく

遙かキトの地より動員が為された。
ロハ、ピウラ、ハエンから出征し、
トゥルヒージョ、グワヌコと地元から、
グワマンガ、アレキーパから大勢集った。
又山岳地帯の諸都市としては
ラ・パス、クスコとチャルカスから
百戦錬磨の兵たちが大挙下りて来た。

解放された反逆者共に対する

笛、太鼓、喇叭の
慌だしく響き渡る
大音響と雑踏と騒ぎに
大地は震え、脹らむ海は嘯く。

彼らは補強整った砲兵隊を擁し
早くも防禦の敵軍を威嚇し、
その音は国中に聞えていた。

凛々しき兵士たちは

武器や馬具や附属品で身を飾り、
軍帽の庇と装身具、新にして
極めて高価な意匠を施していた。
軍旗と様々な旗と幟が
町角ごとに風に靡いていた。
仕立屋職人たちが縫製や
浮彫り刺繍に忙殺される様の凄じき事。

戦士たちの集合と共に

騒音と雑踏もその度を加え、
気忙しく動く鍛冶屋の鎚が
硬く疎雑なる音を立てていた。
仕事に励む武器屋たちの声が

広々とした辺りの空気を引き裂き

威勢のよい馬が誇らかに嘶き

前脚で大地を蹴っていた。

この様にして新なる戦の為に

人々の心は騒ぎ、落ち着かなかつた。

だが重要な準備も大旨整った頃、

一人の隊長が託された大勢を連れて

陸路、その姿を見せた。

彼は荒漠たる海岸に接する

夷狄の骨の散在するアタカマと

高い山々を越えて来た。

準備の整った主力兵士と

陣営の残余の者たちは

立ち騒ぐ海を分け進むべく

一途、その時を待っていた。

やがて空の晴れ渡るのを見、

荒波の鎮まるのを見て

彼らは整然と、且つ堂々と

正午過ぎにロス・レージェスを発った。

不肖、私も彼らと共に陛下にお仕えし、

一命を託すことと相成った。

英国にてその職にありし砌、

未だ帯刀を許されぬ身であったが、

そこに、陛下に服まつらわぬ

アラウカ人の犯せし不心得と

王冠に刃向う者たちの

不遜なる行為の知らせが届いた。

されば陛下の御許しを得て、新たに

前線総督となりし御方に伴い

ロンドンよりタバガタバガに赴いた。

その地にて総督は薨り葬られた。

その地より努力と執念を以て、

身を運命の女神と風に委ねて
将にかの輝かしき人々と共に出征すべく、
彼の地に到着致した。

我らに劣らず必要な

今一つの味方の一団があった。

性格温厚にして控え目なる人たち、

僧侶、司教代理、警官、

正直で真面目な神学者たち、

フランシスコ、ドミニコ、メルセダリオの

会員、とりわけその地にて

戦の暴力の回避に努める人びとである。

種々雑多な職業と皮膚の色の

輝かしき一団がリマを出発する。

港には芳しき葡萄酒を添えた

卓子が草花の間に並べられ

食物が山と盛られていた。

夫々の隊が次々と到り、
緑なす芝に横たわり、そして
我々は美味なる食事を楽しんだ。

我々は満腹感を覚えながら

軍船へと導かれて行った。

船は緑なす草木の小枝や飾りで

華やかに彩られていた。

様々な楽器の音色と

親愛なる輩ともがらに見送られて

我々は小舟に乗り込み、

直ちに力強く沖に向けて櫓を漕いだ。

砂浜に居残る人たちを

心苦しさと羨望の念で眺め乍ら

彼らから片時も目を離さず、

小舟は陸地を遠ざかって行った。

十隻のガレオン船に

足早の小舟が着き、一同が乗り移ると
水夫たちは時を移さず
風に向かって帆を張った。

十雙の船は、軍旗と様々な旗と

三角旗で飾られていた。

船は前檣で涼風を切り乍ら

悠々と動き始める。

大砲とサクレ砲と小鷹砲が轟き、

小島を折れる時、南からの風を受け、

船は左舷に帆綱を絞り

南南西に進路をとる。

船は逆巻く波を切って、

辺りに白波を立てた。

そして南の風に抗ったが、

如何せん、陸地の方に押しやられた。

然し西南の風に乗り、

大山脈から遠ざかり

一度の方向転換により

グワルコを回り、その北東に出た。

されど我々は間もなく

チンチャと並び乍ら、グワルコを船尾に見た。

沖合では、これらに続き

肥沃なるナスカに達した。

そしてこの自然の只ならぬ力も

物足りぬ氣に吹く

南風の烈しさと荒波に

我々は懸命に立ち向かった。

ペルーは何と不思議な土地。

僅か三レグワ距るのみで、状況が急変する。

平原では夏と言うのに、

山脈は雨降る冬。

そして濃霧が平原を覆う時、

太陽は裸な山脈を傷つける。

か様な理由から、夏は

大量の水が分水嶺を駆け降りる。

風の中の王は南風。

湿った雲を粉々に砕き、

海全体を悠々潤歩し、

雲は海より永久に追放される。

その他の風はアタカマの辺りに君臨し、

その地にて解放される為、

ペルーに到るものは一つだに無く、

自然の定めにより、許されない。

艦隊は南風と闘い乍ら

泡立つ波濤を切り進む。

波は強風に押されて

金属の板で守られた高い舳先を襲い、

そこで勢烈しく砕け散る…

だが私はここで、目を

夷狄に近づくとイスパニア人に向け乍ら

先を急がねばならない。

先ずはビジャグランの処に駆けつけよう。

彼は雲と高さを競う

険阻な山を越えて

陸路、作戦に赴いていた。

この戦闘で何が起こったか、又運命の

女神は誰に微笑んだかを記してみたい。

だが全体の状況を明さんが為、

些かラウタローの事に触れたい。

彼は先述の通り、戦士たちと共に

とある奥地に控えていた。

其処は濠や東柴や丸太で

短期間に築かれた要塞であった。

内部には彼の名声に駆られて集った

他地区の兵士たちがいた。

又、一大事に備えて、

修理の品や食糧などが置かれていた。

この地には、警戒する歩哨たちの屯する

細道が一筋あるのみであり、

その他にはその気配すら無く、

宛ら無人の地を思わせた。

あの夜、件の蛮人は恋人の

美しきグワコルダと眠っていた。

彼は彼女を熱愛し、

彼女も劣らず身を焦がしていた。

そのアラウカ人は、邪悪なる

軍神マルスの服を脱いでいた。

厳しき運命の神も、あの夜だけは

彼に休息の手段と意欲を与えていた。

重い眠気が彼の目を閉じ、

やがてその眠りから苦し気に目を覚ますと

美しきグワコルダは痛く気遣い、

彼にその理由と思いを尋ねる。

ラウタローは答えて言う。「愛する人よ、

俺は今し方、尊大なるイスパニア人が一人、

いとも猛々しき様子をして

我が眼前に立てる夢を見た。

彼は手荒くこの俺の心臓を抑えつけ、

俺は勇気を發揮出来なかった。

この事で俺は怒りと

苦しみを味わったのだ。」

彼女はこの時取り乱して声を挙げた、

「ああ、私も、仕合せを脅かす

恐ろしい夢を見ました。貴方の最後と

私の涙の始まりが訪れた夢。

されどそれはあり得ぬこと。

運命の女神も私に対し、
死によってその道を閉ざしめる程
残酷な筈はありません。

「私にその恐ろしさを示そうとし、
楽しい寢床から私を引き離そうとし、
あらゆる事を企もうとも、貴方から
私を引き離す力は無いでしょう。
私の想像する打撃は耐え難い物ですが
他の物で、忽ちそれを治癒できます。
仮令私の体は亡び、地面に倒れようと、
貴方の体が冷たく斃れる事はないでしょう。」

ピジャンの息子は、その両の腕の
短き紐を彼女の首に巻きつけた。
白き胸は涙を浴びていた。
新たな愛に燃えて、彼は答えた、

「愛しき人よ、真実の事と考えてはならぬ、

兆候によってこの喜びを、
この嬉しい今の気分を乱さないで欲しい。
余は今、そなたを自由にこの腕に抱いているのだから。」

「そなたが空想に惑わされるとは残念。
余がわが身を危険と見るが故には非ず、
我らの恋がかくも生々と芽生え、為に
有り得ぬ事にも余は疑い深くなりし故だ。
そなたが余に生きていて欲しいと思うなら
余を殺す程に強き物はいらぬだろうか。
この生命はそなたの両手に従うも、
男共の全ての力にも屈しはしない。」

「屈服を知らざりし尊大なる首も
既に馴らされ、軛につかされたが、
アラウコの国民のその失われゆく名声を
取り戻したのは誰か。」

我こそはイスパニア人の肩より

権力と暴政を奪った男。

この地にては、劔を振わずとも、この名前だけで、戦には十分なのだ。

「そなたが側に居れば尚更の事、

余は恐れる要もなく、危害も予期してはいぬ。

夢のために心配する必要はない、

真実を夢見る事などあり得ぬほどに。

余は迅くに己が運勢を最大の

断崖に置くことには慣れておる。

これよりも多くの危険に遭遇したが、

余は常に名誉ある脱出を成し遂げてきた。」

彼女の不安は次第に募り、

一層涙を浮かべて、ラウタローの首に縋り、

敬虔な、憐れむ様な目で、

唇を合わせ、彼にこう誓った。

「愛しき御方、嘗て私が自由だった時、

自由に貴方に捧げた純粹な恋心は

高い空がその良き証人ですが、それが今、

何かお役に立つのなら、

その心にかけて、又、貴方が立ち去った時

感じた苦しみにかけて申します、

又、若し風と共に去ったのでなければ、

あの時、涙乍らにお示し下さった真心にかけて、

(私に何時か満足して下さったとして)

少なくともその満足を与えて下さい。

それは貴方が速かに武装され、部下たちが

整然と城壁に集まることです。

蛮人は答える、「そなたが余を

見損なっている事がよく分った。

ラウタローはかくも臆病者と思われているのか。

強き右手をかくもそなたは軽んじるのか。

愛する同胞の救済の為に、力を

遺憾なく發揮せしこの右手を。

恐怖に駆られ、余を亡き者として泣くとは

余もそなたの信用を失ったものだ。

「哀れな私！貴方に満足しつつも

——とグワコルダが言う——安心できぬとは。

私の不幸が更に強く更に大きくなれば

貴方の腕の強さも何の役に立つでしょう。

でも私の抱く疑念は本物となる筈。

貴方に抱く愛情が、私に確言しています、

追い払うべき剣が、

貴方を追わせる事になるだろうと。

「と申しますのも、確実に酷しい運命は

早くも私を脅かしているからです。

私は非常な不幸を味わざるを得ません。

貴方から切り離される不幸です。

何卒死ぬ前に泣かせて下さい、

私に残されたこの僅かな生命を。

不幸を感じない人は、

幸福に満足しなかった証拠です。」

こう言って彼女はさめざめと泣いた。

見る者は同情の念を禁じ得なかつたろう。

心優しきラウタローはその際

彼女を伴わずには居れなかつた。

だが既にわが乱れし筆は、

愛の事には不慣れの為、

唯困惑し逡巡としてもどかしく動くのみで

更に進むことができない。

第十四歌章

フランシスコ・デ・ビジャグランは夜陰に乗じて秘かに敵の要塞に近づく。未明に急襲し、最初の小競り合いでラウタローが死ぬ。双方に多大の流血を見る戦闘が展開される。

蛮人の娘と雖も強いる事なく
理性の下に、又燃ゆるが如き
心からの涙で清らかな愛の証しを
見事に示し得るものを、
女人を辱めんとする
あの乱暴なる言葉は如何なるものか。

彼女らを甚だしき下劣と過失に導く
情念たることは明白。

信頼感も、友の確言も

彼女を慰め得なかった。
強固な陣地も、濠を回らせた城壁も
彼女の疑心を晴らせるのに十分ではなかった。
純なる愛情より生じた大いなる懸念は
全ての物を薙ぎ倒す。
その運勢を嫌うものとしては
唯死の危険しかない。

こうして二人の結ばれし心は

愛に於いては一致すれども、別々だった。

二人はその事を確かめ、

更に甘き毒を呷あおった。

燃え残る焚火の周りの兵士たちは

先にも述べた通り、歩哨を頼り、

且つ背後の山脈の防壁を信じて、

雑談の疲れを休めていた。

ビジャグランは肅々と既に

険阻な山を乗り越えていた。

この山さえなければ

何の労作もなく進み得たであろう。

そして要塞の側近く達した時、

星空を仰ぎ乍ら、適当な場所に停止し、

東の方に仄見える

夜明けを待った。

何人なにびとにも見つからず、感づかれもしなかった。

夜が暗かった為であり、

歩哨を欺くことができたからである。

彼らは安全を信じて、油断していた。

馬は嘶かず、音も立てない。

運は既に彼の側に味方していた。

運の巡りにより、畜生は聡くなり、

人間は畜生になり下っていた。

早くも夜陰の暗き空気が

待望の光によって薄まり、

城壁に立つ歩哨たちは

新たなる日に遠くより挨拶を送り、

周囲の安全を信じて

休憩に就いた。

城壁は黙し、兵士たちは

酒と甘き夢に埋もれた。

黒々とした闇が、曙光の

明るい姿に耐え切れずに

西の方に引き退る時刻が

地上に到来した。

その時、物悲しげなるクリシエは

赤き東方に顔を向け、気色ばみ、

物陰の彼方に星の去るのを見、

やおら黄金色の、デルフォイのアポロを見た。

時至れりとはばかり、イスパニア人は

徐々に要塞に接近するが

蛮人共の妨げは全然無い。

悲しき運勢のため、彼らには何も聞えぬ。

彼らは夫々に非常に油断し、

死が容赦なく近づくのを知らない。

我らはその近くに在る確かな證を

更に遠くより気付き居るのに。

我が軍はもはや待ち切れなかった。

何故なら、彼らを襲うべき時ぞと見た時、

突如として、大喚声と共に

一大音響が轟いたからである。

我が軍は整然と雪崩をなして

要塞に突入したが、

それは迫る危険に備えたと言うよりも

夢の詰まった要塞であった。

抑、^{そもそも}悪徳に固有なる条件は

如何なる不運、逆境をも恐れる事であるが

夫々の仕事において

確かなる事を見つけ得ず、

罰や不幸を眼前に控え乍ら

如何なる物音をも素早く感じる事なく、

銘々がその力を發揮せんものと

武器を取りに走り、身構える悪人共の様に、

未だ眠りの覚めやらぬ

アラウコ人は驚き飛び上がる。

そして危険を眼前にして

急造の小屋戸を叩く。

武具を備えぬとは言え、

流石に堂々たる気迫を示し、

強固なる意志で、迅速に

城壁の補修に着手する。

鈍重なる眠気を振り払い、

普段の勢いを取り戻して、

或る者は弓を、或る者は棒切れを、

或る者は焼け棒杭を、或る者は劔を手にし、

或る者は慌てて他人の杖を取り、

或る者は真先に出かけて調べようと

そして拳で敵わねば嘔みつこうと、

素手のまま飛び出してゆく。

折しもラウタローは

優しきグワコルダと言葉を交わし、

彼女に自信を抱かせ、激励し、

彼女の示す不信の念を叱正していた。

彼女はその道理を肯せず、寧ろ立腹する。

これこそ彼にとって最大の苦痛であった。

二人の優しき愛の編み目を

喇叭と太鼓の厳しき響きが切り裂いた。

されど、絶えず金銭のみを心に抱く

さもしき守銭奴が

盗人の跽音を感じた時も、

愛しきわが子の叫びに

野獣を懸念して駆けつける母親も、

その第一声を聞いたラウタロー程

軽やかに飛び上がり、

素早く駈けつけた例はない。

合羽を腕に巻き、肉体も頭あらかに

抜き身の刀を手にして、直ちに

誇り高き蛮人は戸口へ走る。

彼は咄嗟に武装する事が出来なかつた。

おお、移り気なる運命の女神よ、操の無さよ。

汝は何と苛酷なる仕打ちをする事か。

長き歳月を要した財産を

何と簡単に、悉く奪い去ることか。

土地の四百名の友軍が

側面より攻撃を加えた。

彼らはキリスト教徒に味方し、

銘々に色塗りの弓を手を駆けつけた。

その甚だしき力と敏速なる手で

彼らは夥おびただしき矢を放った。

ピジャンの息子が庇に現れると

一本の矢が彼を目がけて飛来した。

おお、苛酷なる運命よ、残忍なる

矢尻は左の胸を真直ぐに破り、

人の胸に嘗て在った例の無い

最も勇ましく強き心臓を射抜いた。

その一撃で死神は勝ち誇った。

死は僅かその一撃で大いなる出来事を見、

人殺しからその栄誉を奪い、

その傷を我が物としたのである。

鋭き弓の矢は斯程に力を發揮し、

蛮人は砂上に斃れた。

そして血管を流れる黒き血の

豊かな流れに門を開く。

彼の顔は色を失い

目は捻れ、そして激痛と共に

魂は肉体を離れて、一路

地獄の棲家へと降って行った。

わが兵は誰に妨げられる事もなく

壕や砦を占領し、

大勢の者が四方八方から

城内の広場に踏み入った。

蛮人たちは、気力はあれども技無く、

兜も盾も鎧も無く、

危険で残酷で獰猛で激しい

血腥き戦闘を開始する。

ラウタローと共に隠れていた

他の地区のインディオたちは

恐怖と驚愕の虜となり、

騒音を聞くや否や素早く外に出たが

殺戮の轟きを感じ、

気力も感覚もかく掻き乱されて

用心深く耳をそはだ敬そはだて乍ら

響きの弱い所で待ち伏せていた。

狩人の足音を感じて

そつと首を上げ、音のする方に

耳を延ばして、

犬や人に依り掻き消される

聞き慣れた雌鹿の鳴き声の方に

一目散に走り出し

危険から最も遠ざかろうとする

臆病な雄鹿の様に、

恐怖に屈し慣れた

賤しくも浅ましき悪党は

要塞を見捨て

四方に散らばって走り乍ら

あてどなく、道無き道を突き進む。

死への恐怖は甚だしく、

最も勇氣ある者にも、一枚一枚の木の葉の後に

獰猛なるイパニア人が居ると思える。

然れど、危険と恐怖を、絶えて

同居せしめざりし人たちは

その大胆なる胸を盾とし、

過ぎにし戦を思い起こした。

抜き放った鋭き刃先は

拒むが如くは見えず、

左の手も劔を拒まず、

右の手の操作を錬える。

若きコルピジャンは、刀と手が

地面に着けど失神する事なく、

寧ろ突然怒りに燃えて

相手目がけて攻めかかる。

そして刀を拾い上げると

右手はその束を確と把み、

烈しき軽蔑と怒りをこめて遠くに投げ、

左手で復讐に出る。

ミジャポールは脇腹を貫かれ

頭蓋は逆手打ちにて窪み、

槍の一突きで胸を貫かれたが

弱った様子は見せなかった。

引き抜く槍の半分は

泡立つ血潮に染まっていた。

そしてその箇所は空疎となったが、

新たなる気力は充ち溢れていた。

彼は両手で強く戦棍を握り締め、

更なる怒りと共に振り回した。

あの猛々しき蛮人に迫りし男は

悲運の男と呼ばれるに相応しい。

今はこの際の最後の力で、

彼は鉄の棒を振り上げた。

だが彼には最早、生命が欠けていた。

彼の体と戦棍は同時に地面に倒れた。

彼の携えし勢は、途半ばでの

死によって碎かれはしたものの、

一人の勇敢なるイスパニア人が

その力強き動作によって横転した。

だがイスパニア人は起ち上がり、

害を加えし者に激しく迫った。

そして亡びた肉体が地面に倒れるを見て、

まだ生あるものと思い、襲いかかる。

彼は屍の上ののしかかり、

死者に尚死を与えんと欲して

烈しく各所を傷つけ、

血塗られし体を痛めつける。

その様たるや甚だしく、

遂に元気を失い、立ち上がり、慎重に

今しがたまで組みつき居りし男を見、

漸く目も顔も冷たき事に気付いた。

この時デイエゴ・カノが血まみれの

刀を持って現れ、ピコールと出会う。

彼は厳しく手を後方に引き、

相手の胸を一突きの下に穿った。

アラウカ人は死の混乱に陥り、

地面にどうと倒れ、顔面に死相を浮かべて

呕き乍ら、泥の中で^{もが}腕き、

遂に魂が悉皆と別れを告げた。

エルナンド・デ・アルバラードは二度の打撃で

勇敢なるタルコを死に至らしめた。

だが堂々たる裸身のグワコルドに依り

片腕と脇に手ひどき傷を負った。

イスパニア人は呆然となっていたが

漸く失神の状態から我に帰り、

強力なる蛮人に向って突進し、

その胸深く刀を埋めた。

老いたるビジャグランは血塗られし刀で

同時に全ゆる箇所を掻き回し、蛮人共を打ち破り、殺し、傷つけ、蹂躪し、苦しめる。

ニコの頭に一撃を加えると

彼は混濁した目を回し乍ら死に、

地面に倒れる。又別の一撃で

ポロの腕を左腕だけにする。

刀が鋼と相対す時、

軟かき^{あらか}頑な肉体に触れ、

機敏なる衝撃に助けられて

脚や腕に突き刺さる。

各自は我こそ一番とばかりに、

同じ思いに駆られて

寄せ来る波の如く増大し、

進んで死に身を捧げた。

両者はこの様にして攻め来合い、

刀を振う余地もない程であった。

瀕死の者が倒れるや、

忽ち広場は塞っていた。

互いに入り乱れて戦い

屍の上を動き回った。

時には余りの人数のため互いに

刀を突き差す役に立った。

干戈^{かんか}の交わる様は凄じく、

打撃は大旨悉く致命的となる。

仮に致命的でない時も

永遠に名残りを止める程に、体に刻まれる。

両の腕を振り下ろす時、誰しも呻くが、

その効果は様々である。

何故なら或る者には硬き鋼に当り、

或る者には頑な軟かき皮に当るからである。

肉職人の湾曲せる刃物で

肉が多く塊に分けられる如く、

又鍛冶屋がその硬き金床にて

鉄を叩き、硬き板金を作る如く、

戦士たちは打撃を加えるが、

その音は様々である。

或る者は肉と骨を碎き

或る者は鍛えし武具を窪ませる。

扱てもフワン・デ・ビジャグランは鞍に

確と腰を下ろし、グワルコンドに立ち向かい

乳首目がけて槍を投げれば

槍先は一尋^{ひら}ばかり突き抜ける。

蛮人の顔色既に黄色を帯び、

失神し、堡壘に身を凭すと思えば

俄かに地面に倒れて

傷口より魂を吐き出した。

されど彼の兄レンゴは

弟が血の色を失い、倒れるを見て

血潮も固まり、全身氷となって、

余りの苦痛に意識を失った。

やおら我に帰ったこの尊大なる

不信心者は、天に向って罵言を吐き、

節くれ立った杖を高く振り上げ、

フワン・デ・ビジャグラン目指して急行した。

だがその前にボンが素早く矢を番え

馬の眉間を傷つけた。

馬は首を上げて棒立ちとなり、

手綱も拍車もその効なく、

前脚の間に頭を下げ

背と両脚を苛立たし気に揺振る。

ビジャグランは酷しき運命に屈し、

鞍橋を捨て、草原に降りた。

地上に降り立つや否や

稀にみる力と音を伴い

機敏なる戦棍が降って来た。

宛ら雷か地震の様であった。

その打撃を浴びてイスパニア人は永眠した。

蛮人は更に頭部に打撃を加え

脳味噌と目と魂を

そこから追い出した。

なおも、弟の舐めし辛苦の

復讐のみにては飽き足らず、

寧ろ新たなる怒りと恨みをこめて

デイエゴ・カノに痛打を与えた。

彼は顎髭を胸の上に傾け、

手綱を手放し、

意識を失い、冷たくなり、

馬の運ぶが俣になった。

彼は群がる人たちの真只中で猛り立ち

鉄槌を振り回した。

或る者を不具者と為し

或る者の手足を萎えしめ

或る者をして馬の首筋に縋り付かせる。

気を失って馬の臀部に伸びる者あり、

止むなく鞍橋を離れる者あり。

全ては彼の力と凶暴なる怒りに平定される。

彼は体の十ヶ所以上から血を流し、

その血を全身に浴び乍ら歩んだ。

しかしその気力は衰えるどころか、

大声と共に益々烈しく打撃を加えた。

右へ左へと軽々と飛び跳ね、

鎧、兜を窪ませ、

高い冠毛を沈め、脳味噌を破り

筋肉と硬い骨を打ち砕く。

この時、刀と槍と叫声の

一大響動じよめきが起り始めた。

その理由わけも知らずに、三、三、五、五、

大勢が駆けつけた。

見れば、一人の凛々しき若者が

堂々と、刀物を操り乍ら、

蛮人共の刀の間を自由に駆け巡り、

赫々たる武勲を立てていた。

この勇敢にして闘志溢れる若者は

悪魔の如き憤怒に駆られ

汚れた埃まみれの凄き形相で、

血の氣に充ち、汗を吹き出し乍ら

右手の槍を振りかざした。

その様は残忍なる軍神マルテが

燃ゆる闘志も露わに、

ブルカーノの鉄の盾を叩くに似ていた。

彼は巧妙に重き刀物を

軽々と操り、振り回した。

そして恰も蘭草いぐさの若芽を薙ぐ様に

クロンの体を両断した。

続いて巧者ポンを地獄に送り

更にポんに続いてラウコを斃した。

武器も防禦の役を果たさず、

八つ裂きにされ、粉々にされた。

この武者の名はアンドレアと称し、

将に巨人の体格を有していた。

身分賤しき生れにして、その性質は

ジーバやレバンテを上回っていた。

何せ、その頑丈なる手足の様に、

長き刃物を力強く、軽やかに

見事に捌き、

当るを幸い、死に至らしめた。

彼はグワティコルを一撃の下、

腰の辺で両断し、砂上に倒した。

更に一撃で哀れにもキラクーラの

右股をずばりと切り取った。

この様にして戦い、彼は

広場を屍で充滿させた。

彼の劔は何人をも容赦せず、

為に死骸は累々と積み重なった。

コルカに対しては、肩の辺から

一刀の下に頭を奪い、やがてその刀を

イタタの領主マウレンに向ける。

そして逆手打ちの一撃で縦に切り裂く。

何せ、村中の蛮人が

胸や背や脇腹に何本も矢の突き立つまま

彼に向って行ったが、彼は

槍を、斧を、戦棍を委く一蹴する。

恰も馬上の狩人たちに

追跡される雌熊が

傷を負いつつ怒りに燃え、

節くれ立つ投げ槍をへし折り、

我慢できずに荒れ狂い

野の細道を駆け回り

傷つきし哀れな犬どもが驚き

その熊に広々と場所を開ける様に、

勇猛果敢なるアンドレアは

蛮人どもに取り囲まれたが

その厚き包圍網を、

刀を振いつつ、大きく開いた。

情熱と叫声と戦闘が熾烈の度を加え、

大多数の者がこれに参加した。

折しも向う側より現れたレンゴも

血にまみれていた。

煩わしき狎に困まれた

二頭のマステイン種の犬が

その様を見て首を振り立て

噛を剥く様にも似て

二人の堂々たる荒武者は

人を危める武器を手に手に、

互いに損傷を与えんとする……。だが

この戦いは次の歌章に譲りたい。

第十五歌章

最終章たる第十五歌章で戦闘は終る。この戦でアラウカ族は誰一人降伏を望まず、悉く死滅した。又、ペルーの艦隊がチリに着くまでの航海と、マウレ川からコンセプション港に至る間の暴風についても述べられる。

愛を欠く物にいかなる佳き物があるうか。

愛無き詩歌や文学が人を満足せしめ得ようか。

愛にその源を持たぬ優れた靈感が

何処に見出され得ただろう。

愛に基礎を置かぬ物を

充実せる物と呼ぶ事は出来ぬ。

満足も喜びも心配も

愛に由来せぬ限り、生気が無い。

邑びた粗野な判断も、愛故に

硬く粗き樹皮を破り、

真まことの才智と嗜好を生み

悉皆の物を一層洗練する。

ダンテ、アリオスト、ペトラルカ、イベロ人、

彼らを斯くも繊細にしたのは愛である。

如何に豊かにして且つ富める言語も

愛に関せぬ限り、不味き物となる。

さて、野暮なる才と粗野なる文体の私が

愛と装飾を脱ぎ捨て、敢えて

残酷なる刃に身を曝さんと

無謀なる企てに及んだのは何故か。

それは私の善き熱意と健全なる意図であった。

既に恐怖のために切れていた

糸を結ぶことによつて、私は

この大胆さを償おうと思つた。

私は、これが専ら真実に沿う物である故

記せば長く、労多く、

又常に同一の事に関して扱うべき物故、

この辺にて筆を擱かんと考えた。

如何に甘美で繊細な文体と雖も、

又、如何に切り口鋭く、響き高き筆と雖も、

長く続く時は損なわれざるを得ず、

又味も、同じ食事では衰えざるを得ない。

もし仮に野に出でて草花を摘む

自由に恵まれていたなら、

大方、嗅ぎ慣れし様々な匂いが

嗜好の疲れを取り去つたであろうに。

何故なら、他の人びとも為した様に、私も

千万の寓話や恋物語を織り交ぜ得るからだ。

然し私は極めて奥深き所にいる故、

約束せし事を続行する他ないだろう。

私は、戦が一際激化し、

ロンバルディア人とアラウカ人が

相互に手の届く所に迫り、

力をこめて戦棍を振り上げた所まで述べた。

イタリア人は麻で覆われ、

インディオは防具を全く欠き、

一層身軽で伸びやかであった為、

常に相手に先んじて打撃を与えた。

筋骨逞しきイタリア人は、

戦棍の勢よく振り下れるを見て

盾を高くかざし、その下に身を縮めて

そき打撃に絶えていたが、

その強力なる盾も中央が破られ、

彼の頭に打ち下ろされたため、

齒を震わせ乍ら、地面にて、

極めて微細な空の星を見た。

氣力横溢のロンバルディア人は

一刀両断を狙って

勇敢なる蛮人目指して

振りかざした腕を打ち下ろした。

然しレンゴは一瞬の隙もなく、

軽快駿足の豹の如く

右手にさっと跳びのくと、

刃物は徒に空を切った。

巧者の蛮人は忽ち強力な

戦棍を振ったが、芯に当れば

アンドレアは言うに及ばず

巖をも打ち砕いたであろう。

二人の戦いは迫中していた。

尤も振り下ろされる刀が

命中すればレンゴは斃れ、

戦は終ると思えたのだが。

だが只ならぬ巧みな技量と慎重さで、

武器は赤裸に等しくも勇気で備え、

風の如く入り来り、去り、又戻る。

その俊敏なる様は一様ではなかった。

敵に打撃を与えるや否や

忽ち引き下がる。

されば、仮に刀は二尋あるうとも

彼には届き得なかっただろう。

怒り狂ったイタリア人は

アラウカ人が裸体のまま

武装せる彼と互角に張り合うを見て

幾度となく腕を振り下ろすが空しかった。

左手を右手に合わせ

大刀を握りしめ、素早く両腕を上げ、

体を両断せんものと

蛮人目がけて襲いかかる。

アラウカ人は確かな効果を期して

激しく執拗に棍棒を振り下した。

しかし刃物が振り下ろされた瞬間

彼は体を躲したため

腕と打撃は空を切り、

非常な力が加わっていたため

大刀を支え切れず、

彼は小さな盾だけになった。

彼がその状態になるのを見て、蛮人は

棒を捨て、迅速に、文字通り肉迫し、

互いに取組み合いの形となり、

相手の麻布を胸に刻み込む。

然しロンバルディア人は狼狽えず、

寧ろ勝機は我にありとばかりに

いと硬き両の腕で彼を把み、

地面より持ち上げようとする。

勇者アルシデスがアンテオにした事を

わが勇士はアラウカ人にしようとした。

然し運命はその望みに組せず、

その効果は空しいものとなった。

何故なら気力充実のレンゴは一回転で

彼を平地の彼方に投げ出し、

絶えずその猛威で圧倒し、

散在する屍の上に重ねるからである。

唯一人の男にかくも手を焼く己が姿に

アンドレアは赤面し、憤怒に燃えて

大地に確と両足を踏張り、

名誉心より出でし氣力を振り絞って

レンゴに襲いかかり、

彼を地面より起こした。

これは新たな重荷に堪えるに十分な

大いなる力を證す業であった。

私は嘗て見たことがある。

多くの若者が互いに力を競い合う中で、

彼が一本の紐を口にくわえ、

それを四人の男が握って、

同時に思い思いの方向に引っ張った。

然し逆に彼らの方が引きずられた。

而も彼は齒によるのみであった。

両手は後手に縛られていたのである。

又彼は何の苦もなく軽々と

彼の見つけた二十アロバを優に越す

水を満たせる大樽を

地面より一尺以上持ち上げ、

零すことなく、水面静かに吊り下げた俣、

悠々とその水で渴きを癒し、

やおら、恰も軽き壺であるかの如く

それを地面に置いた。

又ある時など、この土地の

水量豊かなる河を舟で渡る折、

流れが早く、大きな岩肌に碎け、

漕ぐ手を速めるのみでは間に合わず

船は押し戻されて

下流に流されそうになった。

彼は鎖帷子を身に纏ったまま

勇躍、水中に飛び込んだ。

そして口に綱をくわえ、

奔流の中で頑丈な胸を回転させ、

足と強力な両の腕を動かして乍ら

殆んど真直ぐに河を横切り、

水の勢に抗い乍ら

舟を曳き、隘路より

無事に岸边に引き戻した。

ここでは割愛するが他にも色々な事をした。

ここでも彼はレンゴを凌いでいた。

それは彼の力を劣らず証拠立てる物であった。

然し怒りに燃えるレンゴは

相手が足を踏張らずに彼を持上げるを見て、

恥じ入り、新たな勇を鼓して

強引に足を地につけ、逆襲を謀った。

ここで遂に二人はほぐれ、

再び互いに武器を手にした。

二人は恰も一日中休息した後の様に

猛烈な襲撃を開始する。

或る時は素早く下方から、或る時は上から、

恐れを知らずに互いに襲いかかった。

武具を身につけぬレンゴは

自由自在に身を熟し

戦いの苦しみに耐え、

僅かの余地も無にしない。

或る時彼は側面より、キリスト教徒に

電光石火の一撃を加え

その物凄き力の故に

相手の全身が苦痛を訴える。

尚一撃があり、更に一度、私の計算では

四度目の攻撃があった。最も強力であったが

抜け目なきイタリア人は巧に避け、

唯一突きで蛮人を傷つけた。

劍は彼の逞しき腕を貫き

その片側に傷口を開く。

だが彼の運は甚だ強く、

さしもの一撃も命を奪うに至らなかった。

蛮人は全身これ毒と化し、

尋常ならぬ勇敢さで

手強き相手の急所を目がけて

棍棒を力の限り振り下ろした。

イタリア人は小さき盾を高く翳し

稀に見る強打を受け止めんとしたが

耐えることは全く不可能であった。

尤もその及ぼす害の一部は繕われたが。

強烈なる一撃が彼の脳天を叩いた。

そして宛ら軍帽は鍛え抜かれた

強力な鑄塊に非ずして錫製であるかの様に

その一撃のみで窪んでしまった。

イタリア人はその打撃で

記憶力も感覚も失い、

踉蹌よろめき乍ら、力無く数歩歩み、

今にも地面に頽れそうであった。

両の耳から吹き出し

流れる血潮は、恰も

泉の水の様であった。

だが彼は辛うじて立っていた。

やがて我に帰ると、彼は

血まみれの己が姿を見、

蛮人にかかる状態にされたのを見て、

何時にも増して猛然と、憤怒を抱いて、

反動をつける為、片腕と右足を引き

重き刀を凄じい音と共に振り下せば、

その音は山々に訝した。

レンゴは大刀の襲いかかるのを感じ

その強き力と勢を感じて

大胆にも、戦棍を高く、横にして

打撃を防がんとその下に身を置いた。

柄は如何に鋼鉄で補われていたとは言え、

防具としては十分ではなかった。

その大部分が地面に落ち、

刀は風を切つて頭上に下りて来た為である。

この打撃は凄しく、危険であった。

やがてそこから真赤な泉が湧出した。

レンゴは意識朦朧として、蹠踉いだ。

声も無く、目は殆んど血で塞っていた。

手を拱く時こまねにはあらじとばかりに

イタリア人は、時を移さず、

再び巨大な光る刀物を

渾身の力で振り下ろした。

錯乱せるレンゴの露なる額の、

中心部をイタリア人は傷つける。

振り下す際、手を撚りさえしなければ

彼を上下に切り開いた事であるう。

打撃の手応えは十分であった。アラウカ人は

死者の様に地面に長々と伸びた。

刀はこの打撃で痛み、

三、四箇所で刃が毀れた。

痛烈なる打撃と、倒れる時の

大音響に振り向いたクリノは、

かくの如くして勇者レンゴの倒れるを見て

既に此の世には無き者と思つた。

そして友として、又縁者として痛く悲しみ、

ペンコにてトゥカペルの入手せし代物たる

主人の刀を携え、

蛮人の復讐の為に振り回した。

残忍なる劍は委細構わず

一撃の下にアンドレアの兜の盛上刺繍を徹り

鎖帷子の片方を破り、

鋒は骨に達した。

彼は次に大刀を両手で持った。

慎重なるアンドレアは襲撃を予期して

素早く身を躲かしたので

敵に殺傷の暇を与えなかった。

透かさず相手に組みつき

傷を負いし代価として

彼を地上より可成り持ち上げ、

大音声と共に、仰向けに倒した。

そして戦闘に逸早く決着をつけんと

相手の劍を奪い、次に命を奪った。

この後、彼は寧猛なる軍神マルテが

血まみれにて歩む所に突入した。

彼は人の最も多く集える箇所に向いた。

其処にて彼と出会う者こそ哀れなれ。

或る者は横から、或る者は正面から、

或る者は斜に、一突きで串刺しにする。

それでも飽き足らず、倒れた者を

蹴り上げ、骨を折り、関節を外す。

そして腕や頭を宙に浮かせる、

際限なく、無数に、数え様もなく。

快男児ラサルテは怒れる右手で

縦横に暴れ回り

タルクエンの胸をば一突きで刺し通す。

そして荒々しくティタグワンの方に戻り、

無防備なる頭蓋を裂いた。

だが怒り狂える蛮人は又立ち戻る。

敵は魂を渡す代りに、反って傷を与え、

そのため彼は鞍橋に留まるのに骨を折った。

パチエーコはノルパの脇腹を割き、

続いてロンゴボールの命を奪う。

フワン・ゴメスも同じ側から

夷狄の鮮血を浴び乍ら

一撃の下にコルカを斃し、

無防備なるガルボの腹部を開いた。

瀕死の蛮人は顔色を捨て、魂を

最後の吐息に包んで捨てた。

ガブリエル・デ・ビジャグランも手を

拱く事なく、シンガとピジョルコを倒し、

蛮人共の鉄の間で

華々しく立ち回っていた。

干戈の交わる高き響きと

雄叫びと騒音に

野鳥も当惑し只呆然と

木の枝から眺めていた。

憤怒は募り燃え盛り、

人々は集い身を寄せる。

彼らは早速、立ち乍ら死ぬだけの

場所以外、誰も欲しがらない。

截る者、穿つ者、破る者、殺める者、

事態は窮迫の度を極め、

死者たちは余りの人の集まりに

倒れることも俣ならず、

人びとに凭れるままであった。

横暴と激怒、軽蔑と無謀、

打撃の速度と厳しさ、

それらは到底描写出来る物ではない。

筆もその早さには付いて行けない。

今や死を恐れる者は誰もいない。

彼らの顔には寧ろ生の悲しみがあつた。

何故なら、命長らえば

敗者の身となる事を自覚していたからである。

勝利への希望が失われた今、

彼らには生きる事への疑念があったが、
少なくとも復讐の限りを尽して死のうと
その時を延引していた。

それ故に彼らは、既に述べた通り
一步踏み出して敵を攻めること能はずとも、
決して後退する事なく、
槍に対し胸を拒む事もなかった。

此処こゝに四人、彼処かしこに六人と、至る処で

間断なく人は斃れて行つた。

或る者は千の傷口より血を流し

或る者は頭より胸にかけて裂かれ

又或る者は背中や脇腹から

頑丈なる心臓を窺わせていたが

それは内部の、胸の中では鼓動し

偉大なる気力を余す処なく示していた。

自らの内蔵に躓き乍ら

憎むべき敵を攻め立てる者あり、
二十カ所の傷口から息を吐き乍ら
覆われた内蔵を露にする者あり。

そして生命は何れの戸口より跳び去るべきか
戸惑う様子であったが
遂に全ての戸口より飛び出し、
立所に力と命と血と息が切れた。

すでに夷狄の八分の一は

立つてはいなかったが屈伏した訳ではない。

遠くより眺め居しビジャグランは

斯程に甚だしく傷つける人々を見て

味方の土民二人を派遣し、

敗北を認めて降伏し

犇につき、服従すべし、

さすれば慈悲を与えようと伝えしめた。

全てのイスパニア人が剣を収め

直ちに其処より引き退った。

そして二人の使者は和睦と

条件と、貢物につき提案した。

されどアラウコ人は、かかる不名誉な

別れを耳にして、深く恥じ入り

非常なる勇気を鼓舞して

その提案に応えなかった。

彼らは天を仰いで咆え立てる。

口をついて出る言葉は一徒「死」のみ。

彼らは死を望んでいる。彼らは言う、

「恥多き生命いのちなぞ消え失せるがよい」と。

これが彼らの返答であり、叫びであった。

そして血生臭き戦いくさに止めを差さんと、

衰微した身体より新たなる力を振り、

気力に依って対処する。

背と背が合わされ、

幾人かの者は跪いた姿で戦う。

脚が砕かれ、役立たず、

身を支えることが出来ぬからである。

さり乍らも彼らは劔を振り回した。

或る者たちは、地面に身を振りよじつつ

敵を傷つけんと前進し、

足を目指して反撃した。

既に手足を失い

泥と血の海に身を置き乍らも

死と闘う何という凄すさまじさよ。

彼らがその場で蹴もがく様は

恰も水量の減じた池の中で

四元しげんの二つの間に打ち震え

のた打ち、やがて死に行く

魚の様である。

如何に血に飢えていようと

残酷なるシラ^(四)、そして寧猛なるネロは

ここにその血の流れを見れば

さぞや満足することであろう。

何故なら生きた人間の血を

カンパス・マルティウスの屠殺者シラよりも^(五)

またローマのフォルムの野蛮なネロよりも

一際豊富に浴びるだろうから。

降伏を望まぬ者たちは

一人残らず地面に横臥した。

彼らは生命の終点に導かれて

止むなき死に降伏した。

重傷を負い疲弊し果てたイスパニア人は

囲いを回らした広場を出た。

其処は蛮人共の武器や屍で充ち溢れ、

彼らはその上を辛うじて越えて行った。

戦場に立つ蛮人は一人として無く、

劔を動かし得る腕も一本だに無かった。

ただマジエンのみは、死の間際に

生への意欲が募り、

恐怖と不運に屈し、

鋭利なる刀物にてわが左腕に

痛々しき傷を負いたるを見て

城壁の背後に身を潜めた。

今しがたまで広野に響き亘った

騒音も周囲に感じられなくなると、

(平原は既に死神の怒れる手により

沈黙を強いられていた)

彼は城壁を後にし、浜辺に

己が傷を治療し、救ってくれる

アラウカ人は見つからぬものかと

姿を現した。

然し広場の様子を眺め、

友人たちの屍を眼の当まにするや、

彼らの容貌は死に依って変っていたが

羨望の心から彼らに親しみを覚え、

恥らいと怒りの念をこめて、

己が心臓に劔を示し、そして言った、

「ああ何たる事ぞ。我が身のみ

斯程の友の死と勇氣の証人となるとは。

「臆病なる心よ！汝は正に

勇ましき劔の一打に相応ふさわしからず。

かくも好運ぐ一瞬を失うは

選択の故であり、運命の業には非ず。

おお女々しき輩よ。汝は我を

久遠に生きる道より遠ざけ、

我がこの右手が如何に拒もうとも、

恥多き死へと至りしは無念なり。

「仮に若しこの国の血と我の血が

ここに混ることが許されるなら、

我が体がこの武者たちの間に斃れるを見て、

いかに弱き働きなりしとは言え、

我は、こうして、祖国を守りし

人々の中に数えられるであろう。

だが我は憐れなる男、傷口を見れば、

わが手の非力は一目瞭然。

「わが名誉と祖国と同僚に対する

己が犯せし侮辱を浚ぐ為には

如何なる償いで十分なのか。

如何なる繕いを我は為し得るのか。

我は多数の人の素晴らしき名誉と

測り知れぬ名声を曇らせる、と言うのも、

さもしくも恐れ故に敵の額を

正視し得ざりし者ありきと、人は言うだろうから。

「何故我は愚にもつかぬ理由を設けて

我が行為を延引し、恐れに加担したのか。

後悔など今や何の価値も無いのに

後悔することしきりである。」

ここで彼の声は切れた。彼は疑う事なく

項を殺生の劔に委ねた。

素早く残酷なる刃先を動かし、

時ならずも、生命の糸を断つた。

怒れる猛きマルテの勢よ止まれ、

そして劔よ暫時憩うがよい。

その間に私は散在しつつ進む船の、

始まりしばかりの航路に戻りたい。

船は厳しく執拗なる南風に抗い

海神ネプトウノの立てる荒波の中を

風と水の力に対し

力で抗し、漕ぎ進んでいた。

人の絶えて住みし事なきサンガジャーの

島々の間を船は進んだ。

その他の見知らぬ島岐が

右舷の、西の方角に去って行った。

左舷にチャウレを見、

そしてアリカに達し、やがて苦難の末、

我々はコピアポーを見た。これぞ真に

チリの地方の最初の盆地である。

風は窪みし洞窟より出で

思いの仮に吹き荒ぶ。

そして勢よく、乱暴に、烈しく

広漠たる海原を駆け抜け、

世界の破壊を恐れ、

大山脈を築いて閉じこめた

その王たるエオロの

牢獄と戒律を破る。

風はこれにより猛威を改めることなく、

洞窟に閉ざされしを見て

その閉じたる窪みと言う窪みに

大音響と共に出口を求めぬ。

かくて大地は掻き乱され、震え、

度重なる地震に

村や山で人間や家畜や

家や小屋が倒壊する。

そこにおいてヨーロッパとは逆に、

水は減少し日は増大する。その理由は

太陽は昼夜を平分する線を外れ

山羊座に最も近づいていたからである。^五

さて船は海と南風に抗い乍ら

遮二無二そこより走り、

やがて朔風に助けられて

コキンボの港に姿を現わした。

待望の砂地に着くや

我々は下船し、そこに足を踏み入れたが、

広漠たる海、かくも長き旅路、

危険と苦難もその瞬間悉く忘れ去った。

そして新に、港より二レグワス離れた

ラ・セレナの町に赴いた。

予期せる時の為に備えて

馬具を付けた勢よき馬に跨って。

其処で我々全員は歓迎され、

宿舎の提供を受けた。

救援と長旅に敬意が表せられ

快い歓待が続いた。

美味なる茶菓と食物で

早速馳走の準備が整えられ

これにより長旅の窮乏と空腹に喘ぎし

艦隊も元の姿を取り戻した。

兵士と馬は飢えと労働に疲れ乍ら
荒廃せる土地や

無人の地を突破しつつ

強行軍を余儀なくされた。

だが彼らは全ゆる運に抗しつつ

間もなく町に着き、それより

一カ月の間、十分に休息した。

馬も元気を回復した。

やがて彼らは艦隊を俟つことなく

阻しき道を繕いつつ、

右手に近く海を控え乍ら

目指す方角に進んで行く。

一行は肥沃なるリグワを通り、

キジョータを後にした。

マポチョーに着く予定だったからである。

ここは逃れしペンコの遺体の置かれし所。

太陽は双子座の方より現れ

生きとし生ける物に新な時を齎し

至点より北斗の方を照らした。^⑤

南の地域では、この隔りにより、

真昼と雖もその陰は

最も長くして、

吹き来る風も更に気俣に、

厳しくなる。その様な時、

我々は、この地域に散在しては

思いの俣に吹き縦横に

暴力を発揮する恐れる

風を恐れる事なく、

陽気なる表情にて

慣れたる船団に乗り込み

頑丈なる錨を上げ

北西の風に身を委ねた。

海は凩ぎ、天氣は良好にして

風は順風、涼氣心地よく

空は広々と澄み渡り、

狀況は長く続くかに見えた。

この様にして六日が過ぎたが

美しき事に安定した例なき運命の神は

七日目に青空を雲で濁し、風を動かせ

わだつみ綿津見をば底より搔き混ぜた。

ここに至って凄じき朔風が力を握り

疾風となり、怒風となって吹き荒れ

穩かにして平坦なる海は突如として

大いなる山や丘となって盛り上がった。

イスパニア人は水と風の狂える怒に

嘖まれる我が姿を見て

戦が全て終りを遂げようとも

陸地に居たい気持になった。

私は自己の船に就いてのみ述べよう。

それは、烈しい嵐の海に投げ出され

秩序なく離散していた艦隊の

旗艦であつた。

けだし、かかる異常なる事態に

落ち着き払い、全てにそつ無き人が居ようか。

恐怖が乗組員のすべてを支配し、

私とても、その例外ではなかつた。

風は船に余りにも激しく襲いかかり

大地の揺れは甚だしく且つ速かだつた為、

高き帆柱の帆を捕え、

帆柱は今にも折れんばかりであつた。

然しこの荒れる天候を見て

航海士は飛び出し、大声を上げて

「帆綱を一杯に弛めろ、弛めろ、弛めろ、早く弛めろ、

うわー、風を喰うぞ」と叫ぶ。

荒れる海、激しい風、

叫ぶ声、騒音、願かけの言葉、

不吉に垂れ込めた暗雲による

突然の夜の到来、

雷鳴、無数の稲妻、

航海士たちの声と慌だしさ、

それらが一箇の物悲しき和音をなし、

恰もこの世の果ての様であった。

「帆を巻け、帆を巻け」と水夫等が叫ぶ、

「主檣の帆を巻け」、「前檣の帆を上げろ」、

この声に乗組員は氣力を得て、

綱に向って大勢が駆けつける。

他の者は素早く走って帆脚索へ、

転桁索へ、帆頭索へと押しかける。

だが風の勢いは余りにも凄じく

どの装備の制御も不可能であった。

空は裂け、海は驚いて咆え、

乱暴なる狂える風は唸る。

この時、一大音響と共に、

雲上に盛り上がる巨大な水の山が

ガレオン船の舷側を襲い、

長らく船を沈める状態にした。

恐怖に慄く人々は、

海水のみならず、予期せる死をも飲んだ。

だが神靈の加護により、

宛ら鯨が体を揺振り乍ら

その猛き鼻面にて

烈しき波を見事に打ち砕き

水を大きな輪の形に掻き廻し

広き背を水面に出すように、

船は海の下より現れ、

両舷側から洪水の如き水を流した。

吹き荒ぶ朔風は更に募り

海原を空にまで持ち上げた。

帆柱は強靱なマングローブの幹であり、

舳先の上には高き主檣帆があったが、

みんなは渾身の力と雄叫びと共に

懸命に帆を巻こうとした。

帆は弧を描き、帆柱を圧していた為、

帆桁の輪は十分に動かなかつた。

風神アイオロスは偶然からか、

或いは困り果てしカステイリア人への同情か

自らの手で猛烈なる朔風を

掻き集め、封じ込まんとした。

だが、その直ぐ近くに西風が

早くもその鎖を切つて戸口にいるに気付かず

洞窟の扉を開けると、風は、今ぞとばかり

海に向つて吠え乍ら飛び出した。

風は物凄い勢で吹き荒れ、

途中で出会う悉皆の雲を薙ぎ

盛り上げる海に身を投じ、

黒き渦巻により夜を一層暗くし、

突発のこの北西風の

進路を辿り居し

猛々しき波濤を回復させ、

怒り立ち騒ぐ海を、更に騒がせた。

雨風と横殴りの風と

烈しい氷雨が俄かに船を

片方に揺さぶり、かくて船は傾き、

高き檣が海面に降りてきた。

その勢たるや余りにも唐突なる故、

一同はまだ帆を巻き終えていなかった。

乗員たちは、海岸と荒ぶ風を見て

苛酷なる運命に希望を引き渡した。

船は海と風に抗い

竜骨を見せながら進んだ。

或る時は盛り上った水の山脈を歩き、

或る時は水の下に全く隠れた。

この時一際強く風が吹き

荒れ狂う水に広漠たる扉を開くと

前檣の帆脚索は切れ

舳に近き辺の舷側は殆ど壊滅した。

船は遂に沈没したものと

人々は思い、悲鳴が上がった。

彼らは逆境に遇い命令を下し得ぬ

操舵長をじっと眺めていた。

ある者は「座礁だ」と言い、或る者は

「止まれ」、「舵を舷側に廻せ」と言う。

また或る者は取り乱し、最後の手段とばかり

艙口の板を、或いは丸太を探した。

恐怖は増大し、叫声は倍加した。

或るものは「海へ」と言い、或る者は「舳を

風より外らせ」、或る者は「帆を巻け」、

又それに答えて「舳を風に向ける、帆を

巻くな、さもなければ万事休す」、或る者は

「道具を、斧を出せ、檣は船の上部を削除

すべし」と叫ぶ。人は皆、雑然たる群をなし

右に左に、懸命に走る。

太き綱も細き綱も

荒れ狂う西風に引張られて軋んだ。

そして膨張せる怒濤は

近き岩に碎けて唸りを上げ、

辺りの暗黒と

複雑に重なる暗雲を貫いていた。

この様にして阻しい巖に激突せる

白き滴は天に達していた。

真横からの風に加えて

岩礁に充つ荒磯の近き故、

海岸の巨大な返し波で

砂混りの水は沸騰していた。

帆脚索は切れ、綱は伸び切り

前檣は三角帆の桁を外れ

猛り狂う風に

微かな希望も奪われていた。

神に栄光あれ

訳注

第一歌章

- 一 スペインの他の叙情詩にもよく見かけられる、芸術的な意図の表明の文句。
- 二 エルシーリヤは一五四八年、十五歳のときフェリーペ皇子の小姓となった。
- 三 南の海 (Mar del Sur)。Mar Australとも言われた。太平洋のこと。
- 四 大洋 (Mar Oceano) は大西洋のこと。
- 五 インガ (Inga) インカ (Inca) のこと。
- 六 マウレのプロマウカエス (Promaucaes de Maule)。カチャポアル川とマウレ川に挟まれたチリ中部平原の土着

民。

七 Don Diego de Almagro (一四七五—一五三六)

- フランシスコ・ピサロと共に、ペルーの各地で征服に加わった。一五三五年、国王カルロス五世は彼をペルー以南の地域の前線総督 (adelantado) に任命した。
- 八 現在のコンセプション市。バルディビアは一五五〇年、この都市を建設した。

第二歌章

- 一 オンゴル。後出のアンゴルと同人物。
- 二 ベネチアをトルコの脅威から解放したレバントの海戦 (一

第三歌章

一 レグワ。約五・六キロメートル。

五七一年十月七日)に言及したもの。艦隊の司令官はカル

ロス五世の王子ドン・フワン・デ・アウストリアだった。

エルシーリヤは叙事詩の伝統に従って、第二十四歌章でこの戦の模様を描写している。

三 騎士道物語の名残を思わせる。武器を木の枝に吊す場面は

アリオストの『怒れるオルランド』の第二十四章にもある。

四 ディアーナ。月の女神。

五 ポイボス。太陽神アポロの呼称。

六 アウローラ。曙の女神。

七 テイトンの妻。アウローラのこと。

八 ファエトンの車。太陽を詩的に表現したもの。

九 その友。アウローラのこと。

一〇 レオカンの子。カウポリカンのこと。

一一 ギリシア神話に現れる片目の巨人。

一二 ベローナ。ローマ神話の軍の女神。

二 プブリウス・デシウス。ローマの愛国者

三 クリウス。ローマの伝説的な愛国者。ホラティウス。ロー

マの英雄。スケボラ。肉体的な苦しみに耐えたローマの人。エトルリアの国王ポルセンナの殺害に失敗した罰として右手を焼かれた。

手を焼かれた。

レオニダス。スパルタの王。ペルシア軍と勇敢に戦って戦士した。

四 フリオ。ローマの救い主にして第二の建国者。マルセロ。

ハンニバルと戦った有名なローマの将軍。フルビオ。エル

シーリヤは多分、ハンニバルの同盟都市カプアを占領したローマの執政官クイントゥス・フルビウス・フラクスについて述べているものと思われる。

いて述べているものと思われる。

シンシナトゥス。厳格さで知られたローマ市民。

五 マルコ・セルギオ。ハンニバルの軍と戦って勇名を馳せた

ローマ人。

フィロン。ローマの独裁者。平民出身としては最初の人。

スケバ。シーザーの百人隊長。盾に百二十本の矢を受け

たが要塞を守った。

デントートゥス。ローマの英雄。

者はこの著名な学者を引用することで作品に権威を持たせようとしたものと思われる。

第四歌章

一 恐らく、隊長ガルシーア・ウルタード・デ・メンドーサが

第五歌章

エルシーリヤに或る事件で死刑を宣告した（尤も後に撤回

一 モンヒベロ。イタリア語でエトナ火山のことを言う教養語

されたが）ことを暗示したものであろう。同じ言及は第二

(Mongibello)

十六歌章にも見られる。なお、この事件に関しては本学の

二 ポンペイウス。(Gnaeus Pompeius)。古代ローマ時

雑誌Estudios Hispánicos No. II, 二九五の拙文参照。

代のシラの將軍。元老院に反対する最初の三頭政治の一員

二 「フランスの十二対」と呼ばれたシャルマーニュの騎士た

で、ファルサリアでシーザーに敗れ、エジプトで殺害され

ちに因んだもの。「名だたる十二人」はアレキサンダーの

た。

騎士物語に現れる「名だたる九人」をもじったもの。

三 ペレウスの子。アキレスのこと。

三 フェルナンドカトリック王に仕え、ナポリ国王をスペイン

の支配下に置くのに貢献した勇名なスペインの軍人、ゴン

第六歌章

サロ、フェルナンデス・デ・コルドバ (Gonzalo

一 名誉ある処刑方法。コバルビアスによれば、「カステイリ

Fernández de Córdoba 一四三—一四五) のこと。

アでは貴族は斬首される」とある。絞首又は獄吏による体

四 エストレーリヤ。Juan Cristóbal Calvete de Estrella.

罰は不名誉とされた。

フェリペ二世が王子だった頃の、廷臣たち(エルシーリヤ

二 テイフェオ。ゼウスにより亡ぼされ、エトナ火山の下に埋

もその一人)の教師であったアラゴン出身の人文学者。作

められた神話上の怪物。

第七歌章

一 川の名と存在を失う。ダンテの「神曲」の煉国（五の九七）を思わせる表現。

二 プロローニユは「燕」のフィロメーナは「小夜啼き鳥」の意。

トラキアの王テレオの迫害から逃れて小鳥となった二人の姉妹プロローニユとフィロメーナの神話を思わせる。テレオは妻プロローニユの妹に暴行を加えたので、姉妹は王にわが子を食べさせて復讐する。

三 スペイン生まれのローマ詩人ルカーヌスの作品『ファルサリア』の故事に因むもの。

第八歌章

一 オリオン。神話に現れる虚だな狩人。同名の正座。黄金の武具を纏い、手に劔を以て空に輝く。

第九歌章

一 この文章はエルシーリヤがまだ新大陸にいた折に書かれたものと推定される。

二 この場合、太陽の位置は春を示す。

三 運命の女神、又は運命のこと。

四 ウイルギリウスの時代より慣用敵に用いられてきた残虐さのイメージ。（エネイダIV、二二六七）

五 アトロポス。ローマ神話のパルカたち（Parcae）、すなわち生死を司る運命の三女神の一人。生命の糸を切る鎌を持つている。

六 イカロス。デダルスの子。二人はミース王に幽閉された。

デダロスは二対の翼を作ったが、蠟を用いたため迷宮を脱することができた。イカロスは太陽に近づき過ぎて蠟が溶け、エーゲ海に落ちて溺死した。

七 原文は *viva quien vence*: 敗者が勝者に従う時の決まり文句。

第十歌章

一 ファエトンの車、つまり太陽のこと。

二 アンテオ（Anteo）。ポセイドンと大地の女神の子でリアの巨人。旅人たちに闘いを強要しては殺害した。ヘラ

注

クレス（アルシーデス）により殺された。

三 戦闘の途中で次の歌章に移るこの技法は第十四及び第二十九歌章の末尾にも見られるが、シュバリエに依れば、アリオストの影響である。

第十一歌章

一 ピジャーノの息子。「悪魔の子」の意。ここでは狡知に長けたインディオの酋長の子、ラウタローのこと。

二 第十歌章の第二十八連参照。

三 二匹の犬の比喩はアリオストの『怒れるオルランド』Ⅱ、5、二六に由来する。

第十二歌章

一 Ciudad de Reyes. 現在のペルーの首都リマ市の旧名。

二 原文ではLibicoとあるが、イビコ (Ibico) の誤り。この名のギリシアの詩人は殺されたが、犯人たちの一人が鶴の群の飛んで行くのを見て「この鶴の群はイビコの死の証人だ」と言ったことから犯行が発覚し彼らは捕らえられた。

三 常に少数で戦ってきたスペイン人にとって、インディオ一人の挑戦に応じるのは不名誉なことであった。

四 歎座から水瓶座にかけてと言うことは、十月廿四から一月廿日にかけてであり、南半球では春から夏の初めに相当する。

五 ドン・フワン・アンドレス・ウルタード・デ・メンドサ (Don Juan Andrés Hurtado de Mendoza) ・フェリーペ皇太子により副王に任ぜられ、一五五六年六月二十九日、現在のリマ市に着任した。

六 暴君。国王に謀反を起こし、一五五四年絞首刑に処せられたフランシスコ・エルナンデス・ヒロン (Francisco Hernandez Girón) 七 分配。インディオたちを分ち与えること。

第十三歌章

一 タボガ。Taboga. パナマ湾（太平洋に面する）の小島。ヘロニモ・デ・アルデレーテ Gerónimo de Alderete はフェリーペ二世によりチリの知事に任ぜられたが病を得

て一五五六年四月この地で没した。

第一四歌章

一 クリシエ。Ochie. 詩的表現でヘリオトロープを指す。ギリシア神話の、オケアノスの娘で、レウコトエの妹。アポロンに思いを寄せるが、その妹のせいで見捨てられ、花となり、絶えず太陽に顔を向け、慕い続ける。

第一五歌章

一 イベロ人。(el Ibero)、メディーナは詩人ルカーノ(Lucano)の事だとしているが、同じくイスパニアの詩人ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ(Garcilaso de la Vega)とも考えられる。

二 アルシデス。第十歌章の註一を参照。

三 四元の二つ。空気と大地のこと。

注
四 シラ。Lueius Cornelius Sulla 又は Sylla. (前一二七—七八)。残虐なローマの独裁者として知られている。

五 カンプス・マルティウス。(Campus Martius) テイベル

川左岸の平原。運動競技や軍事演習に用いられた。

六 南半球では夏の開始と共に太陽は山羊座の域に入る。

七 太陽が双子座に入るのは五月廿一日だから、南半球では冬の始まりということになる。

訳者あとがき

本書はスペイン文学の黄金時代（十六世紀後半から十七世紀末まで）における代表的な叙事詩人、エルシーリヤ（Alonso de Ercilla y Zúñiga）の『ラ・アラウカーナ』（La Araucana）第一部の邦訳である。全体は三部から成り、詩行は都合二万一千百六十行に及ぶが第一部はその中の九千六百六十八行で、全体の約半分に対応する。新大陸の発見（この言葉には異論を唱える向も無いではないが）と征服の時代の文学は、最初はもちろんその大事業に参加した人たちの記したいわゆるクロニカ（Chronica）つまり記録と、その感動を謳い上げた叙事詩から成ると言えるが、前者は所詮、生々しい史料としての価

値が大部分を占めていると言っても過言ではない。その理由は、それらを書き記した人たちは必ずしも教養豊かな人ではなかったからである。大方はそれによって自己の功績を国王に認めてもらう事に重きを置いていた。それに対して叙事詩は、ルネサンスの教養を身につけた優れた文人の作品だけに、最初から文学的な価値も高かった。新大陸の文化と文学はやがてスペイン人と土着の人との混血による新しい人間によって開拓されるようになってゆくのであるが、『ラ・アラウカーナ』は、新大陸の新しい歴史の黎明期における記念碑的存在であると同時に、作者エルシーリヤはこの叙事詩によって、スペイン

文学に不巧の名を留めることになった。

与えられた紙幅の大部分が原文の邦訳に費やされた事情もあり、エルシーリヤの人と作品について詳述することは困難となったので、この際、できる限り簡潔に、最も重要と思われる事項についてのみ述べるに止めたい。

なお訳出の底本としては

Alonso de Ercilla, *La Araucana* I, edición, de

Marcos A. Morinigo e Isaías Lerner, 2a edición,

introducción y notas (Clásicos Castalia, Madrid 1987)

を用いた。これはエルシーリヤの生前における最新版(マドリード版、一五八九—一五九〇)に従うものであるが、同時に、今回の訳出には含まれないが、一五

九七年、彼の没後出版されたマドリード版の追加部分、すなわち第三十四歌章の第四十五連以降と第三十五歌章全部、及び第三十六歌章の最初から第四十三連に至るまでが収録されている。訳出に当ってはとりわけホセ・トリビオ・メディーナ (José Toribino Medina) 氏の古

典的な研究書五卷(卷末の参考文献参照)に負うところが大きい。十六世紀末のスペイン語である事を考え、同時に現代の読者を考慮に入れて擬古文的表現を試みたが、俚ならず拙訳の謗を免れ得ないことを恐れる。

エルシーリヤの生涯

ここでエルシーリヤの伝記的側面に触れておきたい。

エルシーリヤは一五三三年、法学者で枢密顧問官でもあったフォルトゥン・ガルシーア・デ・エルシーリヤを父とし、ビスカヤ地方はベルメオ出身の貴族、ドニャ・レオノール・デ・スニガを母として、その第六子としてマドリードに生れた。満一歳の時、父は急死し、未亡人となった母は一五四四年生地に暮すことになるが、ある訴訟事件に巻きこまれて土地も収入も失う。更にその年長男がマドリードで死亡し、困窮したドニャ・レオノールは次男を教会に託し、残りの子らをかかえて、夫のことを知っていたカルロス五世の援助を要請した。一五四八年、聞

き入れられて王女ドニャ・マリア（ハンガリーとボヘミアの国王マクシミリアン二世と結婚したばかりだった）の侍女となり、一五歳だったアロンソは皇太子フェリーペの小姓としてスペイン領以外の各地への旅に同伴することになる。一五四八年十月バリャドリーを出発して三年間、ジェノバ、ミラノ、トレント、インスブルック、ミュンヘン、ルクセンブルグなど各地を訪問の後、一五五一年バリャドリーに戻った。当時フワン・ヒネス・デ・セプルベダとラス・カサス神父との間で起ったスペイン人の、アメリカ大陸の原住民たちとの戦いの正当性についての論争の熱気がまだ残っていた。その年の暮れ、ドニャ・マリアの随員として、母や姉妹を連れてウィーンに行き、三年間そこで過ごした。二十一歳の時バリャドリーに戻った彼は再び皇太子の小姓となる。彼の教養、特にラテン文学の素養は、この頃宮廷の人文学者で家庭教師だったカルベーター・デ・エストレーリャに負うところが多い。とりわけウィルギリウスとルカーヌスの詩の影響が『ラ・アラウカーナ』にしばしば窺える。その他、

ダンテ、ペトウルカ、ボッカチオ、そして中でもアリオストは彼にとって身近な存在であったに違いない。

さて、一五五四年、フェリーペ皇太子と英国王室のメアリー王女の成婚に因んで、彼は随員の一人となる。チリの硯学ホセ・トリビオ・メデイナ氏によれば、彼はイギリスからフランドル地方に赴き又すぐロンドンに戻ったらしい。たまたまペルーでのフランシスコ・ヒメネス・ヒロンの謀友と、チリでバルディビアのアラウカ族の手にかかって死んだ知らせが届いた。

すでにインディアスに関する権限のあったフェリーペはペルーにアンドレス・ウルタド・デ・メンドサを副王として、またチリにヘロニモ・デ・アルデレーテを長官として派遣することにした。エルシーリャは皇太子から、アルデレーテに従ってペルーとチリに旅する許可を得た。スペインに戻った彼は、結局、一五五五年十二月初旬、カデイスの港を発った。翌年四月、パナマの近くのタボガ島でアルデレーテ長官は病に斃れた。エルシーリャは新副王に随行してリマに着いた。そこからアラウカ族を

懲らしめるべく、長官兼遠征隊長に任ぜられた副王の息子ドン・カルシアに従って五七年二月二日、カリヤオの港を出帆し四月廿三日ラ・セレナに達し、その二カ月後、冬のさ中に反逆者たちの地に出かける。彼によれば非常な嵐に遇い乍ら六月廿八日コンセプションに着く。だが嵐のあった事の真偽の程は疑わしい。

それ以後は五八年の末にペルーに追放されるまで、戦いの目撃者であり、主人公であった。(その間の出来事については後述する) 一五五九年二月末ごろリマでは経済的にも困窮し、且つ恐らく副王の覚えもよくなかったものと思われる。エルシーリヤはフェリーペ二世に正当な擲きと援助を要請し、王は副王に「身分と功績に相応しい食事を与えるよう」命じた。が一四カ月も後れて着いた。しかし副王はその間、徐々にその態度を改め、一五六〇年末には側近として取り立てていた。六一年九月頃にはその職をニエバ伯爵に譲り、ロペ・デ・アギーレに対する懲罰隊に加わる。十一月、パナマでこの男の死を知り、スペインへの旅を続け、六三年の半ばに帰り着

いた。結局、アメリカ大陸への冒険の旅は七年半続いたことになる。

マドリードでは王に拝謁し、歓迎される。少し後、マクシミリアム二世の後の侍女となっていた姉マリア・マグダレナがドン・ファドリケ・デ・ポルトガルと結婚(二五六五年の初め頃)したが三カ月後に死亡、遺産の相続者となった彼は経済的にも恵まれ、リマでの後継者として四年間の給料の支払いも受けた。これにより宮廷人との付き合いも人並みにできるようになる。一五六八年、『ラ・アラウカーナ第一部』の自費出版を志し、その年の末、六九年三月出版のための許可を得たが、すでに当時の習慣に従い、印刷は終わっていた。こうして第一部は当時の人たちの目に触れるところとなり、冒頭でも述べた通り、非常な成功を収め、一躍有名になった。一五七〇年、時の皇后ドニャ・イサベル・デ・バロアの侍女であった若くて裕福で美しいドニャ・マリア・デ・バサンという名門の女性と結婚し、翌七一年十二月廿一日付でサンティアゴ騎士団に入る名誉を得、三年後には姑の死

により、妻の財産を所有する事となる。時に四十歳。彼は『アラウカーナ』の続編を書く傍ら、騎士団の定めや、生来の旅好きも手伝い、家の事は夫人に任せてカルタヘナへ、ナポリへ、ローマへ、北部イタリア各地へ、ドイツ各地へと二年八カ月の間外地で過ごした。一五七八年、『ラ・アラウカーナ』第二部を出して更にその名を高め、フェリーペ二世の好遇を受けたが、託された外交特使の使命を果し切れず、以後、不興を買い栄達の道は閉ざされた。しかし一五八二年にはアソールス諸島の征服に向う艦隊に乗り込むべく、リスボンに赴いている。多分、アルヘルでの幽囚の身から解かれたばかりのセルバンテスと会ったと思われる。一五八五年に出た『ラ・ガラテア』に現れるエルシーリヤの引用と言い、『ドン・キホーテ』における彼に対する惜しみない讃辞と言い、二人の間の親しみを示すものばかりである。一五八九年、彼は『ラ・アラウカーナ』の第三部を発表したが、これは、作品全体の中でも、殆んど三十年前にチリで書き留めた最も個人的な部分で、且つそれまで公表されていなかった

たものである。一五八五年以降の彼の身边における不幸なでき事の連続（八六年には妹のドニャ・マリアが亡くなり、八八年には息子ドン・フワンが無敵艦隊の「サン・マルコス号」の難破で死亡した）と併せて、老年期の予感、それに国王の恩恵が日々に疎遠になっていったことなどが、この第三部の最後の、憂愁と苦悩に充ちた数連の詩を書かせたものと思われる。そして一五九四年十一月廿九日、六十一歳の生涯を閉じた。

『ラ・アラウカーナ』における詩と真実

エルシーリヤは、第一部の第十二歌章で（第六九、七〇、七一連）で、それまでに述べてきた事はすべて双方の、信用するに足る話に基づくものであり、されから述べるとする事は自分が目撃したものとして証明することができると言っている。更に第十五歌章では一五五七年四月廿三日、コキンボに一旦上陸し、ラ・セレナの町を訪れた旨が述べられており、更にその二カ月後には、冬

のさ中に、海路、チリ南部のコンセプションの近くの、キリキナ島に達している。彼はここで初めてイスパニア軍の侵入を阻む武装したアラウカ族に出くわす。(第十六歌章)。突然の天候の変化に「不吉な予兆」を感じたアラウカ人は女、子供、食糧を残したまま逃走。イスパニア軍は逃げ後れた何人かを捕らえて、自分たちの目的を説明する。それは、彼らをキリスト教徒となし、イスパニア国王に従わせることであつた。イスパニア軍は寒さに耐えながら、大陸に移る好機を待ち、二カ月後にそれを実行した。砦を築き、予告されたアラウカ人の襲撃に備えたが、この襲撃は、ゴンゴラ・イ・マルモレーホによれば一五五七年八月廿五日、ホセ・トリビオ・メデイーナによれば八月十日、イスパニア軍が、エルシーリャによればサン・カントンでフランス軍に勝利を収めた同じ日に起つた。彼女はここで初めて戦闘に加わるのだが、午前中の戦いの模様を六七連を費やして描写している。第二十歌章では(第二十連)疲れ切つたイスパニア軍が、再度の襲撃に備えて、要塞を修理するが、アラウカ

人は退却。兵員や馬で増強されたイスパニア軍は十一月初旬、敵を追つてビオ・ビオ河を渡る。敵前渡河だけに、非常な勇気が必要であり、後世の史家はイスパニア人のこの勇敢な行動に多くのページを費やしている。しかしエルシーリャは僅か数行で片づけている。それに反し、敵軍の攻撃と勇敢な蛮人トゥカベルと彼の交えた戦闘には四十連に及ぶ記述がある。この戦でエルシーリャは敵ながら勇敢で立派な行動に感心する。そして惜しみなない讃辞を贈っている。やがて遠征隊は、まだビジャグランの揮いる兵士たちの(第五歌章参照)白骨の横たわるアングリカンの坂に向けて進み、ここに露營し、和平のための使者と同時に敵の所在と意図を探る別動隊を派遣する、が前者は遂に帰らず、後者の一員であつたエルシーリャは、途中で迂闊にも捕まつた敵方の者を問い詰めるが情報を得られぬまま、他の者と共に引き返す。二週間後、ドン・ガルシージャは陣地を引き揚げ、ミジャラプエまで前進する。エルシーリャによれば、カウポリカンの使者が現れ、翌朝払暁、一騎打ちを行いたいとの挑戦を

伝える。ドン・ガルシージャは承諾し、定められた場所に赴くが、現れたのはカウポリカンではなく、彼の揮いるアラウカ軍であった。イスパニア軍はこれを予期していたため驚かず、両者の間に戦闘が始まる。エルシーリヤは八十四連に亘ってこの熾烈な戦いの模様を描く。八千乃至一万のアラウカの軍勢のうち千人が斃れた。

イスパニア軍は勝利を収め、やがて一五五七年十二月五日、トゥカペルに移る。かつてバルデイビアが建てた家や砦を修理し、ここを根拠地として各地は攻略に出かける。アラウカ族の激しい抵抗に苦慮したドン・ガルシージャは町を建設して住民を安定させようと試み、部下に命じてインペリアル町まで必要な食糧の調達に向かわしめる。エルシーリヤも一行に加わり、一五五八年一月廿二日、目的地でパン、果物、家畜などを入手（第二十七歌章、第五十九連）、持ち帰る途中、ペレンの山峡で敵の待ち伏せに会う。敵軍が戦利品に有頂天になっている隙を突いて反撃し、町に戻る。

エルシーリヤはカニエーテの町の建設の事情に触れ、

建設間もないこの町にカウポリカンの軍が攻撃を加え、そして敗北する様子を一〇四連を費して描いている。十三名の酋長の処刑の様子が生々しく語られる（第三十二歌章、第二十連）。イスパニア軍は、かつてバルデイビジが足を踏み入れたことのない南の方に向かうが、途中、現地の案内人の逃亡や裏切りで散々な目に遇う。やがて海に見える所まで到達し、マゼラン海峡に誓いと思いこむが、インディオの案内する船に乗って着いた山はチロエ島であった。エルシーリヤはこの島の奥地に一人入りこみ、とある木の幹に、自分がここに着いた最初の人である旨を彫り込む（第三十六歌章、第二十九連）。同僚の許に戻り、インディオの案内で、ラ・インペリアル町に着く。エルシーリヤの生涯に関して先に述べた折に触れた事件はこの地で起った。ドン・ガルシージャに同行中の兵士たちの間で喧嘩が起り、エルシーリヤが刀に手をかけたことから、無作法な振舞いを咎めんとドン・ガルシージャは極刑を申しつけた。エルシーリヤはこの事件を作品の中で（第三十六歌章、第三十三連）述べている

が、このような叙事詩の中で、遠征隊長への讃辞を惜しんだ異例とも言うべき詩人の態度の原因の一つは、恐らく、アラウカ人の勇敢さや愛国心へのへの感嘆もさることながら、この辺にあると思われる。

以上が、この作品に見るエルシーリヤの証言であるが、全体で二万一千行を越える分量の六分の一を占めているに過ぎない。詩人はこの様な体験を中心として、巧に様々な描写をつけ加えた。その巧な空想の業によって、いつの間にか、内容のすべてが史実であるかのような錯覚を同時代の読者たちに起こさせたのみならず、彼と遠征を共にした人々までも、この作品の記述を根拠として、各自の功績書に引用したほどであった。同時の著名な歴史家ゴンゴラ・イ・マルモレーホさえもエルシーリヤの作品の権威に引きずられた程である（Góngora y Marmolejo, *Historia de Chile*, BAE, tomo CX XXI, XXXVI）。作品に登場するアラウカ族の英雄たちの名前も実名と見なされ、以後のスペイン文学に登場する。

この作品がこれほどまでに信用された原因としては、先ず、当時の読者たちの間に、ある限度を越えない限り、並外れた事柄の記述も受け容れる素地があったことが挙げられる。『ラ・アラウカーナ』の出た頃権威を失いかけていた騎士道物語の欠点は、余りの荒唐無稽に陥ったことであつたが、エルシーリヤのこの作品には、この点で節度を保っていた。例えば第二十一歌章で、自分の妻に恋する怪物と戦い殺さねばならないグワレモの父の話も、「真偽の程は知らぬが、伝えるところでは」と断ることによって真実味を損なわずに済んでいる。また、彼の時代までは、歴史家その作品の中に伝説や小説めいた話を挿入することに対して余り批判的でなかったし、逆に、虚構の作品も、これは実話であると言って憚らなかつた。この事を考えるとエルシーリヤが敢えて史実を歪曲しようとしたとするのは間違ひであろう。一方、十六世紀の風潮として歴史は虚構の作品よりも上位にあると考えられていた。尤も優れた典型的文学作品として知られているものは別だったが。従つて、この様な中世的伝統

も考慮に入れる必要があった訳である。騎士道物語が歴史書的な体裁を必要としたのもそのためだった。アリストテレスはその『詩学』において、歴史家は専ら事実のみ依拠し、真実に何物も加えてはならず、またそれから何物も除いてはならないが、詩人は出来事をありのままではなく、なし得る限りにおいて、またあるべき姿において語るべきであると述べているが、エルシーリヤはまさしく詩人の目で、この民族の争いという一大出来事を一つの詩的現実として描いたに違いない。

詩の形式

三十七歌章に及ぶこの長い叙事詩を通じて、用いられている詩形は、オクタバ・レアルすなわち十一音節の八つの詩行から成るものである。この事は、批評家も詩的しているように、全体の構成を、変化の乏しいものにして、単調なものとしている。この様な特徴は、当時一般に古典詩人たちが作品の中に多種多様な詩の形式を用いてい

る事を考えれば、一きわ目立つと言わざるを得ない。

そもそもオクタバ・レアルなる詩の形式はイタリア起源のものであり、イスパニアでは十六世紀から用いられ始めた。先述のように十一音節の詩行八つから成り立つものであるがその押韻の方法は次の用になっている。

第1, 第3, 第5行……A韻
 第2, 第4, 第6行……B韻
 第7, 第8行……C韻

『ラ・アラウカーナ』の場合を具体的に示せば、次のようになる。なお韻はすべて同音韻となっている。

“Por las puertas y frente y por los lados. A
 El muro se combate y se defiende; B
 Allí corren con prisa amontonados A
 A donde más peligro haber se entiende: B
 Allí con prestos golpes esforzados A

A su enemigo cada cual ofende
 Con furia tan terrible y fuerza dura
 Que poco importa escudo ni armadura.

B Primera y Segunda parte de La Araucana.
 C Madrid, Pierre Cossin, 1578.
 C 八つ折り版で、第二部は初版と考えられる。同年、同じ出版社から、本書の出た後、四つ折り版が刊行されている。

この用にして、三対のAB詩行と一对のCC詩行で形成されている。古典的な作詩法によれば、それぞれのABの対は完成した概念を表すことになっており、CCのケループは与えられた連の一般的概念を締めくくる役割を果たすのであるが、実際にはこの本は厳格に守られるとは限らない。

Segunda parte de La Araucana. Zaragoza,
 Juan Soler, 1578.
 第二部だけが独立して出版されたものとしては最初のものである。

『ラ・アラウカーナ』に関する文献

Tercera parte de La Araucana. Madrid, Pedro
 Madrigal, 1589.
 第三部としてはこれが初版である。同じものが一五九〇年、サラゴサで出版された。

先ず、初版から順に主要な版について列挙する。

Primera, Segunda y Tercera parte de La

La Araucana. Madrid, Pierre Cossin, 1569.

Araucana. Madrid, Pedro Madrigal, 1590.

第一部の初版本であるが「第一部」とは書いてない。

第二部及び第三部の表紙は一五八九年となっている。

一五七四年にサラマンカで、七五年にアンベールで、七七年にサラゴサで刊行されている。(扉の図版参照)

全部の詩を二冊にまとめたものとしては、これが最初である。一五九二年にバルセローナで、また一五九七年に

アンペールで同じ物が刊行されている。

Primera, Segnada y Tercera Partes de La

Araucana . Madrid, Licenciado Castro, 1597.

第二十四歌章の最後の二十四連と第三十五歌章全部、及び第三十六歌章の最後の四連を除く全部が追加されたものとしては、これが最初のものである。

La Araucana . Madrid, Antonio de Sancha, 1776

エルシーリヤの肖像とチリの部分地図、及びA .Carnizeroによる挿絵が三点含まれている。

La Araucana . Paris, Baudry, 1840 .

La Araucana . (Poemas epicos 1) , Biblioteca de Autores Españoles, Vol. 17 , Madrid, Rivadeneyra, 1851 .

La Araucana . Edición de la Real Academia Española, Madrid, Imprenta Nacional . 1866.

L, Araucana . Morceaux Choisis, Paris, Garnier, 1900 .

Jean Ducaminによるエルシーリヤの伝記的な面を合

めて、作品の文学的研究、文法、語彙といった総合的な研究のある重要な参考文献でもある。

La Araucana . Santiago de Chile, Imprenta de Elzeviriana, 1910-1918 , Edición de José Toribio Medina, 5 tomos .

エルシーリヤ及び『ラ・アラウカーナ』の研究にとつて不可欠な古典的研究書として知られている。この第四巻、一―六〇ページに、一九一〇年までに現れた四十八の版についての詳細な紹介がある。

La Araucana . Buenos Aires, Emecé, 1945 . Edición de Julio C . Caillet-Bois .

-Madrid, Aguilar, Colección "Crisol", 1946 . Edición de Concha de Salamanca .

-Barcelona, 1956 . 4a edición . Adaptación de María Luz Morales .

-Santiago de Chile, edición del Pacífico .

Clásicos de Chile, 2 , 1956 . Introducción de Hugo Montes.

— Barcelona, 1962. Edición de F. Grau.

— México. UNAM., 1962. Edición de A. Souto.

— Santiago de Chile, Ediciones Zig-Zag, 1962.

Introducción y bibliografía de Juan Loveluck.

— Madrid, Colección Austral no. 722.

Edición de A. Undurraga.

— México, Porrúa, 1968. Introducción de Ofelia

Garza del Castillo.

— Madrid, Clásicos Castalia no. 91. Edición de

Marcos A. Morinigo e Isaias Lerner. 2 tomos.

訳者の知る限り、この最後の文献は、『ラ・アラウカーナ』に関する最も新しい研究の成果を集約した貴重な文献である。訳出と解説に当っては特に本書とホセ・トリオ・メデイーナの研究書を参考にしたことを改めてここで断っておきたい。

最後に、青春時代に愛読し、折にふれて拙訳を試みた

この作品が今ようやくその体裁を整え、図らずも本

学の刊行図書の一部として上梓されるに至ったことは、

訳者にとって望外の幸運であり、関係各位に感謝する次第である。とりわけ本学イスパニア語学科の客員教授クラウディオ・バスケス氏 (Prof. Claudio Vasquez) に本書の訳出に当って長期に亘り貴重なご協力を賜ったことでここに記し、氏の並々ならぬご助力に感謝する次第である。また「詩の形式」に関する部分は同氏の寄せられた文の邦訳である。なお、作品中に現れるポルトガル語による氏に関しては本学ポルトガル・ブラジル語学科の東明彦教授のお世話になった。記して感謝の意を表します。また、例によって拙稿に最後まで目を通してくれた妻にも、この機会に感謝します。

一九九一年九月十八日 研究室にて

訳者紹介

吉田 秀太郎 (よしだ ひでたろう)

1931年香川県に生まれる。1953年大阪外国語大学イスパニア語学科卒業。1956年3月チリ大学文学部イスパニア文学科卒業。1971年より大阪外国語大学教授。イスパノアメリカ文学専攻。日本イスパニア学会会員。日本ラテンアメリカ学会会員。共編・著書『ラテンアメリカ文学を読む』国書刊行会(1980)、『和西辞典』白水社(1979)、『現代スペイン語辞典』の白水社(1990)。訳書『J・フランコ『ラテンアメリカ文化と文学』新世界社(1978)、O・パス『孤独の迷路』新世界社(1976)、A・ロア・バストス『女人の子よ』(1984)、カブレラ・インファンテ『平和の時も戦いの時も』国書刊行会(1977)など。

大阪外国語大学学術研究双書 5
ラ・アラウカーナ (第一部)
アロンソ・デ・エルシーリャ

1992年2月10日発行

訳・解説 よしだ ひでたろう
吉田 秀太郎

発行者 〒562 箕面市粟生間谷東8丁目1番1号

大阪外国語大学学術出版委員会

印刷所 〒531 大阪市北区中津6丁目13番20号

(株)アイジイ

ISBN 4-900588-05-9

無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書 既刊

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1. レフ・トルストイと革命運動 (1990) | エルヴィン・オーバーレンダー著
法橋和彦 監訳・解説 |
| 2. ロシア語アクセント研究 (1990) | 神山孝夫 著 |
| 3. 社会言語学 (1991) | フリチョフ・ハーガー 等著
乙政潤 訳 |
| 4. Dwelling Space in Eastern Asia (1991) | Richard ZGUSTA 著 |

